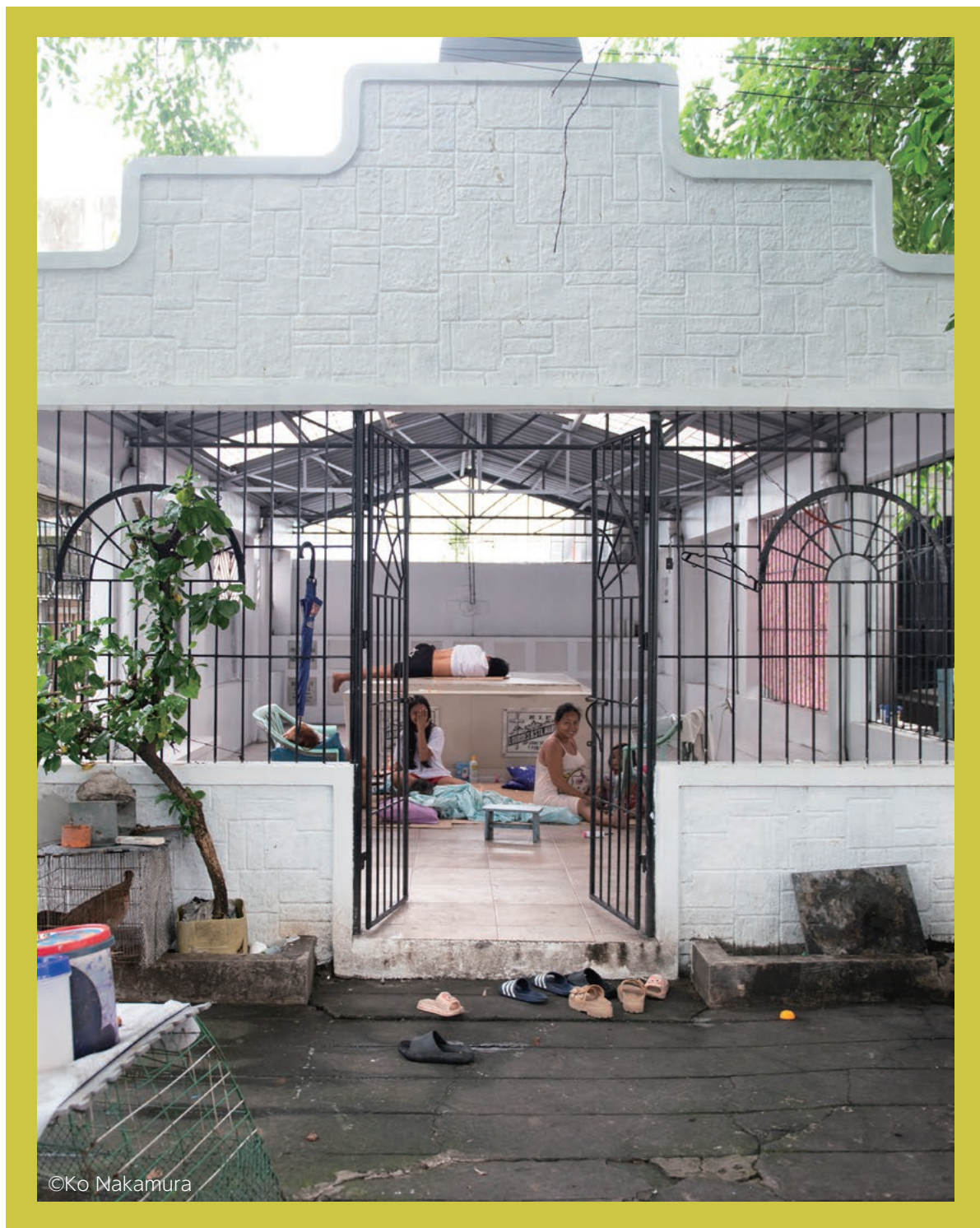


建築と社会

Architecture and Society

2026 06
vol.107 No.1251
日本建築協会



©Ko Nakamura

特集 片岡安賞

第9回 日本建築協会論考コンクール 受賞論考発表

募集テーマ：100

未来に残せる仕事を!

ドローンによる建物(壁・屋根等)・橋梁等(水管橋)やイベント(運動会・催事等)の撮影、
赤外線カメラによる調査のご依頼お待ちしております。

鴻池新田会所と旧河澄家を指定管理者として文化財管理をしています。ぜひ、お越しください!



- ドローン撮影・ドローン調査
- 特殊建築物・設備定期調査
- 指定管理者
- 消防設備点検・防災点検
- ボイラ・電気設備・空調設備・給排水等保守管理
- ねずみ・こん虫防除
- 空気環境測定
- 清掃管理業務
- 貯水槽清掃
- 警備業務(施設警備・機械警備)
- 総合案内(受付・電話交換)



建物のことならアスウェルへ!

株式会社 アスウェル

〒583-0876

大阪府羽曳野市伊賀 5-1-4

TEL:072-939-7861(代)

FAX:072-952-4304

<http://www.asuwell.co.jp>

mail@asuwell.co.jp



(株)アスウェル



鴻池新田会所



旧河澄家



日本建築協会 事務局からのご案内



U-35委員会の協力により、執務ブース・会議机・
窓際カウンターなどを一新しました(詳しくは
『建築と社会』2025年6月号44-51頁に掲載)

会員の皆様には、大川が一望できる窓辺の
ワークスペースを、タッチダウンオフィス
としてご活用いただけます。

【利用できる方】一般社団法人日本建築協会の正会員の方

【利用可能時間】10:00~17:00(但し、イベント、会議実施中はご使用いただけません。

利用状況は協会のInstagramにアップされていますが、
電話で確認することをお勧めします。☎06-6946-6981)

【利用可能場所】窓側カウンターテーブル4席、窓側大テーブル8席程度

【電源】PC用の電源は用意があります。

【その他設備】コピー機のご利用は可能です。(大量のコピーはご遠慮ください)

Wi-Fiはご使用いただけます。(リモート会議はご遠慮ください)

【喫食について】飲物の持ち込みは可能ですが、食べ物の持ち込みはご遠慮ください。

(冷蔵庫内のペットボトルは自由にお飲みいただけます)

【その他】他の会員様の迷惑になるので、複数名での会議等はできません。

Instagram





14



2

建築と社会

Architecture and Society
Journal of the Architectural Association of Japan

日本建築協会

2026 06

Vol.107 No.1251

- 特集予告
- 7月号/第73回 青年技術者
- 8月号/時を紡ぎ価値を編む：サイセイ建築の現在地(仮)

gallery

ひと・まち・建築 6

477

設備の頁 33

669

法令コーナー 34

ご意見ご要望はこちらから



36



38

2026年度 年間特集テーマ「再生」

特集 片岡安賞 第9回 日本建築協会 論考コンクール 受賞論考発表 募集テーマ：100 14

■審査報告 論考コンクール審査委員会 16

総評●松村秀一

講評●倉方俊輔

●岡絵理子

■片岡安賞 100の外側で生きる一都市の余白とインフォーマルな時間—
●小泉満里奈 20

■佳作 2045 虚構から感じる幸福な空間●白木美由紀 25
「100」をめぐる建築の哲学

—医師から居住者となった私の視点●八巻孝之 28

project 福山実践倫理会館 2

gallery デフォルメされたリアルな世界●野口理沙子+一瀬健人 6

会告 2026年度定時総会、花田佳明氏講演会と会員交流懇親会
のご案内 8

黄綬褒章受章のお知らせ、第5回新入会員ガイダンスの
ご案内 9

情報見学小委員会 主催「淀屋橋ゲートタワー見学会」 10

『建築と社会』2027年2月号「第33回 会員特集」原稿
募集中 11

2026年度 第72回工高生デザインコンクール 設計課題
『「はじまり」を灯す空間—いのちを迎え、共に育む
「建築」の器』 12

第10回 日本建築協会 論考コンクール 片岡安賞 募集要項 13

設備の頁 人工光合成触媒パネル～CO₂からギ酸を生成～
●澤中智彦、平敷 勇、前田和彦 33

法令コーナー 令和6年能登半島地震における建築物構造被害の原因
分析を行う委員会～最終とりまとめ～
●国土交通省住宅局参事官(建築企画担当)付 34

再読 松下電器体育館(現・パナソニックアリーナ) ●福原和則 36
関西の建築

Member's U-35委員会企画 AAJ U35 EXHIBITION 38
Forum 2026.03.18 - 2026.03.22

〈第9回建築セミナー〉イラストと計算例でわかる 外装材
の耐風設計・施工 48

information 江戸東京博物館リニューアル記念特別展「洋館 明治の
夢と挑戦」/トニー・アウスラー：技術と霊知のはざま
～魔術、メディア、アート～/マリメッコ展 模様のち
から Marimekko: Art of Printmaking —Beauty, Dream,
Love/奈良監獄ミュージアム by 星野リゾート 50

招待券
プレゼント!

月間の動き 2026年4月 52

表紙写真：都市の余白に生きる生活
—マニラ・ノース・セメタリー (撮影：Ko Nakamura)

福山実践倫理会館

建築主 一般社団法人 実践倫理宏正会
設計・監理 株式会社竹中工務店
施工 株式会社竹中工務店

「ロードサイド」に 佇む集いの場

全国に拠点を持つ社会教育団体の研修施設である。幹線道路に隣接するため、2階の活動空間は研修室を中心にコンクリート壁で包む計画とした。内部は2層空間にスキップフロアを設け、吹抜けや光庭を差し込むことで光を導き、生じる隙間が活動の気配を結び、建物全体に一体感を生むことを狙った。活動の気配は地窓状のスリットから微かに外へ滲み出し、ロードサイドにおける程よいまちとの距離感を生むことを目指した。

[竹中工務店]
寺谷啓史 (てらたに けいじ)



1991年名古屋工業大学社会開発工学科卒業/同年竹中工務店入社/現在、同社設計部設計グループ長

佃 良夫 (つくだ よしお)



2006年広島工業大学大学院環境学研究所修了/同年竹中工務店入社/現在、同社シニアチーフアーキテクト

佐藤 椋太 (さとう りょうた)

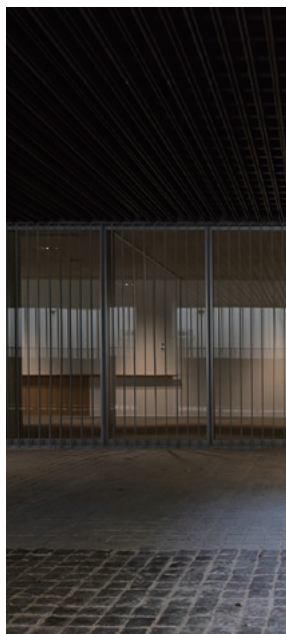


2022年北海道大学大学院工学研究科建築都市空間デザイン専攻修了/同年竹中工務店入社/現在、同社建築設計担当

羽田 大致 (はだ だいち)



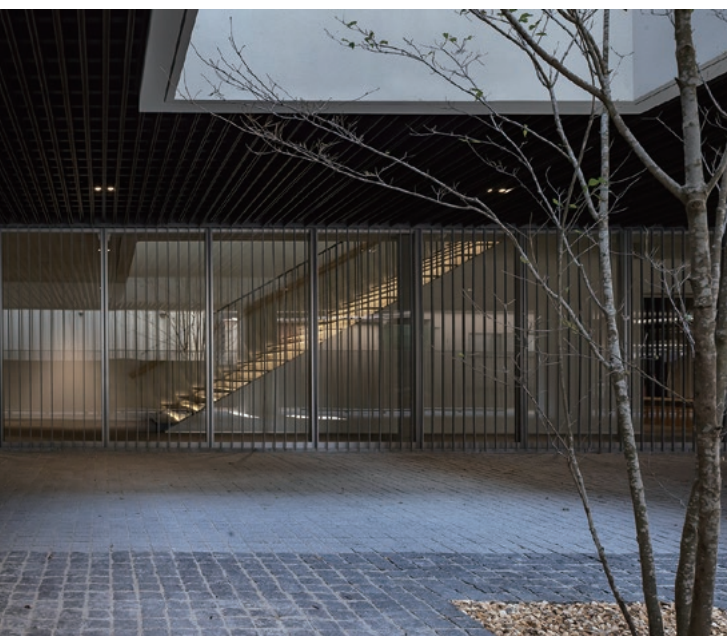
2021年島根大学建築デザイン学科卒業/同年竹中工務店入社/現在、同社建築担当



まちとの接点に外壁を3.6m跳ね出した緩衝空間*



まちとの程よい距離感をつくる西面ファサード*



駐車場に光を落とすヴォイドと、内外を繊細につなぐ軽量感のある金属格子



まちと連続させたボーダーレスな外構デザイン**



2階ホワイエ※



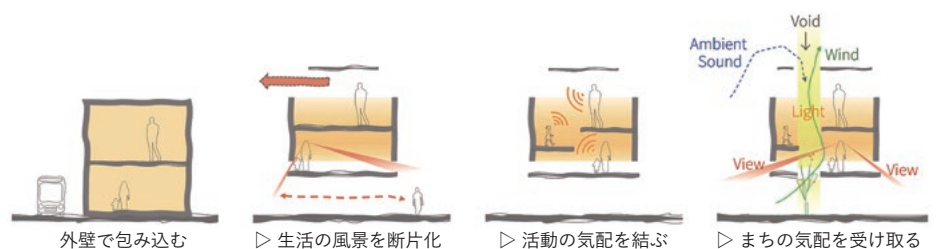
3階スキップフロア※

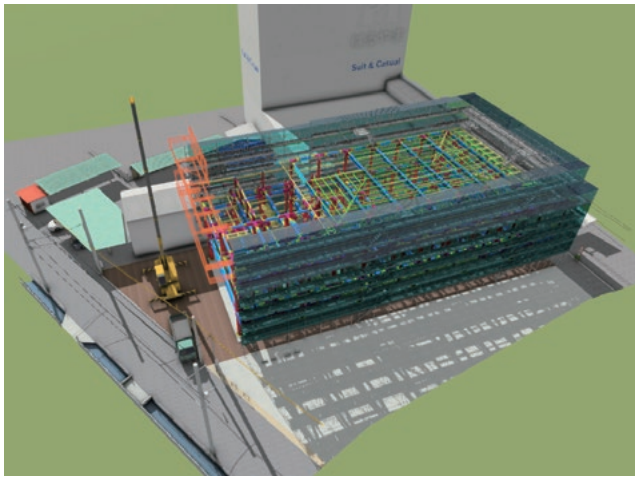
「ロードサイド」を気配として受け取る

コンクリート外壁の内側は、外部と対比的に杉板で仕上げ、温かみのある素材で活動空間を守るようにやさしく包み込んだ。そこに360度巡らされた地窓を通して、近づくほど視野が遮られ、離れるほど外部へ視線が抜ける効果を生み、建築がロードサイドの風景を心地よく受け取るためのフィルターとして機能することを期待した。さらに、吹き抜けと、3階床レベルのスキップフロアが上下階の活動を結び、居室に併設した光庭が外部の風・音・光を導くことで、ロードサイドの環境をゆるやかに内部へ取り込んでいる。

昼夜を問わず発せられるノイズが建築を通して“気配”へと変換されることで、内部の活動とロードサイドに広がる日常がゆるやかに相互貫入し、まちとともに共生する集いの場となることを目指した。

(佃良夫・佐藤椋太／竹中工務店)





BIMモデルの活用

狭小敷地における安全な施工計画

幹線道路に面し、民家を含む隣地との離隔が1m程しか確保できない狭小敷地での施工に際し、周囲への確実な安全確保を行う必要があった。この状況に対し、敷地周辺の点群測量データを用いた3Dモデルによる仮設計画を実施した。非常に高い精度で作成可能な点群測量データと各施工期中の3Dモデルを重ね合わせることで、架空線や近隣建物とクレーンの旋回軌道の離隔、仮設足場による近隣店舗看板への視認性の影響など、敷地境界に余裕がない施工において懸念される諸課題を丁寧に検証し、安全と環境に配慮した施工を可能とした。

BIMモデルの活用と効果

近年、建築業界ではBIMモデルの活用が喫緊の課題とされている。施工においても様々な活用方法が模索されているが、一般にその方法論は確立されているとはいえない。当PJではより高度なBIM活用方法を実践することで、施工計画の合理化、施工品質の向上を図った。まず1つ目は、「建築の全体構成把握・課題共有」である。シンプルな外観と対照的に複雑な内部構成を持つ本PJでは、施工上・納まり上の課題がどこに潜んでいるかを発見・共有することが困難であった。そこで、製作図着手前に協力会社を交えて3Dモデルによる外形確認を行い、課題になりそうな箇所をモデル上に記録しながら、作業所、協力会社、設計者、監理者などの複数のステークホルダーとタイムリーな情報共有を行った。2つ目は「先行デジタルツインによる施工検証」である。鉄骨モデル、RC躯体モデルをベースとし、金属パネル、屋根、手すり、造作、設備配管など、各種製作図を内勤部門と連携して即時にモデル化した。常に現場よりも一歩先の未来のモデルを先行作成することで、品質上の問題を早期に発見し、3Dモデル上での解決を図ることで手戻りのない施工図・施工計画を行うことができた。また、異業種工事間での取り合いなどの複雑な納まりにおいても、これらのBIMモデルを用いることで、打ち合わせ中に詳細な検討と方針決定を行うことができ、総合的な時間短縮に寄与した。



モックアップによる検証

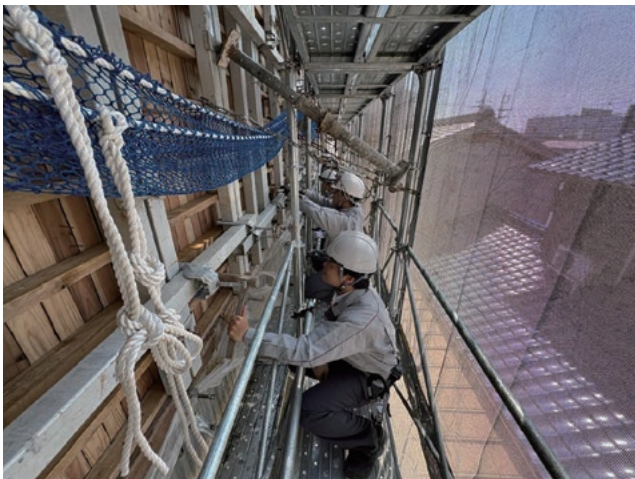
美しい杉板型枠コンクリート外壁

福山市は繊維業や木工業、鉄鋼業など、民芸から重工業まで幅広くものづくりが盛んなまちである。この“ものづくりのまち福山”にふさわしい、工芸的な美しさを持つ杉板型枠コンクリート外壁の実現を目指した。宙に浮く、高さ5.5m、最大辺43m、全長120mにもおよぶ本件の外壁では、より一層の施工精度が求められ、さらに、繊細な表情を生み出すために選定された60mm幅の杉板型枠の採用や、眠り目地（表面にシールが現れない水平打ち継ぎ目地）により、その難易度はことさらに高いものであった。施工に先立ち、コンクリートの配合、型枠の表面処理、型枠剥離のタイミング等を、実施工と同プラントのコンクリートを用いた実寸大モックアップにより検証し、細幅型枠の止付け方による面精度や、端部への充填性、表面仕上りについて、本プロジェクト固有の施工方法を構築し、美しい外壁を実現することが出来た。

(羽田大致/竹中工務店)



焼杉型枠打設前と仕上がり※右



コンクリート打設

所在地	福山市沖野上町4丁目13番26号
敷地面積	946.38㎡
建築面積	646.91㎡
延床面積	1,496.30㎡
構造	鉄骨造 一部鉄骨鉄筋コンクリート造
規模	地上3階
工期	2024年9月～2025年11月
撮影	※ 益永研司写真事務所

デフォルメされたリアルな世界

[ケンチクイラストレーター]

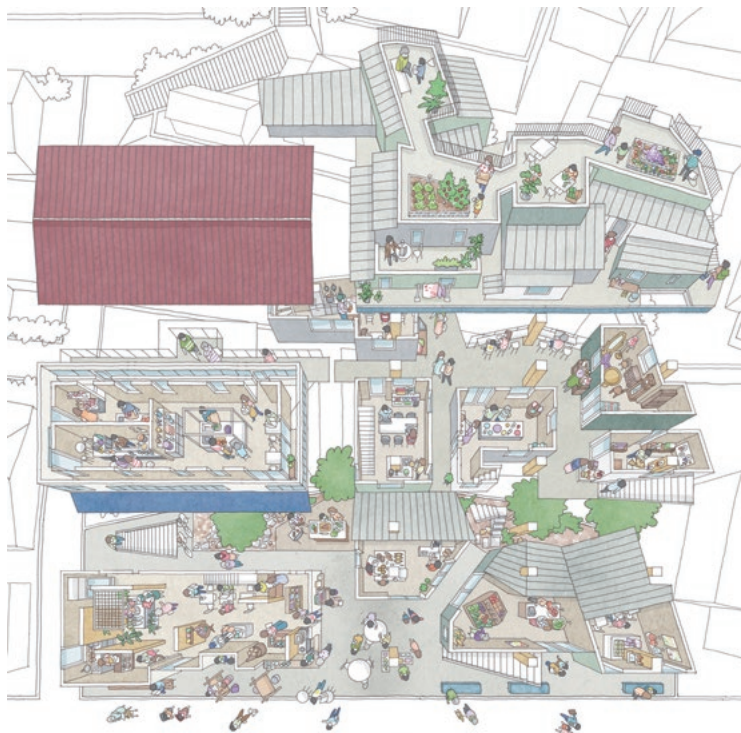
野口 理沙子 +
一瀬 健人
(イスナデザイン)

私たちは建築的思考をベースに2次元と3次元を行き来しながら“2.5次元のケンチク”に取り組んでいるユニットです。

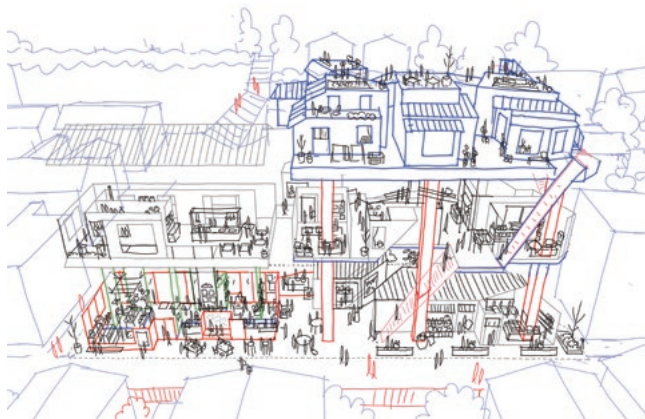
目で見えるもの“以上”のリアルな姿を再現したい、そう思いながらいつもイラストを描いています。

これは「地域のダイニングキッチン」をコンセプトにした食の拠点、『新横浜食料品センター』を描いたイラストです。こうあってほしい未来、この部分を特に意識して設計した、という設計者の意図や未来像を的確に表現することを試みました。ここでは、周辺住民の方がフラッと建物内に入り込む様子を1、2階の階高を大きくデフォルメすることで表現しました。また専有部とともに共用部をうまく使いこなしている姿が一目で分かるよう、少しでも共用部を大きくした平面バースで見せています。実際の姿と架空のイメージの間のギリギリのバランスを保ちつつ、設計者との対話を通して描くことで、その建築がもつ“リアル”を再現することを試んでいます。

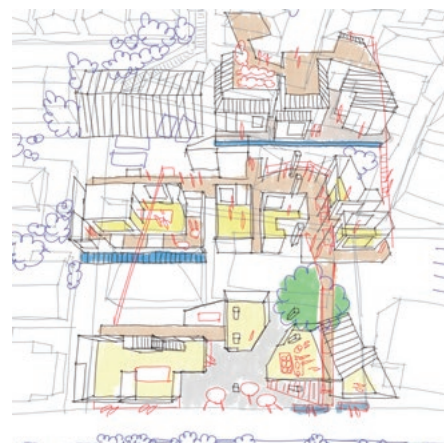
案件：新横浜食料品センター
建築設計：ウミネコアーキ



3層の平面バース。各階に活動があふれる様子が一目で分かる



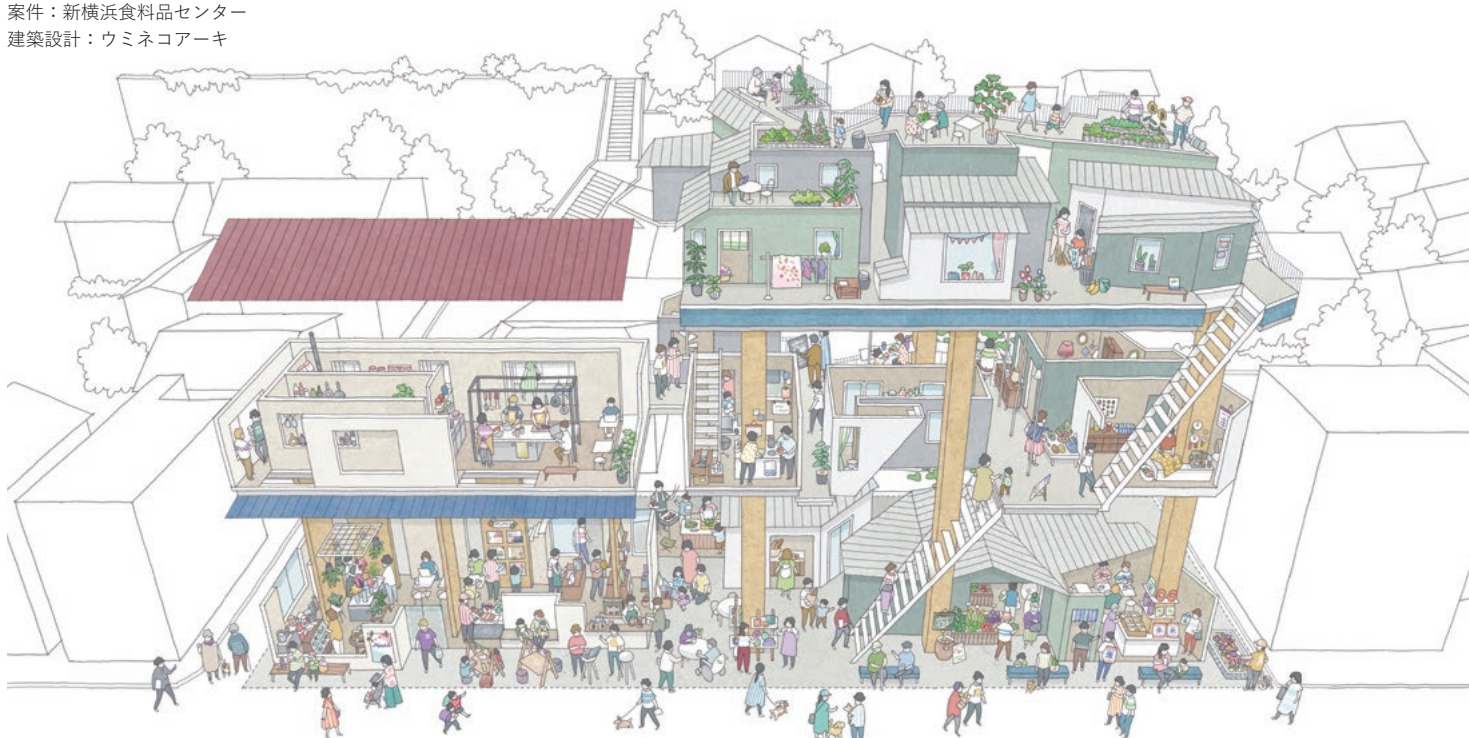
内部のアクティビティが見えるような構図の検討



各階のつながりを伝える構図の検討



写真：Eichi Tano



「建築と社会」アーカイブの検索機能が使いやすくなりました！

(検索方法は以下の手順になります)

※アーカイブ保存用のPDFはカラーです。

1. 協会トップページから「ログインボタン」を押下します



2. 会員ID、パスワードを入力しログインします

(ご自身のID、PWが分からない場合は事務局までお問い合わせください)



3. 会員ページ中ほどの「検索ボックス」に検索キーワードを入力し、発行の「新しい順」か「古い順」を選択し検索ボタンを押下します



4. 検索結果一覧の中から、閲覧したい記事の「表示ボタン」を押下します



5. 検索結果が表示されます(スクロールして閲覧できます)



◆便利機能

「CTL+F」キーを同時に押下し、検索ワードを入れると当該ワードがハンチングし表示されます



◆検索結果がうまく表示されない場合 ページナンバーカラムへ検索ページ番号を直接入力し結果を表示することができます



2026年度 定時総会

6月19日（金）に日本建築協定会時総会を開催します。
定時総会終了後に総会出席者及び会員を対象に下記のとおり講演会並びに会員交流懇親会第1部及び第2部を開催します。
多数のご参加をお願いいたします。
なお、総会開催通知は5月下旬に会員各位あてに送付する予定です。

と き 2026年 6月19日（金）
15：00～
ところ 「ホテルニューオータニ大阪」
大阪市中央区城見1-4-1
最寄駅 JR大阪環状線「大阪城公園駅」
出口より徒歩3分。Osaka Metro長堀鶴見緑地線「大阪ビジネスパーク駅」4番出口より徒歩3分。

議 題 ①2025年度事業報告（案）
②2025年度決算報告（案）
③2026年度事業計画（案）
④2026年度収支予算（案）
⑤役員改選（案）

※当日は軽装でご出席ください。

花田佳明氏講演 会と会員交流懇 親会のご案内



講演会講師
花田佳明（はなだ・よしあき）

1956年 愛媛県生まれ
1980年 東京大学工学部建築学科卒業
1982年 同大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了
1982年～1992年 日建設計
1992年～1997年 神戸山手女子短期大学
1997年～2022年 神戸芸術工科大学
2022年～現在 京都工芸繊維大学特任教授、神戸芸術工科大学名誉教授。博士（工学）。

専門は、近代建築の保存再生、建築設計理論。

主な著書に、『建築家・松村正恒ともうひとつのモダニズム』（鹿島出版会）、『日土小学校の保存と再生』（共編、鹿島出版会）、『老建築家の歩んだ道 松村正恒著作集』（編、鹿島出版会）、『植田実の編集現場 建築を伝えるということ』（ラトルズ）、『初めての建築設計 ステップ・バイ・ステップ』（共、彰国社）、『リノベーションの教科書』（共、学芸出版）など。

日本建築学会賞（業績）、日本建築学会教育賞、日本建築学会著作賞、ワールド・モニュメント財団/ノールモダニズム賞など受賞。

■花田佳明氏講演会

タイトル：
近代建築の保存再生をめぐるいくつかのキーワード
～日土小学校の保存再生などを通して考えたこと

概要：
既存の建物をできるだけ保存再生し活用するという考え方は、近年、社会に浸透してきたと思います。しかし、そもそも建物を保存するという決断を行うには、乗り越えるべきさまざまな壁があり、また、再生のためのデザイン手法は、更地に新築する場合と同じで

はないでしょう。いずれについても、建物の種類、構成、歴史的意味、社会的評価などに応じた新しい考え方が必要です。そこで、保存再生という行為がもつ課題について、私が長く関わってきた愛媛県の日土小学校などの近代建築を事例とし、具体的にお話ししたいと思います。

■講演会、懇親会の詳細

開催日 2026年 6月19日（金） 場 所 ホテルニューオータニ大阪（大阪市中央区城見1-4-1）

	①花田佳明氏講演会	②会員交流懇親会 第1部 第73回青年技術者発表、 第9回片岡安賞審査報告	③会員交流懇親会 第2部 会員相互の情報交換、交流、親交を深めるため 会員交流懇親会を開催します。
時 間	16：30～17：30	17：40～18：40	19：00～20：30
会 場	アイリスの間	アイリスの間	ウイステリアの間
定 員 いずれも先着順	80名	80名	120名
会 費	無料	無料	6,000円 (事前に下記口座へお振込みください) 振込先 三井住友銀行大阪中央支店 (普通 860034) 名義 イツバンシヤダンホウジン ニホンケンチクキョウカイ

*当日は軽装でご出席ください。

申 込 先 一般社団法人日本建築協会

申込締切 6月8日（月）

問 合 せ 電話 06-6946-6981 F A X 06-6946-6984 E-Mail soumu@aaj.or.jp

講演会・懇親会FAX申込書

〔申込区分〕（○印をお願いします）

- ①のみ参加
- ①②に参加
- ②③に参加
- ①②③に参加

ホームページでの →
お申し込みはこちらから



ご 氏 名	（ふりがな）
所 属	
ご連絡先電話	
ご 連 絡 先 メールアドレス	

黄綬褒章受章のお知らせ

このたび、当協会の理事（前会長）であり、株式会社安井建築設計事務所・顧問の設楽貞樹氏が、令和8年春の黄綬褒章を受章しました。設楽氏は、平成14年に日本建築協会常任理事、平成29年から令和3年ま

で会長、退任後も引き続き理事として活躍。株式会社安井建築設計事務所には、昭和48年入社。平成13年に同社取締役大阪事務所設計部部長に就任。以降常務取締役、監査役を歴任。現在、同社・顧問。

設楽貞樹氏は、多年、建築業界において建築設計監理業務に精励するとともに、協会活動に多大なる貢献を果たすなど、業界の振興発展に寄与した功績が高く評価されたものです。

第5回 新入会員ガイダンスのご案内

日時

2026年6月30日(火)
18:00~20:10

(受付17:50~)

【主旨・目的】

日本建築協会は1917年（大正6年）に創立され、建築に関わる多様な領域から参加する幅広い会員で構成される一般社団法人です。「建築を通じて広く社会に貢献する」ことを目的としています。

新たに会員となって頂いた皆さまが、本協会のプラットフォームを大いに活用し、交流を深め、各々の活動領域を広げられることを期待して、「2026年度新入会員ガイダンス」を開催いたします。

本ガイダンスは、「協会の活動」や「各委員会・小委員会・分科会の活動」を具体的に紹介し、「日本建築協会」をより深く知っていただくことを目的としています。

また、ガイダンスに引き続き懇親会も予定しております。是非この機会にご参加いただき、明日への飛躍の糧としていただけましたら幸いです。多くの方のご参加をお待ちしております。

【スケジュール】

<第1部 新入会員ガイダンス>

- ・協会全体や各委員会と小委員会、特別委員会の紹介
- ・顕彰制度・サポーター制度などの説明

<第2部 懇親会>

- ・参加者同士と交流していただけます。

【会場】

OMMビル204会議室+日本建築協会会議室7F

(大阪府中央区大手前1-7-31 OMMビル内)

【最寄駅】

京阪電車「天満橋駅」から徒歩1分、
Osaka Metro谷町線「天満橋駅」から徒歩1分

【参加費】無料

【申込方法】

QRコード又は、ホームページ、協会E-mailからお申込可能です。

・ホームページ<https://www.aaj.or.jp/>



【お問い合わせ先】

(一社)日本建築協会 (担当: 中内)

TEL: 06-6946-6981

FAX: 06-6946-6984

E-mail: jigyoka@aaj.or.jp



第4階新入会員ガイダンス懇親会より

情報見学小委員会 主催 「淀屋橋ゲート タワー見学会」

日 時

2026年7月15日(水)
13:30~15:30(予定)

受付開始 13:15

この催しは建築CPD情報提供制度
認定プログラム申請予定です。



お申込みはこちら

大阪のメインストリートである御堂筋の玄関口に立つ複合オフィスビルで第一種市街地再開発事業による建替えプロジェクト。

水と緑豊かな環境で大阪の文化・行政・経済の中心である中之島に面した大阪随一のロケーションに相応しい品格を感じられる外観としました。ワンフロア大阪市内最大規模のテナントオフィスと上質なにぎわいを提供する低層階の商業施設を中心に、緑豊かなオープンスペース、11階には中之島を一望できるビュースポットである屋上庭園・交流施設等を擁し、土佐堀川沿いのパブリックスペース（大川町公園）も水辺のにぎわい空間として再整備することで、大阪・淀屋橋エリアの再生・成長、にぎわい・潤いのあるまちづくりに貢献します。

建物外観は、高さ50mの壁面が連続する御堂筋沿道の連続景観と、中之島に面する水辺景観に配慮した落ち着いた色のあるシルエットとしました。外装は花崗岩打ち込みPC版による柱梁の格子フレームを基調とし、その断面を三角形とすることで、方角や時間により陰影のコントラストが変化し多様な表情をみせます。

【建築概要】

名 称：淀屋橋ゲートタワー
基本設計：株式会社日建設計
実施設計：株式会社日建設計
施 工：株式会社大林組
施設用途：事務所、店舗、駐車場
敷地面積：7,206.23㎡
建築面積：5,175.44㎡
延べ面積：132,423.82㎡
階 数：地下2階、地上29階
主体構造：鉄骨鉄筋コンクリート造
及び鉄骨造及び鉄筋コンクリート造
建物高さ：134.99m
駐車台数：227台
竣 工：2025年12月
説 明：株式会社日建設計
設計グループ
岡田泰典 氏
所在地：大阪市中央区北浜四丁目1番1号
最 寄 駅：大阪メトロ御堂筋線淀屋橋駅、京阪本線淀屋橋駅
集 合：1F北東角 円形風除室前
定 員：先着30名
参 加 費
会員：1,500円（消費税10% 136円）
一般：2,000円（消費税10% 181円）
学生：500円（消費税10% 45円）

申込方法

- ①催名
 - ②氏名（フリガナ）
 - ③会員、一般、学生の別
 - ④職場名、学校名
 - ⑤住所
 - ⑥当日連絡先電話番号
 - ⑦メールアドレス
 - ⑧CPD申請される方は申請先の団体名ID番号を明記
- お支払いについて

1. お申し込み受付後、当協会よりお支払いに関するご案内をメールでお送りします。
 2. 内容をご確認の上、指定の銀行口座へ参加費をお振り込みください。
 3. ご入金の確認が取れ次第、「参加証」をE-mailにてお送りします。
- ※振込手数料はご負担ください
ようお願いいたします。
- 備考：車いすや手話通訳など配慮を要する方は、申込時に所定の欄にご記入ください

問合せ・申込先

一般社団法人日本建築協会
（担当：中内）
TEL：06-6946-6981
FAX：06-6946-6984
E-mail：jigyoka@aaaj.or.jp



外観写真

『建築と社会』2027年2月号 「第33回 会員特集」 原稿募集中

『建築と社会』2月号では、会員のみなさまの発表の場として「第33回会員特集」を予定しています。会員特集は、年に一度のみなさまの貴重な発表の場です。ぜひご応募ください。

対象は建築、ランドスケープ、インテリア、まちづくり、アート等空間に関わるものの他、建築構造や設備に関する話題、みなさまの様々な活動や思い（心に残るまちなみ、旅行記、仕事以外の趣味の紹介、なにげない日常の風景、日ごろ感じていること…）などを広く募集いたします。

自由な切り口での個性あふれる応募をお待ちしております!!

■掲載内容

写真	プリントの場合、サイズはキャビネ判程度。電子データの場合、解像度300dpi以上とする。CGやパース、コンセプト図、スケッチ、イラストも可。
説明文	①ページタイトル：掲載内容を言い表すタイトル（施設名称は不可） ②コメント：掲載内容に対する考え方や説明を300字程度で
建物概要	掲載内容が建築物である場合は、施設名称、所在地、設計者、施工者、建築面積、延床面積、構造規模、工期など

※イラストレーター用の原稿作成フォーマットを用意しています。必要な方は、下の担当までご一報ください。

応募は、レイアウトしていない状態（写真、コメント、建物概要等をバラバラで提供）でも結構です。

■留意事項

1. 応募は、本会会員に限ります。入会は本会のホームページから可能です。(http://www.aaj.or.jp/)
2. 応募は1名につき1件までとし、1件につき1頁とします。竣工予定のプロジェクトを掲載希望の場合、写真の提出期日についてご相談ください。
3. 写真の撮影者名は必ず付記願います。図版に著作権等が生じる場合は、応募者にて処理願います。
4. 応募内容について事務局から補足説明をお願いする場合があります。
5. 掲載順は委員会で決定します。また内容によっては掲載できない場合もあります。
6. 出版物への掲載はモノクロとなります。(web版はカラー)
出版物にカラー掲載をご希望の場合はご相談ください(有料となります)。

■申込締切日・原稿送付先

1. 掲載申込締切日 **2026年10月19日(月)**
2. 送付先 (一社)日本建築協会「会員特集号」係
〒540-6591 大阪市中央区大手前1-7-31 OMMビル7階
TEL: 06-6946-6981 E-mail: hensyu@aaj.or.jp 担当: 井筒

主催 日本建築協会

2026年度 第72回工高生デザインコンクール

設計課題 『「はじまり」を灯す空間
—いのちを迎え、共に育む「建築」の器』

課題の趣旨

現代の日本において、出生の約99%は病院や診療所であり、助産院等は1%に満たないのが現状です。高度な医療管理による安心がある一方で、かつての日本で「向こう三軒両隣」の人々が新しい命の誕生を共に喜び、見守っていたような、温かな地域との繋がりを実感する機会は少しずつ減っています。

2025年大阪・関西万博が掲げる「いのち輝く未来社会のデザイン」では、一人ひとりのいのちを慈しみ、持続可能な未来を共に創り出すことが提起されました。これからの建築には、誰かが一人で頑張るのではなく、社会全体で優しくいのちを包み込むような「開かれた居場所」としての役割が期待されています。



本課題では、北欧の「ネウボラ」のように妊娠期から子育てまで家族に寄り添い、専門的なサポーターである「ドゥーラ」や「ナニー」が自然に手を差し伸べられる拠りどころを計画してください。それは、「いのちを迎える人々」が、それぞれの形を尊重し合いながら、知恵を寄せ合い健やかに過ごす、光あふれる交流の場です。

自然の摂理を感じながら、多世代が見守るなかで新しいいのちが育まれる「建築」の器。100年後の未来へ繋がる生命の神秘に敬意を払い、人々の記憶に優しく刻まれる「はじまりと継承」の場を提案してください。

設計条件

1. 建物の目的：既成概念にとらわれない『「はじまり」を灯す空間—いのちを迎え、共に育む「建築」の器』の提案（新築のほか、従来の建物の再利用も可能。）
2. 敷地：敷地の大きさ形状とも自由とし、具体的な敷地を設定する。
3. 規模：延べ面積、構造、階数は自由とする。
4. 所要室：使用方法を想定し、必要と思われるスペースを適宜設ける。

所要図等

(以下の1~8全てを記載することとし、不記載の場合は失格となることがある。)

1. 設計説明：設計意図を表すサブタイトルを必ずつけること。設計趣旨（敷地周囲の状況等についての説明はもちろん、「誰が、どのように、利用する場となるのか」について述べ、そのために設計では何を意図したのかを文章や図で簡潔に表現する）を記入する。
2. 建築概要：必要に応じて敷地面積、建築物の構造、階数、各階床面積および建築面積、延べ床面積などを示す。
3. 敷地周辺図：敷地周辺の環境や状況を示す。縮尺を明示する。
4. 配置図：敷地における建物の位置、道路との関係、方位、縮尺を明示する。
5. 平面図：室名、寸法を記入する。縮尺を明示する。
6. 立面図：縮尺を明示する。（2面以上）
7. 断面図：室名、寸法を記入する。縮尺を明示する。（1面以上）
8. 透視図等：設計意図が最も反映するところを表現する。
9. その他：応募図面には氏名学校名、マークなど応募者を特定あるいは類推できる内容は記載しないこと。

応募条件

1. 用紙：用紙は製図用紙A1判（594mm×841mm）1枚を使用し、所要図等をすべて表現すること。また、図面のパネル化等は認めない。
2. 応募資格：2026年4月現在、高等学校在籍もしくは高等専門学校、専修学校の高等課程の生徒で、個人または共同（3人まで）で制作したものとす。

審査員（50音順・敬称略）

審査員長 久保 岳／(株)昭和設計建築設計部部長
 審査員 糸額 円路／(株)大林組設計本部建築設計部副部長
 梅田 武宏／ウメダタケヒロ建築設計事務所代表
 恵本涼太郎／(株)日建設設計部部長
 木内菜津子／nuA 主宰

高田 英治／(株)安井建築設計事務所大阪事務所設計部部長
 多田 正治／多田正治アトリエ主宰・武庫川女子大学 准教授
 根木 和人／(株)東畑建築事務所本社オフィス大阪設計室副室長
 野口 伸／(株)竹中工務店大阪本店設計 4 部門 1 グループ長
 柳沢 究／京都大学大学院工学研究科 建築学専攻・准教授

このコンクールは、工高生の設計技能の向上を目的とし、昭和30（1955）年より毎年テーマを変えて開催しています。

注意事項

1. 作品の意図等を表現する際に、写真や図表等を補足資料として用いることは妨げないが、引用利用する場合には著作権等に十分に考慮すること。

応募方法

1. 応募書類に、学校名、所在地、学年、氏名（ふりがな）を記入の上、封筒に入れ製図用紙の裏に貼りつけること。（応募書類が足りない場合は協会ホームページ（<https://www.aaj.or.jp>）からダウンロードすること。また封筒の貼り付けはテープ止め等で封筒がはがれない程度とすること。図面を破損する恐れがあるので、糊のべた塗りはしないこと。）
2. 応募作品は学校を通じて提出すること。

締切期日

2026年9月30日（水）の消印、あるいは受付印のあるものをもって締め切る。

送付先

〒540-6591 大阪市中央区大手前1丁目7番31号 OMM 7 階
 一般社団法人 日本建築協会 第72回工高生デザインコンクール係
 TEL：06-6946-6981 FAX：06-6946-6984
 E-mail：jigyoka@aaj.or.jp URL：https://www.aaj.or.jp

入選作品の数および賞

1. 入選作品は10点とする。
 2. 入選作品のうちから最優秀賞1点、優秀賞2点を選び、表彰式にて発表する。
 3. 最優秀賞、優秀賞作品には、賞状および表彰盾を贈り、その他の入選作品には、賞状を贈る。
 4. 応募者全員に参加賞を贈る。
- ※入選作品の版權は本会に属する。

入選者発表および表彰式

審査の結果は、各学校ならびに本人に通知するほか、本会の会誌「建築と社会」11月号に発表し、入選作品は翌年1月号に掲載する。なお、表彰式は2026年11月14日（土）に行う。

第10回 日本建築協会 論考コンクール 片岡安賞 募集要項

日本建築協会は創立100周年を機に、学術論文とは一線を画す「論考」コンクールをスタートさせました。協会創設者・片岡安は建築家・都市計画家であると共に、大阪商工会議所会頭を務めた経済人でもありました。建築を通じて広く社会に貢献した片岡安の名を冠した本コンクールも、第10回を迎えます。第9回では建築以外の分野からも多数の応募がありました。また論題も多種多様です。6月号特集の「審査報告」をご参照ください。



かたおか・やすし
(1876-1946)

■募集テーマ：Re

今回の論考のテーマは「Re」です。

社会や環境が急速に変化し、私たちはこれまで自明とされてきた考え方や仕組み、価値観を見直す局面を迎えている今、この二文字は、私たちの身近な生活から専門的な議論まで、さまざまな領域に共通する思考の手がかりとなります。

「Re」はラテン語に由来する接頭辞ですが、「再び」「戻る」「繰り返す」という本来の意味にとどまらず、立ち止まって考え直す、別の見方で捉え直す、関係や意味を組み替えるなど、多様な意味へと展開していきます。過去をそのまま肯定するのでも、すべてを新しく置き換えるのでもない、その中間にある模索のプロセスもまた、「Re」の重要な側面といえるでしょう。

建築や都市に限らず、社会、文化、技術、あなたの日常の経験や関心事、身の回りのできごとなど、さまざまな対象を「Re」という視点で捉え直した論考をお待ちしております。

■審査委員会

審査委員長：松村秀一（神戸芸術工科大学 学長）

審査委員：岡絵理子（関西大学 教授）

前田昌弘（京都大学 教授）

■審査方法

- ・全審査委員により一次審査を行う。
- ・一次審査通過論考を対象に、オンラインによる公開プレゼンテーションを開催する。
- ・その後最終審査を行い、「片岡安賞」を決定する（該当作なしの場合もある）。

■応募条件

- ・投稿料は無料とする。
- ・応募者の国籍、年齢、所属は問わない。
- ・応募論考は単著、共著を問わない。
- ・応募論考は未発表のものに限る。協会誌『建築と社会』の掲載記事の改稿は可とする。
- ・使用言語は日本語に限る。
- ・質問は受け付けない。
- ・片岡安賞受賞者は本会に入会し3年間以上会員を継続することとする。
- ・Web通信環境が整っている、または整えられることとする。

■執筆要領

- ・文字数は6,000字程度とする。図版・画像も掲載できる。
- ・公平な審査のため、応募原稿には執筆者名等個人を特定できる情報を記載しない。
- ・応募用紙を本会ホームページからダウンロードし、著者名、論題等を記入する。
- ・応募論考は電子データでメール送信またはA4サイズに印刷したものを郵送する。
- ・応募用紙と論考を同時に送信または郵送する。
- ・電子データの場合、文書作成ソフトMicrosoft Word、もしくはそれに類するもので横書き原稿を作成する（Microsoft PowerPointは含まない）。
- ・添付画像は解像度300dpi以上とし、合計10MB以上になる場合は分割して送信する。

■著作権・版權

- ・著作権は応募者に帰属する。
- ・ただし本会にかかわる出版・印刷においては、一般社団法人日本建築協会が自由に使用することができるものとする。

■審査スケジュール

2026年	
10月31日	応募締切 (消印有効、電子投稿の場合23時50分)
2027年	
1月初旬	一次審査結果決定
3月初～中旬	オンラインによる公開プレゼンテーション 最終審査

■発表と表彰

- ・受賞論考の論題と著者名を協会誌『建築と社会』2027年5月号にて発表し、全文を6月号に掲載する。
 - ・同6月の本会総会にて表彰し、「片岡安賞」受賞論考著者には賞金10万円及び副賞を贈る。
 - ・他の入賞者には副賞を贈る。
- ※後日、受賞論考に基づく講演会・討論会等を開催することがある。

■提出先

一般社団法人 日本建築協会
第10回論考コンクール担当 宛
〒540-6591 大阪市中央区大手前1-7-31 OMMビル7F
電話06-6946-6981 FAX 06-6946-6984
メールアドレス<hensyu2@aj.or.jp>

主催：一般社団法人 日本建築協会

<http://www.aaj.or.jp>

協賛：学校法人常翔学園

後援：公益社団法人 日本建築士会連合会

公益社団法人 日本建築家協会

一般社団法人 日本建築士事務所協会連合会

一般社団法人 日本建築学会





特集 片岡安賞

第9回 日本建築協会論考コンクール 受賞論考発表

論考コンクール実行委員会 / 論考コンクール審査委員会

募集テーマ 100

テーマ趣旨

わたしたちは、「100」という切りのいい数字に特別の意味や思いを込めることがあります。それは目標であったり、節目であったり、数が多いことを意味したり、実に多種多様です。100年は一世紀として歴史を刻み、100歳や創業100年を迎えると盛大に祝います。昭和100年を迎える今年は、さまざまな記念行事などが予定されています。建築においても、高さ100m、100階建て、寿命100年などのように、「100」が強く意識されています。また、百家争鳴、百人一首、浪花百景などにも「百」が出てきます。

このように、わたしたちは「100/百」という数に、さまざまな意味を込めていることがわかります。そこで、今回は「100」の意味を改めて問いかけるテーマを設定しました。「100」を切り口にして、建築や社会の未来や直面する課題に関する提言・提案などを、自由な発想で展開してください。建築の枠にとどまらない、多様な観点からの論考を期待しています。



●テーマ設定

論考コンクール実行委員会 吉村 英祐 (委員長)
大澤 智 / 角野幸博 / 永田久子 / 西森史裕 / 平岡公章 / 米正太郎

審査報告

論考コンクール審査委員会

総評 / 松村秀一 (委員長) 講評 / 倉方俊輔・岡 絵理子



岡 絵理子 審査委員 倉方俊輔 審査委員 松村秀一 審査委員長 指田孝太郎 会長 吉村英祐 論考コンクール実行委員長 柏原忠明 事務局長

最終審査会 (於: 日本建築協会)

片岡安賞

100の外側で生きる
—都市の余白とインフォーマルな時間—
小泉満里奈



歌舞伎町コンプレックス (受賞論考より)

本論考は、「100年建築」や制度設計に象徴される長期的・フォーマルな都市の時間と、制度の外側で日々を生きる人々の短期的・インフォーマルな時間との断層に着目する。フィリピン・マニラの墓地に形成された墓スラムでは、住民が「墓守り」という役割を担うことで、制度的空間の管理を補完し、インフォーマルな生活が都市インフラの一部として機能している。この構造は「インフォーマル・インフラ」と捉えられる。一方、日本・歌舞伎町に集まるネオホームレスの若者たちは、制度との接続点や社会的役割を持たないため、都市の余白に孤立している。本論考は、この差を「役割」の有無として分析し、卒業設計《歌舞伎町コンプレックス》を通じて、建築が「居場所」だけでなく「役割」を内包することで、「100」と「1」の時間をつなぐ都市構造の可能性を論じる。

佳作

2045 虚構から感じる幸福な空間
白木美由紀



国立国会図書館蔵「付喪神記」(受賞論考より)

室町時代の『付喪神記』に見られるように、道具は百年を経て霊を宿すとされ、長い時間の共有が人と物の関係を反転させる想像力を生んだ。また三島由紀夫『金閣寺』では、建築を付喪神になぞらえることで破壊行為を正当化し、虚構が行為に意味を与える構造が示される。さらにローマ神話に由来するゲニウス・ロキの概念は、土地の記憶や固有性を尊重する視点として、都市のコモディティ化を抑制する役割を持つ。

2045年、人生100年時代とシンギュラリティが重なる未来には、都市は超知能により自律的に最適化され、生命体のように振る舞うと予想される。自然とデジタルが融合する世界では、物質的豊かさよりも内面的調和や身体的感覚が重視されるだろう。虚構を共有する力は人類の幸福の基盤であり、幸福は脳の主観的状态に依存する。未来の都市においても、データ化できない身体的経験に根差した虚構を共有することが、人が幸福を感じる空間創造の鍵となる。

佳作

「100」をめぐる建築の哲学
—医師から居住者となった私の視点—
八巻孝之



バックガーデン外観 (受賞論考より)

本稿は、医師から居住者へと立場を変え、築100年超のオランダ住宅に暮らす著者の体験と知見を起点に、オランダ住宅建築の思想を「100」という視点から論じる。第一に、建築を100年単位で使い継ぐことで、地域の記憶や文化を継承し、社会の連続性を育む点。第二に、解体時まで見据えた循環設計と「100%循環」という理想が、資源問題のみならず社会の倫理や技術革新を促す点。第三に、百人百様の暮らしを受け止める柔軟な建築が、多様性と社会的結束を両立させる点である。これら三つの視座から、建築は単なる器ではなく、社会全体の質を高め、未来世代に価値を残す装置であることを示し、日本の建築・都市計画への示唆を提示する。

特集 片岡安賞

第9回 日本建築協会論考コンクール 審査報告

審査委員会

松村 秀一（神戸芸術工科大学 学長）

倉方 俊輔（大阪公立大学 教授）

岡 絵理子（関西大学 教授）

応募論考 論題（順不同・21編）
百変化の思考—欺瞞的仕掛けと空間認識の転回
百段の階段
百姓都市論—分散型共同体と災害レジリエンスの未来
百を設計する —「100」をめぐる時間・空間・社会の再編集
百のスイッチ、百の窓
耐震思想100年の岐路 構造設計の倫理を暮らしに刻む —《文殊の家》にみる制度更新の思想と実証—
三階建ての家族、百階建ての人類
建築の今後100年のテーマ：思想を宿す空間へ
空気で設計する
共生資本が支える100年後のコミュニティデザイン論 —都市の定着コストを克服する基礎自治体の制度と空間—
漁業施設と教育の場の可能性 —「産業施設の枠組み」を越えて—
監視から、立ち直り支援へ —刑務所と建築における100年の歩みとその先—
コミュニケーションの数学的錬金術 ——数の次元性から建築的思考を読み解く——
2045 虚構から感じる幸福な空間
100秒間で満たされる欲求
100年後の建築設計 —人工知能時代における建築家の役割再考
100年の担保価値— 長期ローンと都市空間の支配構造
100の外側で生きる—都市の余白とインフォーマルな時間—
「百の器」～ 3分、100、そして建築 ～
「土地」「建物」の用途と「安全」「安心」「安定」の視点から ～ある「お城」の案内板等から見る100年ごとの変遷～
「100」をめぐる建築の哲学— 医師から居住者となった私の視点

1. はじめに

片岡安らによって1917年に設立された日本建築協会は、協会誌『建築と社会』に数多くの優れた「論考」を掲載し、建築界をリードする役割を担ってきた。創立100周年（2017年）を迎えたのを機に、「本会が歩んできた歴史を見つめ直し、『建築と社会』が更に優れた論考の受け皿となり、建築界全体にとって有益な媒体となることを目指し」て、優れた「論考」を顕彰するコンクールを実施することとし、名称を「片岡安賞」と定めた。第1回から第3回は、舟橋國男 大阪大学名誉教授を審査委員長とし、第4回から第8回までは高田光雄 京都美術工芸大学学長が、今回から松村秀一 神戸芸術工科大学学長が引き継いだ。審査委員会は、審査委員・倉方俊輔、岡絵理子を加えた3人体制とした。

今回の募集テーマは実行委員会の協議の結果、「100」とした。2025年6月に協会誌会告およびポスター、公募サイトにて告知、募集要項を公開した。応募締め切りは10月31日、応募資格は特に設けず、日本語による6000文字程度の論考とした。一次審査通過論考の公開プレゼンテーションをオンラインで開催することも告知した。

第9回は当コンクールが始まって以来、最も多い21編の応募があり、また建築以外の分野からの応募も増加傾向にある。

2. 審査経過

1) 一次審査

10月31日中までに届いた応募作に、執筆者個人を特定できる表記がないことを確認したうえで、到着順に受理番号（No. 1～No.21）を付した。

第1回審査委員会（2025年11月17日）において審査方法の基本的な方針を協議し、各審査委員が全応募論考を査読、評価を行い、その結果を集約する方式とした。

評価方法は、各論考に対する絶対評価を行うこととした。一次審査合格レベルをA、一次審査不合格をC、いずれとも判断し難いものをB、3段階それぞれに「+1」「-1」を付すことで微調整すること、

また、すべての論考に対して、各委員がコメントを付すこととした。

第2回審査委員会（2026年1月13日）において、全応募作に対する評価結果と評価理由に関して活発な意見交換を行った。その結果、論考番号No.4・No.11・No.19の3編を一次審査通過と決定した。

公開プレゼンテーションは、3月20日にオンライン参加方式で実施すること、当日参加できない場合は当日の質疑応答に代え、審査委員からの質問事項を発表者に伝え、その回答を含んだ発表原稿を事前に提出することも可能とした。また、『建築と社会』2026年2月号と3月号にて開催予告と視聴者募集を掲載すること、当該論考3編の論題とその応募者名を発表すること、協会ホームページでも公開プレゼンテーションの視聴者申込を募集することを確認した。

翌1月14日には、一次審査通過者に、公開プレゼンテーションの日時・参加方法等の細目を通知した。

2) オンラインによる公開プレゼンテーション

公開プレゼンテーションは、Microsoft Teams会議使用によるオンライン形式で開催した。視聴希望者にはプログラムを配付し、各プレゼンテーションの要旨を事前に紹介した。当日はカメラとマイクを切った状態での視聴のみとした。

当日に先立ち、2月13日に一次審査通過者のうち2名による音声・映像・発表原稿の操作方法等の確認を行った。都合がつかず、プレゼンテーションに参加できなかった1名は、ナレーション付き発表原稿を事前に提出し、当日に司会進行者が再生することとした。通信状況が不安定になるなどの不都合な状況を想定し、発表者2名から発表原稿データをあらかじめ預かり、不都合が生じた場合には審査会場でスライドの操作を行えるように備えた。

当日は、通信状況も安定しており、音声共有操作等のトラブルも回避でき、時間に余裕をもって進行した。そのため、当初の予定よりも質疑応答に時間を割くことができた。審査委員からの熱意のこもった質問に発表者も全力で応答し、一部、両者の笑い声が聞かれる和やかな審査会となった。

3) 最終審査

公開プレゼンテーション後の最終審査会では、各論考について再度の意見交換を行い、さらにプレゼンテーション、質疑応答の内容についても協議した。

その結果、当日のプレゼンテーションと質疑応答の内容によって、発表者の理解がより進んだことを考えると、ライブでの質疑応答を

行ったNo.11とNo.19については、協会誌に掲載する際に、本日の質疑応答から得られた知見を「補遺」として執筆することがより適切であり、それを求めることとした。求めに応じるか否かは受賞者の意思に任せることとし、No.11の論考を「片岡安賞」、No.4、No.19の論考を「佳作」として表彰することを決定した。

3. 総評

審査委員長 松村秀一

2024年4月に神戸芸術工科大学で働き始めました。その少し前のことですが、日本建築協会から講演依頼があり、6月の総会時に話をさせて頂きました。講演の直後に「片岡安賞」の授賞式があり、恥ずかしながら初めてこの賞の何たるかを知りました。

毎年変わる「お題」の下に論考を競う賞というのは、かなり以前ならあったのかもしれませんが、最近の建築界では聞いたことがありません。お笑いの世界の「大喜利」を思わせるユニークさに、どこか関西のノリを感じ、半世紀の東京生活を経て漸く関西に戻ったのだと大きく息を吸い込みました。まさにその時、不意にこの賞の審査委員長を依頼されました。青天の霹靂ではありませんが、「しゃーないなあ。ほなやりますわ」と、気付いたらこちらもつい関西のノリになっていたのです。

こうして審査委員長を引き受けましたところ、お題は「100」とのこと。2025年が昭和100年にあたる年だったことも関係していると聞きましたが、個人的には、なかなか難しいお題だなと思っていました。

大喜利ではお題が大事です。易しすぎても難しすぎても駄目ですし、予想もしない答えが出て来て観客の心を動かせるようなものでなければいけません。さて「100」はどうだったのか。本誌に掲載された受賞作をお読み頂いてもわかるでしょうし、また例年よりも多い21編の応募があったことでもわかるでしょう。いい線いっていたようです。

もし受賞作のそれぞれが扱っている事柄をそのままにして、「100」というお題だけを取り去ったことを想像してみてください。読むべき内容はあるものの少々噛み応えのない文章になったと思います。3編とも、論考を書く側にも読む側にも、「100」というお題が背骨のようなものになっているのだと思います。これが受賞作の受賞作たる所以です。訴えたい内容の文章表現だけで選ぶなら、お題など出す必要はありません。

選に漏れた論考の中には、「100」というお題に振り回されて本当に伝えたいことが何なのかわかりにくくなってしまったものや、逆に伝えたいことがはっきりしすぎていて、お題の「100」が殆ど無関係に

なってしまったものがありました。

片岡安賞はこれからもお題を出すユニークな論考賞として続くことでしょう。これは大喜利だと思って、楽しく考え、書いて、毎年どしどし応募して頂きたいと思います。続けていけば、一つの新しい建築系言論のジャンルが形作られること、間違いありませんので、乞うご期待。

4. 一次審査通過論考に対する審査委員講評

審査委員 倉方俊輔

■片岡安賞

100の外側で生きる一都市の余白とインフォーマルな時間―

マニラの墓地におけるフィールドワークと、歌舞伎町でのネオホームレス実態調査という二つの現場から得た知見を、単なる事例紹介に終わらせず、「インフォーマル・インフラ」という独自の概念に昇華させた論考である。

特に優れているのは、墓スラムの「墓守」という社会的役割をめぐる分析だ。制度とインフォーマルが「折り重なって支え合う」構造をこの概念は示しており、単純な包摂・排除の二項対立を超えた都市の論理を照らし出している。「居場所」ではなく「役割」をデザインする力が建築に求められるという結論は、この分析から自然に導き出されるものであり、説得力がある。

公開プレゼンテーションでは、論考だけでは読み取りにくかった調査の厚みが伝わってきた。質疑においても、わからないことはわからないと率直に答えながら、自らの論の射程と限界を同時に示す。その誠実さが印象に残った。

一方、「100」と「1」の対立という枠組みには、まだ整理の余地がある。「100」を制度の象徴として捉え、その「外側」に「1」を置く本論考の枠組みは、しかし、墓スラムの分析が明らかにしたものと微妙にずれてはいないか。マニラの墓守が示していたのは、制度の内と外という近代的な分断ではなく、役割と空間が絡み合いながら制度そのものを内側から支える状態だったはずだ。「100」こそが分断された個の集積であり、墓守たちの生がむしろそれとは異質な重なり合いを体現しているとすれば、問うべきは「100の外側」ではなく、その重なり合いをいかに都市に翻訳するかではないか。

本論考はその問いの手前まで届いており、そこから先の展開を期待させる。建築が問われ続ける意味を、具体的な場所と人との関係から掘り起こした論考として、今回の片岡安賞にふさわしいと判断した。

■佳作

2045 虚構から感じる幸福な空間

「付喪神」という概念から始まる本論考の着想は、今回の応募作の中でもひととき独創的だった。道具が100年を経て精霊を宿すというアニミズムの論理の背後には、時間と関係性の蓄積が存在の本質を変えるという洞察があり、そこから三島由紀夫の『金閣寺』へ、さらにゲニウス・ロキへと展開する前半は、建築に宿る意味と人間の想像力の関係を照らし出し、読む者を引き込む。

その一方で、後半でシンギュラリティや幸福論へと論が進むにつれて、論考の焦点が拡散していく感は否めない。冒頭で示されていた「善悪を超えた物事」への鋭い眼差しが、次第に一般論に溶け込んでいく。公開プレゼンテーションで語られた、リアルな空間からしか得られない体験の不可代替性への思いは、論考の言葉よりもずっと切実に伝わってきた。付喪神への関心とその思いは、言語化できない感覚への眼差しという一点で、もとより通じ合っている。後半の広がりをもう一度そこへ引き戻すことも可能かもしれない。書き手がこれから向かう先を見てみたいと思わせる一篇だ。

■佳作

「100」をめぐる建築の哲学 ― 医師から居住者となった私の視点

医師として人の身体と向き合ってきた著者が、築100年を超えるデンハーグの集合住宅に居住者として暮らす中で得た視点は、この論考に独特の説得力を与えている。傷跡や老いが刻まれながら生き延びてきた身体と、幾度も手を入れられながら使い続けられてきた建築を重ねる比喩は、借り物ではなく、日々の実感から生まれたものだろう。

床のきしみ、窓枠の塗り直しの跡、新しい配管が古い壁を貫通する様子、家具がびったりと収まらないがゆえに住み手が工夫を重ねていく過程。こうした細部への眼差しが、「建築とは完成品ではなくプロセスとして存在するものだ」という本論の主張を支えている。

建築の見方を医師の眼差しで更新しようとする試みは、建築を専門とする書き手からは生まれにくいものであり、その可能性において本論を佳作として評価した。

審査委員 岡 絵理子

■片岡安賞

100の外側で生きる一都市の余白とインフォーマルな時間―

この論考では、「100」を制度、「1」を人々の日々の暮らしとして捉え、制度によって成り立つインフラストラクチャーの上に、制度の

外にある、すなわちインフォーマルな生活が重なっている構造が示されている。墓スラムは、その「1」にあたる人々の暮らしが生業とともに成立している点に魅力があり、研究者である私にとっても好物の調査対象である。

一方で、歌舞伎町のネオホームレスは、都市としてのインフラストラクチャーがすでにインフォーマル的であり、そこにいる人々の営みは暮らしというよりも都市に寄生しているように見える。著者もその点を踏まえ、「都市スキマ」に、ネオホームレスに「役割」を与える建築を挿入するという提案を行っている。

しかし、その「役割」が具体的にどのようなものなのか、結果として墓スラムに見られるような「100」と「1」の関係にはならないのではないか、という点が審査会では議論になった。墓スラムでは、人々が墓を守り、花を売るといった営みを通して、場と結びついた暮らしが自然に成立している。そこにあるのは「役割」を与えられた状態ではなく、生活そのものが場と結びついている姿であるから魅力的なのだ。むしろ求められるのは、「役割」を与えることではなく、人々の暮らしが自然に立ち上がる場をどのようにデザインできるかという視点ではないだろうか、などこの論考からは、読み手がさらに考えることが求められる、今後の展開の可能性をおおいに秘めた論考である。

■佳作

2045 虚構から感じる幸福な空間

今年は過去最多となる21編の論考が集まり、「100」というテーマに対して実に多様・多彩な解釈が提示された。その中でもとりわけ卓越していたのが、「付喪神」によって100年という時間を読み解こうとする本論考の着想である。さらに、金閣寺やゲイウス・ロキといった存在を手がかりに、都市や建築に潜む霊的な気配へと視線を広げていく展開は、読者の想像力を心地よく刺激し、思わず引き込まれる魅力を備えている。

やがて論考は、平均寿命100歳が現実味を帯びる未来、すなわち2045年のシンギュラリティや人生100年時代へと大胆に展開し、時間認識の変化と価値観の転換を見通していく。人間が「物質の豊かさ」から「感覚の豊かさ」へと価値を移し、「幸福感」という精神的充足を志向していくという指摘も示唆に富み、現代的な問題意識とうまく接続されている。

一方で、「付喪神」に宿る畏れの魅力がもたらす独特の高揚感が、「未来の幸福感」には見られず、置き去りにされてしまったところが

残念と感じた。知らないことやわからないことを抱えたまま生きる豊かさにもう一步触れれば、議論はさらに奥行きを増すのではと感じる。とはいえ、時間と人間関係を多層的に捉え、想像力と現実認識を軽やかに往復する、魅力的な論考である。

■佳作

「100」をめぐる建築の哲学 — 医師から居住者となった私の視点

まず、都市も住宅も専門家だけが考えるものではなく、生活者のものであるという原点をあらためて気づかせてくれる論考であった。オランダで100年の集合住宅を購入し、実際に暮らしているという事実そのものに強く惹きつけられ、そこでの住まい方や日々の実感について、もっと詳しく聞いてみたいと思わせる魅力がある。

100年住宅、循環率100%を目指す社会、そして百人百様の暮らしを受け止める建築という三つの「100」を通して、日本の建築や都市のあり方を問い直している。その視点は非常に明快で、社会の質を見つめ直す試みとして大いに共感できるものである。とりわけ、古びて不便さもある住まいでの暮らしを実感として語っている点は印象的であり、何が人の生活を豊かにするのかは、やはり体験を通してこそ見えてくるのだと感じさせられる。百人百様の暮らしを受け止める建築も重要な指摘であるが、もう少し具体的に展開されるとさらに理解が深まりそうだと感じた。

日本においてもこのような体験ができると言いたいところだが、100年住宅の心地よさを誰もが簡単に実感できるような中古住宅の流通が十分に整っていない現状を改めて感じた。日本の住宅がなかなか本当に豊かなものにならない理由を私自身が再認識した。実際の暮らしを通して日本の都市・住まいの課題を提示していることが説得力を持っており、その実践に対して賞を贈りたいと感じさせる、魅力的な論考である。



最終審査での意見交換風景

100の外側で生きる —都市の余白とインフォーマルな時間—

小泉満里奈

1. はじめに——「100」という数字の意味

「100」という数字には、社会のなかで特別な響きがある。それは節目であり、祝福の対象であり、長い時間と蓄積の象徴でもある。100年企業、100年建築、100歳の長寿、100階建て。これらは、社会が“制度としての秩序”を前提に築き上げてきた時間のスケールを示している。

だがその一方で、「100」という秩序の内側に入れなかった人々や場所もまた、確かに存在してきた。

100年という節目を祝うとき、その外側には、祝われることのない人々の時間がある。彼らは都市のなかで、“制度の狭間”に身を寄せ、そこで独自の空間やコミュニティを築いてきた。私は、この「100の外側」にこそ、都市の未来を読み解く鍵があると考えている。

2. 墓スラムとの出会い

2024年夏、私はフィリピン・マニラにあるマニラ・ノース・セメタリーを訪れた。そこは、首都マニラ最大の墓地であり、約6万人が暮らす“墓スラム”として知られている。



墓地の内部に足を踏み入れると、外の喧騒とは対照的に穏やかな生活の気配が広がっていた。墓を住居に転用し、家族が集い、商店が並び、子どもたちが遊び回っている。

墓石の上に布団を敷き、祭壇の横でご飯を食べ、夜になると家族が肩を寄せ合って眠る。そこには、制度の外側に生きる人々の「日常」があった。





外から見ると、それは「不法占拠」であり「スラム」である。

しかし中に入って見えるのは、排除ではなく共存の風景だった。住民たちは都市と断絶して生きているのではなく、むしろ都市と緊密に結びついて生活している。彼らは都市のインフォーマルな一部として、重要な機能を担っている。



3. 墓守りという“社会的役割”

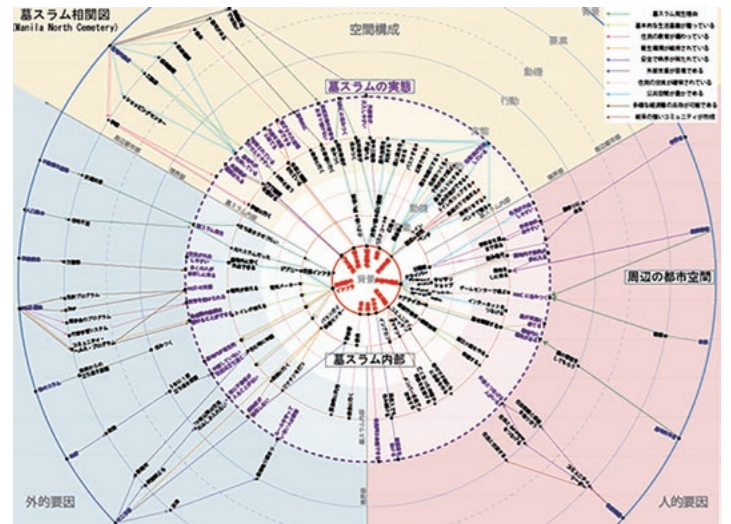
墓スラムが成立している背景には、「墓守り」という明確な社会的役割がある。

住民たちは単に「住んでいる」だけでなく、墓地の管理、掃除、巡回、供花や蠟燭の販売、案内などを行い、日常的に墓地を維持する主体となっている。

実際、マニラ・ノース・セメタリーの管理事務所は、すべての住民を一律に追い出すことをしていない。なぜなら、住民たちは管理の網の目を補う“インフォーマルな労働力”だからだ。

ある家族は、墓守りとして数十年にわたり特定の墓の清掃・供養を担っている。彼らは無給であることも多いが、代わりに「そこに住む権利」を事実上与えられている。この相互関係は、制度とインフォー

マルが衝突するのではなく、“折り重なって支え合う”構造“をつくっている”。



また、住民たちは訪問者の案内役にもなっている。外国人観光客や弔問者に対して墓地を案内したり、安全のために内部を歩いて同行したりする。

こうした行為は制度的には“非公式”だが、都市にとっては必要不可欠な役割になっている。



つまり、墓スラムは単なる居住地ではなく、都市インフラ（墓地）の公的管理が及ばない余白を住民たちの「役割」が支えている

場所なのである。

この関係は「100」の制度と「1」の生活が対立するのではなく、共存している稀有な事例である。制度的な墓地の“構造体”の中に、

人々の生活が入り込み、さらに制度の空洞を埋める機能を果たしている。

私はこの構造を「インフォーマル・インフラ」と呼びたい。

4. インフォーマルとフォーマルの狭間

この墓守りの機能によって、墓スラムは単なる貧困地帯ではなく、「制度とインフォーマルが共存する都市モデル」として成立している。

墓地は本来、長期的なスパンで管理される空間だ。100年を超える墓も多く、都市の記憶を蓄積する装置といえる。しかし同時に、そこに暮らす人々の生活はきわめて短期的で柔軟である。

たとえば、ある家族は、昼間は墓掃除をし、夜は屋台を出す。別の家族は夜間警備のような役割を担い、安全な通行を確保している。制度が持ちえない“手足”の部分、住民たちが支えている。

都市において、100年単位でつくられる制度的空間と、1日単位で変化する生活空間が、ここでは対立ではなく「役割分担」として機能している。

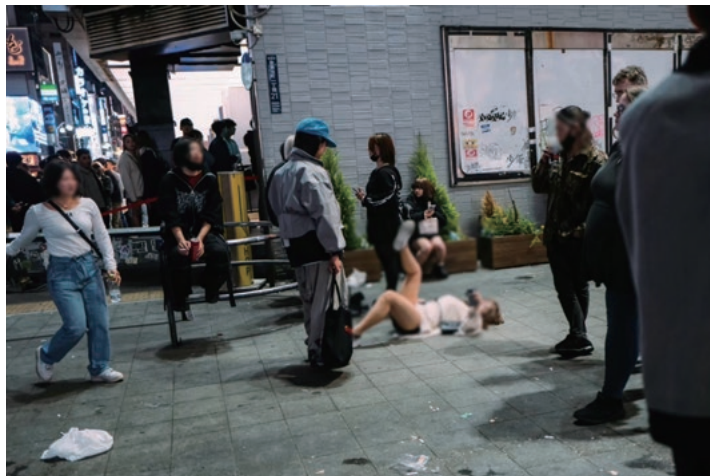
5. 日本における「100の外側」——ネオホームレス

このような構造は、海外だけの特異な事例ではない。

日本の都市空間にも、「100の外側」で生きる人々と、それを支える都市構造が存在する。

その象徴的な場所のひとつが、新宿・歌舞伎町である。

ネオホームレスと呼ばれる若者たちは、経済的な貧困ではなく、心理的・社会的な孤立によって制度の外側に置かれた人々だ。家庭や学校に居場所がなく、支援制度とも接続できないまま、歌舞伎町の余白を渡り歩いて生きている。



6. ネオホームレス調査から見た空間と制度の断層

私は2024年秋から2025年春にかけて、半年間にわたりネオホームレスの実態調査を行った。

夜間のフィールドワーク、支援団体への同行、ヒアリング調査などを通して見えてきたのは、「制度」と「空間」のあいだにある深い断層だった。



①居場所の流動性

彼らは固定的な住居を持たず、1日のなかで複数の空間を渡り歩く。昼は図書館やファストフード店、夜はカラオケやネットカフェ、旗竿地の裏路地など。これは点在するインフォーマルな空間のネットワークだ。

②空間と制度のズレ

児童相談所の年齢制限、生活保護の適用範囲、自治体の福祉網——いずれも「100」の時間と制度を前提に設計されている。だが彼らは「今日」や「今夜」を生きている。この時間のズレが、制度の外側を生む。



③都市スキマの機能化

歌舞伎町には、旗竿地や細い路地などの「余白」が多く残っている。再開発の網からこぼれ落ちたこれらのスキマが、彼らにとっての避難所・一時滞在の場となっている。

④ “役割” の不在

墓スラムと大きく異なるのは、ネオホームレスの若者には社会的役割が付与されていないという点だ。

都市のなかに確かに存在しているにもかかわらず、制度は彼らを「いないもの」として扱う。そのため、墓スラムのような共存関係が生まれにくい。



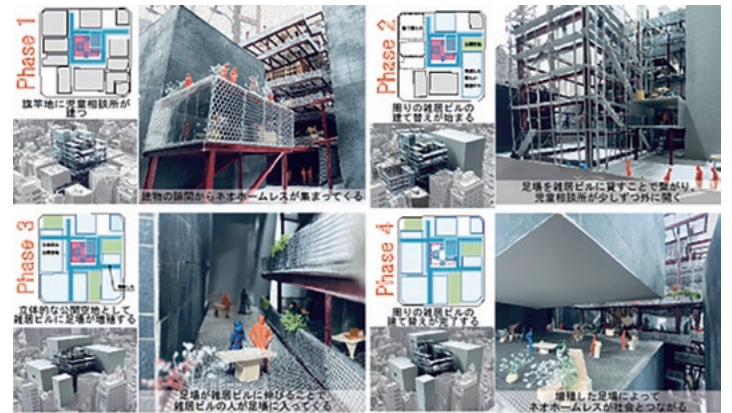
7. 歌舞伎町という“都市の余白”

歌舞伎町は、戦後闇市をルーツとする都市であり、制度と非制度が複雑に重なり合う場所である。

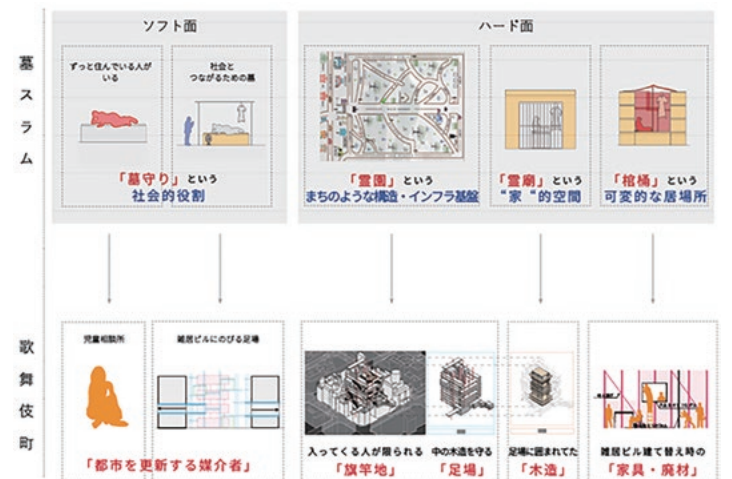
私は卒業設計《歌舞伎町コンプレックス》で、このスキマ空間に児童相談所を挿入し、制度と非制度の間に「役割を持つ空間」を生み出すことを目指した。



建築は足場と木造による二層構造。足場は制度的な構造体として残り、木造は人々の変化に合わせて更新可能な仮設部分とした。



ここにネオホームレスの若者たちが出入りし、支援団体や地域と関係性を築いていくことで、墓スラムの「墓守り」のように、彼ら自身も都市の一部として“役割”を担える仕組みを考えた。



8. 100の時間と1の時間

制度的な建築は100年を見据えて設計されるが、インフォーマルな空間は今日のために姿を変える。

墓スラムが共存できているのは、「100」と「1」の間に“役割”という媒介があるからだ。ネオホームレスが孤立するのは、制度との接点がないからである。

つまり、「時間」をつなぐのは「役割」である。

9. 100という“構造”の書き換え

「100」を解体する必要はない。むしろ、制度建築の内部に“1の生活”と“役割”を組み込む設計が必要だ。

墓スラムのように、制度とインフォーマルが互いを補完し合う構造を、日本の都市に翻訳すること。それは都市を柔軟にし、排除ではなく共存の空間をつくる建築の挑戦である。

10. 100の向こうにある都市

21世紀の都市は、100年単位の制度設計だけでは対応できない。

気候変動、人口減少、貧困、孤立。これらの問題は「今」のレイヤーと「100年」のレイヤーを重ねて考える必要がある。墓スラムはその一つのモデルを示している。

そこには制度とインフォーマルが対立せず、機能を分担しながら共存する構造がある。

11. 終わりに

——100を祝うとき、誰が祝われないのか

100年を祝うとき、その外側には、祝われない人々がいる。

100年建築の陰には、1日で姿を変える無数の小さな空間がある。

制度が祝う「100」と、都市が生きる「1」。

その断層を見つめ、橋を架けることこそ、これからの建築家の役割ではないだろうか。

墓スラムで見た「墓守り」という役割。歌舞伎町で出会ったネオホームレスの孤立。

この差は、制度との接続点の有無だ。

だからこそ、建築には「居場所」だけではなく「役割」をデザインする力が求められる。

「100」を讃える建築ではなく、「100」と「1」の両方を抱える都市へ。

制度と余白が共存する未来へ。

そのとき都市は、排除ではなく包摂の構造へと変わるだろう。

【補遺】

本論では、「100（制度）」と「1（生活）」を対立的に捉え、その外側に生きる人々の空間に着目した。しかし公開プレゼンテーションでの議論を通して、この二項対立は単純化しすぎている可能性に気づかされた。

当初、私は「100」を制度的に統合された秩序、「1」をそこから排除された個別の生活として捉えていた。だがマニラの墓スラムの調査を通して見えてきたのは、「1」が孤立して存在するのではなく、「墓守り」という役割を介して互いに関係し合い、結果として制度を内側から支える構造であった。

この点について、「100」とは単なる制度的枠組みではなく、「1」が重なり合い、役割を通じて接続された状態そのものではないか、という指摘を受けた。すなわち「100」とは固定的な構造ではなく、多数の「1」が関係性を持ちながら編み上げられた動的な集合体として再定義できる。

一方で、歌舞伎町におけるネオホームレスの若者たちは、都市のなかで多様なふるまいを行っているにもかかわらず、それが社会的な役割として認識されにくく、他者との関係性が構造化されていない。そのため、「1」が「100」に接続される契機が欠如している。

また、マニラと歌舞伎町ではインフォーマルの成立条件は大きく異なるが、いずれも都市の制度的枠組みの隙間において生活が成立している点において共通している。本研究では、この「制度との関係性」という観点から両者を横断的に捉えた。

以上を踏まえると、建築に求められるのは、制度の外側にある生活を単に包摂することではなく、「1」が他者や都市と関係を結び、「100」として編み上げられていくための接続点＝役割を生成する空間を構想することであると考えられる。

- ・卒業設計協力：鈴木万由、木樽実季
- ・写真協力：Ko Nakamura、呉帥辰
- ・調査協力：フィールドワークにご協力いただいた皆様

こいずみ・まりな

早稲田大学大学院創造理工学研究科建築学専攻修士2年。都市における制度と非制度のあいだに生まれる「インフォーマルな居場所」に関心を持ち、マニラの墓スラムや歌舞伎町でのフィールドワークを通じて、都市の余白に生まれる生活の実態とその成立条件を研究している。

空き家改修プロジェクトなどの実践にも取り組み、設計・施工・運営を横断しながら、都市における新たな居場所のあり方を探っている。台湾国際学生デザインコンペティション金賞など受賞。





国立国会図書館蔵「付喪神記」

1. 付喪神

1-1. 時間による関係性の変容

室町時代に制作されたと言われる絵巻物の「付喪神記」は次の文章から始まる。

「陰陽雑記伝、器物百年を経て、化して精霊を得てより、
人の心を誑す、これを付喪神と号すといへり
これによりて世俗、毎年立春に先立ちて人家の古道具を払い出だして、
路次に捨つる事侍り
これを煤払いと云ふ
これすなわち百年の一年たらぬ付喪神の災難にあはじとなり」

唐傘小僧や一反木綿が有名な付喪神。日常使う道具が100年を経たとき、そのものに精霊が宿り、化けて人の心をたぶらかす付喪神となるため、毎年立春に先立ってその家の古道具を路地に捨てる煤払いを行うことにより、付喪神の災難にあわないようにしている。

これは使用者と長い時間を共にする中で道具に魂が宿るというアニミズムの一種であり、そこには「時間」と「関係性」が重要な点として存在すると考えられる。100年もの歳月を道具として人間に仕えた物質が自ら変化する能力を宿し、それは時によって善にも悪にもなる。世代を超えて“生きている”道具は、今それを使う人が知らない時代を知っているものとして、不安を掻き立てる想像力に繋がっていることで、ある種の主従が入れ替わっているともいえる。自分が使う側だったはずの道具に支配されるかもしれない負の想像力により、道具は煤払いの名のもとに処分されてしまう。たとえそれ自身に変化がなかったとしても、時間の経過が道具という存在の本質を変えるときに、人との関係性も変化させていると言えるだろう。

1-2. 自己投影と行動の正当化

建築における付喪神という概念が語られる場面を探ってみた。三島由紀夫の著作「金閣寺」の主人公は付喪神による災難というテーマのもと、自己の行為を象徴的に表現している。モチーフとなった実際の事件においては付喪神への言及はなく、あくまで三島由紀夫の創作による文学的な表現であるが、主人公は金閣寺という建物の美が一種の呪縛や災いであると感じ、それを断ち切るために焼却を決意する。自分自身の存在や価値に対して深い劣等感を抱いていた主人公は、金閣寺の美しさが自らを圧倒し、自己否定の感情を強める中で、金閣寺が付喪神であると整理することで、焼却により既存の価値観や世界観を破壊し、新たな意味や世界を作り出そうと考えた。圧倒的な美や歴史の積層による畏怖の念に対して放火という破壊行動をもって制圧した。自身の中にある負の感情を付喪神という虚構として金閣寺に背負わせることで、自らの行動を正当化させている。

1-3. コモディティ化の回避

また、都市におけるアニミズムとしてはローマ神話における地霊、ゲニウス・ロキがあり、その場所に宿る守護霊としてその土地の特性や運命を司る存在と考えられていた。ローマ人はゲニウス・ロキを敬い、土地の安全や繁栄を祈願して祭祀を行い、特に新しい建物や都市を建設する際には、その場所のゲニウス・ロキを鎮める儀式が行われ、土地の霊的な調和を保つことが重要視されていた。現代においては、場所の精神や土地の個性を表す言葉として使われており、建築史家の鈴木博之は土地に結び付いた連想性や可能性を指す概念として、その土地の歴史的・文化的な記憶の蓄積が都市の形成や人々の生活に深く影響を与えていることを示した。文明が栄え、物質に富み、多くのことは技術やデータによって整理がつく現代において、霊的な解釈として土地に宿ると信じられるゲニウス・ロキは、都市計画や建築設計に

においてその個性や唯一性を導くヒントを与えるとともに一種のけん制ともなっているのではないだろうか。

2. シンギュラリティ

2-1. 人生100年時代の超知能

道具が付喪神と化すには100年の歳月を必要としているが、人の平均寿命が100歳となるのは2045年頃と言われている。時を同じく2045年に到達すると言われているものにシンギュラリティがある。シンギュラリティ（技術的特異点）とは、人工知能（AI）やコンピューター技術の進歩により、人間の知能を超える“超知能”が出現し、その後の技術進歩が爆発的かつ予測不可能な速度で進む転換点を指し、従来の社会構造や経済、文化が根本的に変わると考えられている。

2-2. 都市という生命体

超知能の時代に都市や建築はどうなっているのか、人間の発想を超えた革新的な都市となるのか。人工知能の学習能力により、自律的に建築設計が行われ、ロボットの施工や自動化システムにより、工期短縮やコスト削減が実現する。センサーやデバイスがあらゆるインフラに組み込まれ、建物だけでなく都市全体がデータで管理され、リアルタイムに最適化された空間に自動制御される。個人の行動や習慣、健康状態などが気づかないうちに分析され、それぞれにパーソナライズされた空間が要求するまでもなく用意される。建築部材や素材、構造などは自己修復機能を持ち、劣化や損傷を自動的に修復する。このように高次の情報処理が行われた都市や建築は単なる物理的な空間から、高度に知能化・自律化された生命体のような存在になることが予想される。

2-3. デジタルネイチャー

情報学研究者の落合陽一はテクノロジーの進歩により「自然」と「デジタル」の境界が曖昧になり、両者が融合した新しい自然観・世界観として「デジタルネイチャー」という考え方を示している。デジタルネイチャーにおいては、人間・動物・機械・植物などあらゆる存在が等価な情報オブジェクトとしてネットワーク化された世界になる。それはもはや言語を介さずに現象を直接やり取りできるような世界であり、人間の働き方、幸福観、経済、社会、国家のあり方の限界を超えて新たな形を生み出していくという。

2-4. 一体化による幸福

そんな世界が訪れたとき、人は都市や建築に何を求めるのだろうか。「自然とデジタルの融合」というデジタルネイチャーの目指すコンセプト

は、自然と人との関係を「分離」ではなく「一体化」として捉える東洋文明の考え方に適合しているという。東洋思想、特に仏教や禅の教えでは、物質的な所有や外部からの評価に依存しない心のあり方が幸福の本質とされており、これは「無常観」や「執着の放棄」といった概念に基づき、物質的な豊かさや社会的地位に囚われない自由な心の状態を目指すことだという。デジタルネイチャーの時代においても、物質的な豊かさが必ずしも幸福を保証しないことが示されており、内面的な調和が重要視されている。

2-5. 感覚の豊かさ

シンギュラリティを迎えたとき、身体を通じた感覚や経験により得られる価値を再評価し、身体を中心に据えた生き方や文化を取り戻そうとする身体性への回帰が進むと考えられている。「物質的な豊かさ」から、より生きている実感を得られる「感覚の豊かさ」に価値観が移り変わっていく。そもそも、都市や建築を形容する空間の豊かさとは、物理的な広さや機能性だけでなく、形態の美しさや自然との調和、あるいは心理的な快適さを表している。言い換えると都市や建築の空間の豊かさとは、その空間から人が得られる感覚の豊かさであり、身体を通じた世界との関わりや自身の知覚との対話によりその魅力を感じるものとも言えるのかもしれない。

3. ホモ・サピエンス

3-1. 虚構と生存競争

歴史学者のユヴァル・ノア・ハラリは、人類の進化の中でホモ・サピエンスが他の動物と決定的に異なる点として、虚構・フィクションを創造し、信じ、共有する能力があったことで生存競争を勝ち抜いたと主張している。虚構とは、実際には存在しないが、人々が共通して信じる物語や概念のことであり、権利や国家、貨幣や宗教などが例として挙げられる。物理的な実体を持たないが、多くの人々が信じることで現実の力を持ち、社会的な秩序や協力を可能にする。虚構は社会秩序の基盤であると同時に、人類の精神的な意味づけの源泉でもある。この生存競争の経験より、虚構を共有するグループの構成員となったとき人は本能的に、生き残れるという安心感からくる幸福感が得られるという。

3-2. 脳が決める幸福

ハラリはまた、物質的な豊かさや技術の進歩は生活の質を向上させたが、幸福感の増加には限界があるという。人間は慣れの生き物であり、新しい快適さや富にもすぐに慣れてしまい、幸福感は持続しにくい。幸福は物質的豊かさではなく、脳の化学的状態や文化的・精神的

な意味づけに深く依存している。つまり幸福は「主観的な感覚」であり、ドーパミンやセロトニン、オキシトシンなどの脳内の化学物質が幸福感に大きく関与しているという。

3-3. 経験に基づく虚構

虚構は人々に意味や目的を与え、精神的な幸福をもたらす役割を果たしてきた。また、幸福とは物質的な豊かさがもたらすのではなく、脳の神経化学的な状態に依存する面が強い。つまりは虚構とは身体を通じた感覚や経験に根付くものであり、身体的経験や時間の蓄積、感情の投影を通じて成立する共有された虚構が人々に幸福をもたらす。これは身体性への回帰が進むと思われる近い将来において、人々が幸福感を得られる空間を作る上でのヒントになるだろう。

4. 結び

「百」は八百万の神々や百科事典などの言葉に代表されるように、古くから数的意味ではなく、とてつもなく多い、という意味で使われていた。人類にとって未知のスケールを表していたが、人の寿命が100年を超えたとき、それは事実として未知ではない時間となる。昔の人々がその長さから妖怪を創造するほどに想像もつかなかった時間を現実として生きる時代がやってくる。しかし人生100年時代にシンギュラリティを迎えたときでも案外、700年前の室町時代と変わらずに虚構を共有して幸福を感じて生きていくのかもしれない。

矛盾しているようで当たり前のことだが、都市や建築においては、言語化できないものやデータ化できない体験から得られる感覚は、物質的な空間から感じ取られるものである。奇しくもコロナ禍を経験した我々は、リアルな空間におけるコミュニケーションが他では代替しえないものとして再認識した。2045年には豊かな感覚に満ちた都市や建築を通じて自身の幸福と向き合える未来が訪れることを楽しみにしている。

参考文献

- 国立国会図書館デジタルコレクション「付喪神記」
<https://ndlsearch.ndl.go.jp/books/R100000002-I000007309202>
- 「金閣寺」 三島由紀夫、新潮社、1956年
- Britannica「Genius | Ancient Beliefs & Practices」
<https://www.britannica.com/topic/genius-Roman-religion>
- 「日本の<地霊>」 鈴木博之、講談社現代新書、1999年
- 「シンギュラリティとは〜2045年問題〜」JNSA Press 第37号JNPO日本ネットワークセキュリティ協会、2014年
- 「デジタルネイチャー 生態系を為す汎神化した計算機による侘と寂」 落合陽一、PLANETS/第二次惑星開発委員会、2018年
- 「サビエンス全史 文明の構造と人類の幸福」 ユヴァル・ノア・ハラリ、河出書房新社、2016年

しらき・みゆき

1985年生まれ。在阪不動産開発会社勤務。都市開発事業に携わる。

「100」をめぐる建築の哲学

—医師から居住者となった私の視点

八巻孝之

序章

今春私は医師としての職を辞し、築100年以上を経た集合住宅の一角を購入してオランダ（デンハーグ）で暮らし始めた。私の家屋は決して完璧ではない。床はきしみ、断熱性能はエネルギーレベルF（最良A～最悪G）で、現代の基準から見れば十分とはいえない。間取りも古くて不便である。それでも、そこには新築では得られない温度と歴史があり、壁のひび割れは、時間の痕跡であり地域の暮らしの記憶であると感じられる。人の体に傷が残るように、建物にも老いが刻まれる。だがその不完全さこそが、住む者に工夫を促し、共同体との関わりを生み出していることを知り、やがて建築が単なる容器ではなく、社会全体の質を高める「仕組み」であることを、日々実感するようになった。

本稿では、医師として人の身体を治してきた著者が、いま居住者として建築を通じて社会を見つめ直し、オランダ建築の思想を「100」という切り口で読み解く。第一に、建築が100年という時間を生き抜き、社会の記憶を継承する姿²⁾。第二に、100%循環という理想を掲げ、環境と資源の未来を見据える挑戦¹⁾。第三に、百人百様の暮らしを受け止める空間が、社会の多様性を支える仕組みとして機能する可能性⁴⁾。これら三つの視座を通じて、「100をめぐる建築の哲学」を提言したい。

100年の時間軸で残す建築

私が住むデンハーグの集合住宅（図1）は、すでに100年以上の時間を経ている。



図1 デンハーグ築100年集合住宅外観

窓枠やドアの木材には幾度も塗り直された跡があり、内部の間取り（図2）はかつての住人の生活に合わせて幾度も改修されてきた痕跡（図3, 4, 5, 6）が見える。つまり、この建物は単に長持ちしてい

るのではなく、時間の中で幾度も手を入れられながら生き延びてきた存在である。医師として人間の身体に携わってきた私には、それが臓器移植や治療を受けながら寿命を延ばしていく人間の姿に重なって見える。

オランダでは、この「生き延びる建築」をさらに積極的に捉え直そうとする動きが広がっている。その代表例が学校建築のリノベーションである。ユトレヒトの職業学校Nimetoは、1960年代に建てられた校舎を全面的に改修し、美しい素材を活かしながら新たな学び舎として生まれ変わった²⁾。解体して新築するよりもコストは半減し、二酸化炭素排出も30%削減された²⁾。しかも、校舎の歴史を引き継いだことで学生や地域住民が親しみを感じ、在校生数の増加にもつながっている²⁾。また、ベスト市の小学校「De Zevensprong」では、既存の建物を壊さずに木質構造を増築し、滑り台付きのバルコニーや自然光を取り入れた空間を加えた²⁾。子どもたちにとって遊び心のある学び舎となっただけでなく、地域にとっても「残すことの価値」を再認識する場となっている²⁾。

対照的に、日本では「スクラップ・アンド・ビルド」が主流である。戦後の急速な都市化の中で、古い建物を取り壊し、新しいものに置き換えることが経済成長の象徴となった。その結果、平均的な住宅寿命は30年程度にとどまっている²⁾。そこでは建築は「商品」としての寿命しか持たず、社会の記憶や文脈を受け継ぐ役割が希薄になってきている。

オランダの事例が示すのは、建築を100年単位の時間軸でとらえることで、社会全体の質が向上するということである。単に環境負荷を減らすだけではない。長く使い続けることによって人々の愛着が育ち、地域のコミュニティが強まり、教育や文化が持続する。建築は「時間をかけて社会を育てる装置」として機能しうるのである。

100%循環をめざす建築と都市

建築を100年単位の時間軸でとらえる姿勢に加えて、オランダでは「循環」というもう一つの軸が重視されている¹⁾。それは「建物は必ず壊れる」という前提に立ち、解体時に資材をどう再利用できるかまでを設計段階で考えるという思想である。いわば「生まれながらにして死を見据えた建築」といえる。

ユトレヒトにある循環型施設「The Green House」は、その代表的な事例である¹⁾。解体時には部材がすべて取り外し可能で、再び別の場所で用いることができる。痕跡を残さない設計思想は、廃棄物を出さない社会のあり方を象徴している。アムステルダム市の仮設裁判所

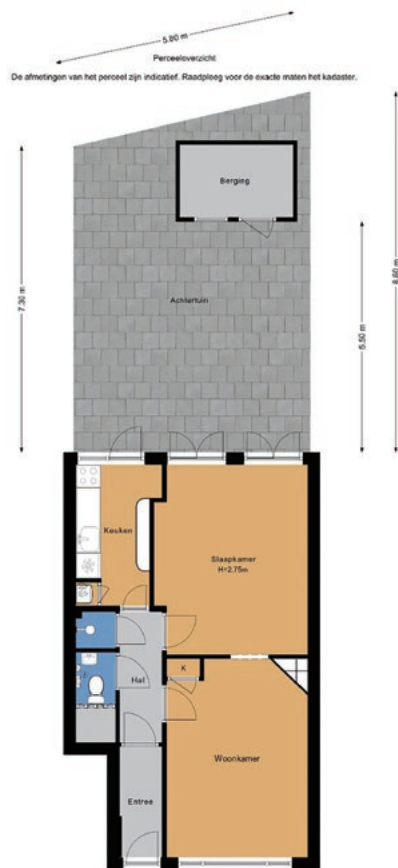


図2 デンハーグ築100年集合住宅間取図

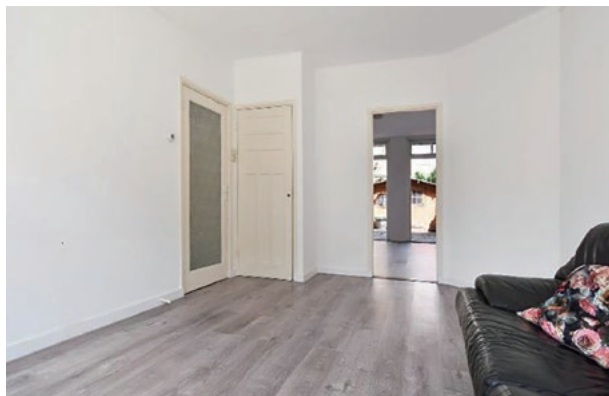


図3 デリビング外観(上)、寝室外観(下)



図4 キッチン外観

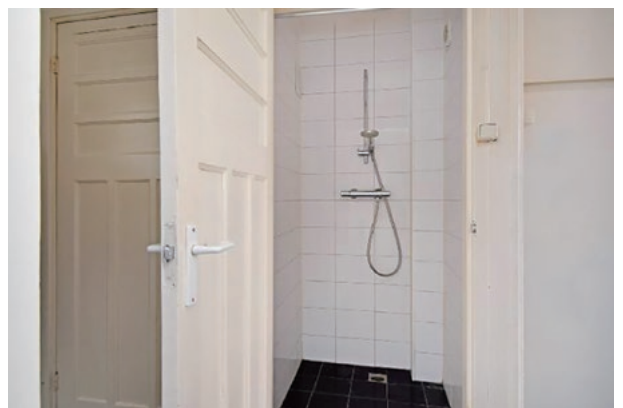


図5 シャワールーム(上)、トイレ(下)



図6 バックガーデン外観

「Temporary Court」も同様に、解体・移設を前提にモジュール化され、接合部には再利用しやすい工夫が施されている。さらに、ドゥーヴェンのエネルギー会社本社ビル（Alliander）は建材の83%をリサイクル資材で構成し、断熱材には古い作業服を再利用している³⁾。雨水の再利用や現地発電といった仕組みも組み込まれ、建物自体が小さな循環社会を形成している。Venlo市役所は、「クレイドル・トゥ・クレイドル（C2C）」の哲学を全面採用し、壁面緑化による空気浄化や資源循環を実現している。

しかし現実には、オランダ国内で「循環材」として同等以上に再利用されている建材はわずか8%に過ぎない³⁾。理想と現実のギャップは依然として大きい。にもかかわらず、オランダ社会が「2050年までに100%循環社会を実現する」という目標を掲げていること自体が重要であろう。数値目標としての「100%」は、達成が困難であっても社会全体の意識を高め、企業や市民の創意工夫を引き出す触媒となっている。

私は、この姿勢に、医学における「完全治癒」や「根治」を追求する姿勢を重ねてしまう。実際にはすべての病を完全に治せるわけではない。それでも「治癒率100%」を理想に掲げることで、治療技術は進歩し、患者と医療者の意識も変わる。同じように、「循環率100%」という社会理念は、建築と都市における技術開発や社会的対話を促し、結果として社会全体の質を押し上げる。

循環型建築がもたらすのは、単なる廃棄物削減ではない。資源を循環させることによって、未来世代に責任を果たす社会的態度が培われる。住民や自治体、企業がその理念を共有すること自体が、社会の信頼と結束を高める。オランダの建築が目指す「100%循環」は、物質的な循環にとどまらず、社会の精神的な成熟を伴う試みであるといえる。

百人百様を受け止める建築

オランダ建築の特徴の一つは、多様性に対する柔軟な対応力である⁴⁾。人口構成や暮らし方が多様化する社会において、建築は単に人を収容する「箱」ではなく、個々人の生活を支え、地域社会の結びつきを醸成する「仕組み」となっている。私はこの思想を「百人百様」という言葉で表現したい。個々の生活や価値観の違いを尊重し、それを建築が受け止め、社会の質を底上げするのがオランダの試みである。

アムステルダムの上水集合住宅「Sluishuis」は、その代表例であろう⁴⁾。川の水面に浮かぶように建てられた建物は、従来の住宅では難しい柔軟な間取りを可能にし、住民は生活スタイルや家族構成に応じた空間を自由に選べる。屋上の緑化や太陽光発電設備により、個々の生活がエネルギー循環に組み込まれ、都市全体の環境負荷を低減する

仕組みも備えている。ここでは「百人百様の暮らし」が都市環境と融合し、社会全体の質を高める例として機能している。

オランダ建築は、個人の自由と社会全体の利益を両立させる設計思想を持つ⁴⁾。この理念は、日本の住宅や都市計画においても重要な示唆を与えるものであり、多様性を尊重する社会構築に欠かせない要素である。

「100」をめぐる建築の哲学 - 私の視点

本稿では、私自身が築100年を超える建物に居住する体験を出発点として、オランダ建築の事例を通じて「100をめぐる建築の哲学」について論じた。オランダにおける建築の多くは、単に美しい形を競うものではなく、社会をいかに持続可能にし、生活の質を高めるかを問い続けている。すなわち、解体時に資材を再利用できるよう設計されたサーキュラー建築、既存の校舎を壊さずに新たな学び舎へと変貌させたリノベーション、水上集合住宅やエネルギー循環型の庁舎といった試み、いずれも「建築を通じて社会の質を向上させる」という共通の哲学を持っている。時間軸・循環・多様性という三つの視座により、建築は単なる物理的構造ではなく、社会全体の質を高め、未来に価値を残す装置であることが明らかとなった。

第一に、建築を100年単位の時間で捉えることは、地域の記憶や文化の継承を可能にし、社会的連続性を支える装置としての役割を果たすことを示す。第二に、循環設計の理念は資源の持続可能性のみならず、社会の倫理観や意識を高め、技術や創意工夫を刺激する触媒となる。第三に、多様性を受け止める建築は、個々の自由と社会全体の結束を両立させ、都市や地域の生活の質を向上させる。これらの知見は、日本を含む世界の建築・都市計画においても示唆に富むものである。

「100」という象徴的な数字は、単なる節目や目標以上の意味を持ち、建築に社会的使命を付与していた。100年先を見据えたオランダ社会における建築計画は、建物の耐久性や環境性能の向上にとどまらず、地域社会や文化、さらには未来世代への責任を包括する視座を育んでいる。

三つの視座を統合すると、建築は単なる建物ではなく、社会インフラとして未来に価値を残す存在であることが明らかになる。日本においても、100年スパンで建築を考え、資源と人の生活の循環を意識し、多様性を受け止める設計が求められる。建築を通じて社会の質を高めることこそ、私が医師として人の身体を見つめ、居住者として100年建築に暮らす中で得た最も重要な知見である。

結語

建築は未来社会に豊かさと安全、そして社会的成熟を届ける存在として、100年先の人々の生活に寄与できる可能性を秘めている。本稿で示した視座は、日本においても建築を通じて社会の質を高めるための指針の一助となれば幸甚である。

参考文献（引用順）

- 1) Bureau SLA, 「壊すときのことを考えて建てる。オランダのサーキュラー建築」, CEHub, 2022年.
- 2) IENavi, 「オランダのリノベーション建築」, 2021年.
- 3) Constructive Voices, 「オランダのトップグリーンビルディング」, 2023年.
- 4) Rasical, 「Netherlands SustainableArchitecture」, 2022年.

2027年より

建築と社会賞

再開します

日本建築協会では、2001年に、協会誌『建築と社会』の趣旨にふさわしい、社会性や環境などに配慮した建築プロジェクト、及び建築に関わる論文・記事などを顕彰する「建築と社会賞」を創設し、2020年まで18回にわたり実施してまいりましたが、その後のコロナ禍により、審査の実施が困難となったため、やむを得ず一時中断となっていました。

この度、再来年2027年に、日本建築協会創立110周年を迎えることから、「建築と社会賞」を再開する運びとなりましたので、お知らせいたします。

選考対象

協会誌『建築と社会』に掲載されたプロジェクトから選考する「プロジェクト部門」と、各号特集記事や寄稿から選考する「寄稿部門」の2つの部門からなり、第19回「建築と社会賞」は、2026年1月から12月号までの協会誌『建築と社会』に掲載されたプロジェクトと各号特集記事や寄稿から選考するものとします。

スケジュール

- ・予備審査：2027年2月度の常任理事会において実施。
- ・本選考：2027年3月（予定）外部有識者、本会会長を含む選考委員会において実施。
- ・発表：入賞者は、本人に通知するとともに、『建築と社会』2027年4月号（予定）で発表。
- ・表彰：6月に開催される日本建築協会2027年度総会で表彰。

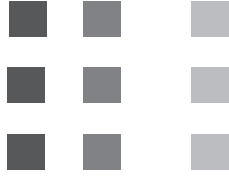
表彰内容

プロジェクト部門：最優秀賞1点、その他数点。
寄稿部門：最優秀賞1点、その他数点。
各入選プロジェクト・論文・記事に対し、賞状、記念品を贈呈。

過去の選考結果

第1回から第18回までの受賞プロジェクトおよび論考はこちらからご覧ください。





人工光合成触媒パネル ～CO₂からギ酸を生成～

三菱電機株式会社 澤中智彦 三菱電機株式会社 平敷 勇
東京科学大学 前田和彦

■はじめに

ギ酸 (HCOOH) は、太陽光のエネルギーを蓄えることができる液体である。運搬や貯蔵が容易であり、二酸化炭素 (CO₂) を原料として人工光合成により得ることができる物質として注目されている。

人工光合成によってギ酸を大量生産するためには、2つの課題があった。1. 太陽光を効率よく利用する技術の確立と2. 反応溶液中のギ酸の回収操作の簡便化である。光を効率よく利用し、反応液からギ酸の分離を容易にするには、光触媒を溶液中に分散させず、平面上に形成、固定化する必要があった。

三菱電機株式会社と東京科学大学理学院の前田和彦教授は可視光を吸収する有機半導体である窒化炭素を用いた人工光合成触媒系を平面状に形成し、それを固定化することに成功した。また、この触媒によるギ酸の生成を確認できた。

■可視光を利用する人工光合成触媒の固定化

人工光合成触媒系は、可視光 (400nm) を吸収することで励起状態となった電子を生じさせる有機半導体であるポリマー状の窒化炭素 (P-窒化炭素) と、励起状態となった電子をP-窒化炭素から受け取り、CO₂をギ酸へと還元するルテニウム錯体より成る。

触媒は、ホウケイ酸ガラス平板上にまず酸化チタン層を堆積させ、その上にP-窒化炭素を載せて固定化 (パネル化) した (図1)。

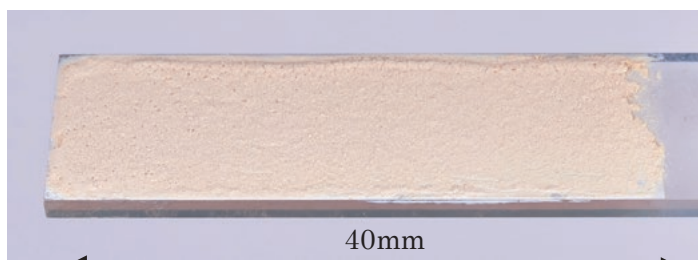


図1 固定化した人工光合成触媒

この固定化した触媒にCO₂の還元活性点となるルテニウム錯体を吸着させ可視光を当てることで、CO₂を原料としてギ酸が生成されることを確認した。

■ギ酸生成の原理と特長

図2にて触媒上で起こる反応を説明する。P-窒化炭素で生じた励起状態の電子は、固定化した触媒系では、酸化チタン層を経て酸化チタン層に吸着したルテニウム錯体に移動する。ルテニウム錯体はこの電子でCO₂の還元反応を進めてギ酸に変える。

また開発した固定化触媒は高い選択率* (85%) でギ酸を生成し、外部量子効率も従来の分散系と同程度であった。

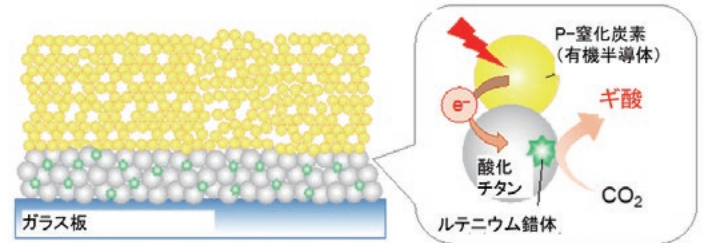


図2 ギ酸生成の原理

人工光触媒をパネル化したことにより、従来方式では必要だった操作 (溶液中に分散した光触媒粒子微粉末のろ過など) が不要となるため、ギ酸の回収が容易となり、ギ酸の回収コストを削減できる。

■今後の予定・将来展望

将来的には、本開発成果を他の人工光合成技術と組み合わせることで、より高効率なエネルギー変換システムの実現を目指す。また可視光の光エネルギーをギ酸に変える効率を向上させるため、有機半導体上で生成された電子をギ酸生成の反応に最大限活用する技術を検討し、再生可能エネルギーの利用拡大、カーボンニュートラル社会の早期実現に貢献していく。

本開発の成果は、2025年8月27日に学術雑誌Advanced Energy and Sustainability Researchに掲載された (T. Sawanaka *et al*, Adv Energy Sustainability Res. 2025, 2500179)。

* 選択率：人工光合成で特定の生成物が全生成物に占める割合を示す効率指標で、本開発ではギ酸以外の生成物 (水素、一酸化炭素) も含めた総量の中でのギ酸の割合



さわなか・ともひこ
三菱電機株式会社 先端技術総合研究所
にて研究開発に従事。



ひらしき・いさむ
三菱電機株式会社 先端技術総合研究所
にて研究開発に従事。



まえだ・かずひこ
東京科学大学 理学院化学系 教授
専門は光化学・触媒化学

令和6年能登半島地震における 建築物構造被害の原因分析を行う委員会 ～最終とりまとめ～

国土交通省住宅局参事官（建築企画担当） 付

2024（令和6）年1月1日16時10分頃に石川県能登地方で発生した地震（令和6年能登半島地震）では、輪島市や志賀町で震度7が観測されたほか、能登地方の広い範囲で震度6強以上の地震動が多数観測され、数多くの建築物に倒壊などの被害をもたらした。

令和6年能登半島地震における建築物の構造被害の原因を分析し、対策の方向性を検討するため、国土交通省及び国土技術政策総合研究所（以下「国総研」という。）、国立研究開発法人建築研究所（以下「建研」という。）では、建築構造の専門家等からなる有識者委員会「令和6年能登半島地震における建築物構造被害の原因分析を行う委員会」（委員長：中埜 良昭 東京大学生産技術研究所教授）を設置し、国総研及び建研が実施している現地調査の結果に加え、さまざまな機関が実施している調査の結果や関連データ等を幅広く収集・整理した。

本稿では、2025年12月に公表した最終とりまとめから主要な内容を紹介する。

■木造建築物

●被害状況と調査結果

建築時点における耐震基準の違いによる建築物の被害の傾向を把握すること等を目的として、木造建築物の被害が大きかった地域を対象に一般社団法人日本建築学会（以下「建築学会」という。）と連携して被害調査及び分析を行った。年代ごとの被害状況については、新耐震基準導入以前の木造建築物の倒壊・崩壊は19.4%、新耐震基準導入以降では、2000年の接合部等の基準の明確化以前の木造建築物の倒壊・崩壊は5.4%、2000年以降の木造建築物の倒壊・崩壊は0.7%（608棟のうち4棟）であった（図1参照）。これらは平成28年（2016年）熊本地震の際に益城町において実施した悉皆調査の結果と同様の傾向を示している。また、2000年以降の建築物で倒壊・崩壊した4棟のうち、図面を収集できた2棟はいずれも壁の釣り合いの良い配置の規定を満足しておらず、うち1棟は壁量規定を満足していなかった。

これらより、必要壁量が強化され、接合部の仕様等が明確化された現行の耐震基準は、旧耐震基準と比較して、今回の地震に対する倒壊・崩壊の防止に有効であったと認められる。

また、悉皆調査を行った木造建築物のうち、住宅性能表示制度の耐震等級（構造躯体の倒壊等防止）2、耐震等級（構造躯体の倒壊等防止）3又は長期優良住宅の認定を取得した住宅では、倒壊・崩壊又は大破した住宅はなく、大部分が無被害であった。

さらに、地方公共団体の補助を受けて耐震改修が行われた木造建築物では、倒壊・崩壊した建築物は確認されなかった。耐震改修を行っていない旧耐震基準の木造建築物と比べて被害が小さかったことから、耐震改修により被害が軽減されたと考えられる。

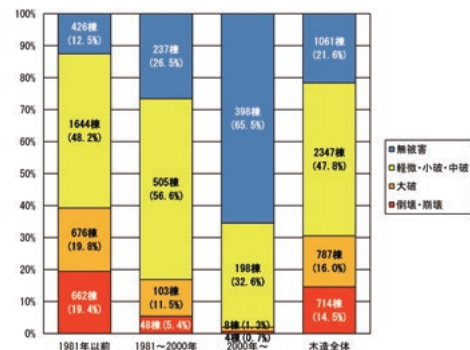


図1 建築学会の悉皆調査による木造の建築時期別の被害状況

●対策の方向性

能登半島における住宅の耐震化率は全国の住宅の耐震化率に比べても低く、耐震化が進んでいないことが木造建築物の被害の拡大につながったものと考えられる。

旧耐震基準の建築物について耐震化の一層の促進、新耐震基準導入以降の木造住宅を対象とした効率的な耐震診断方法の周知、及び住宅性能表示制度や長期優良住宅認定制度の一層の活用促進等を図る。

■転倒被害が確認された鉄筋コンクリート造建築物

●被害状況と調査結果

鉄筋コンクリート造建築物では傾斜により大破とみなされる被害（傾斜角1/75rad以上）が確認されたほか、輪島市で1棟の転倒被害が確認された。

転倒被害のあった建築物は、杭基礎の短期荷重に対する設計の指針が示された1984年以前に建設されたものであった。杭基礎を有する鉄筋コンクリート造等建築物で地震動による転倒被害が確認されたのは我が国において初めての事例である。転倒の原因分析において、上部構造については建築物の解体に合わせて部材の寸法や材料強度等の調査を行い、基礎及び地盤については地盤調査及び敷地の掘削による杭の被災状況等の調査を行った。これらの結果をもとに建築物の構造図を復元し、一貫構造計算プログラム等を用いた解析及び建築物の被害状況から、建築物の転倒現象の過程（シナリオ）を検討した。

上部構造は東側に転倒しており、転倒に至るまではほとんど損傷がなかったものと考えられる。転倒を生じた構面について、建築物の高さと架構の見付幅により計算した塔状比は実測値で2.50及び構造図で2.46（最も大きな値）で、スパン数は1または2であった。また、計算上一部の杭の支点反力が初めてゼロとなる時点の地震力は、標準せん断力係数換算すると、転倒した方向で0.04程度、逆方向で0.13程度と差があった。転倒によって基礎の浮き上がりを生じた西側及び中央の構面では、パイルキャップが目立った損傷はなく、杭頭部とパイルキャップとは接合されていない状態であったものと考えられる。その

一方で、既製コンクリート杭の杭頭部には斜めひび割れや縦ひび割れなどの著しい被害が見られたことから、地震時の上部構造の挙動により杭頭部に大きな圧縮力が作用したことが想定された。転倒によって基礎が地中に押し込まれた東側の構面では、折損した状態の杭が数本見られたが、掘削調査を行った深さ4 m程度の範囲では多くの杭は構造体としては確認できなかった。地震時の杭体の被害に加えて、転倒に伴う基礎の大きな沈下や地盤の動きに伴って杭体が破砕された可能性がある。また、西側の構面の杭と異なり、東側のほとんどの杭で地中部（G.L. - 5 m ~ - 6 m付近）に杭体の折損等が確認された。また、杭体の被害が見られた地表付近はN値2以下程度の軟弱な地盤であった。

以上の結果から、転倒被害が確認された建築物にあっては、上記の複数の要因が複合して一部の杭に負担が集中しやすい状況にあるなど、片側に過大な傾斜を生じやすい構造（計画）であり、転倒を生じた東側の杭においてパイルキャップ下の数mの範囲で支持力を喪失する著しい被害を生じたことが推察された。また、既製コンクリート杭における大きな被害の発生には、高軸力下で杭頭部に作用するせん断力のほか、地盤の地震時の水平変形の影響が指摘された。これらの調査を踏まえて、転倒に至るシナリオ及び被害要因について、現時点では以下のとおり整理された（図2参照）。ただし、建築物の転倒については未解明の部分も多く、今後の調査研究により変わり得るものであることに留意されたい。

状態1：被災前の状態

状態2：地震動による杭頭部の鉛直・水平抵抗の喪失

状態3：圧縮側杭への水平力負担の集中による杭の支持力喪失につながる著しい破壊（傾斜の発生）

状態4：杭の支持力喪失後の地盤の支持力不足による建築物の著しい沈下に伴う傾斜の進行

状態5：被災後の状態（転倒）

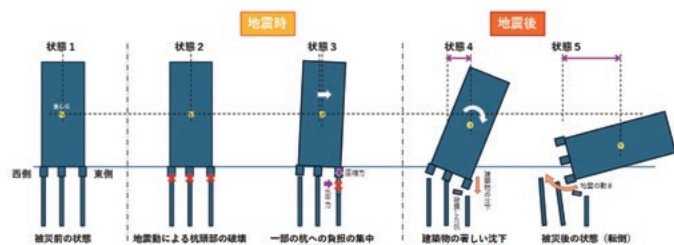


図2 被災シナリオ

現行基準（平成13年国土交通省告示第1113号）に従って杭の耐震設計を行い、一次設計における水平力及びそれに伴う鉛直力（軸力変動）に対して短期の許容応力度以内としたものについては、これまでの震災において今回のように転倒に至ったものはないことを踏まえると、杭頭部とパイルキャップとの接合に一定の耐力が確保されることで、

杭頭部の破壊に伴う引抜き側での応力伝達の喪失による圧縮側杭への負担の集中や、引抜きを伴う転倒を抑止することが期待できる。

●対策の方向性

現行基準（平成13年国土交通省告示第1113号）以前に建築された建築物について、（1）基礎が地震時に支持性能が容易に失われるおそれのある杭に支持されたもの、（2）上部構造が地震時に片側への傾斜を生じやすい構造（計画）であるもの、（3）杭の支持力が喪失した後、地盤の支持力不足により建築物が著しい沈下を生じるおそれのあるもの、すべての要因が重なると転倒の可能性が高まる。建築物が転倒するか否かを構造計算で直接的に確認することは、高度な技術を有する設計者であっても困難な現状であり、判断基準の明確化のためには多くの技術的課題が残されている。また、建築物の転倒については未解明の部分も多いことや、これまでの震災では杭に大きな被害を受けたものは数多く報告されているものの、今回のように転倒に至ったものではなく、当該建築物が転倒に至ったことは上述の要因が重なったことにより生じた非常に稀な被害であったと考えられることから、現行基準以前に建築された全ての建築物が直ちに危険であるとは言えないが、今後、その安全性の確保に向けた取り組みが必要である。

■建築物の継続使用性

●被害状況と調査結果

建築物に設置されている設備機器を主たる対象として、その被害及び地震後の継続使用性の実態を把握する調査を実施したところ、梁や床スラブなどの構造部材、天井などの非構造部材の被害に加え、埋設配管の破断などの建築設備の被害や、水道・電気などのライフラインの途絶により継続使用性が損なわれた事例が多く確認された。一方、免震構造を採用したことにより、構造部材、非構造部材、建築物内の建築設備の被害が抑えられ、かつ、断水時の対策として井水を利用できる設備をあらかじめ設けておいたことにより、継続使用性を確保した事例もあった。

●対策の方向性

継続使用性を確保するために必要となる、非構造部材および建築設備の損傷を低減するための耐震設計や、水道、電気、ガスなどのライフライン途絶時の対策を計画する上での配慮事項等について、「防災拠点等となる建築物に係る機能継続ガイドライン」の充実を図る。

■おわりに

地震はいつ来るか分からない。その一方で、耐震改修の実施や構造基準の不断の検証など事前に取り組むことができるものもある。地震時の建築物被害を要因とした被害者が一人でも少なくなるよう、これからも取り組んでまいりたい。

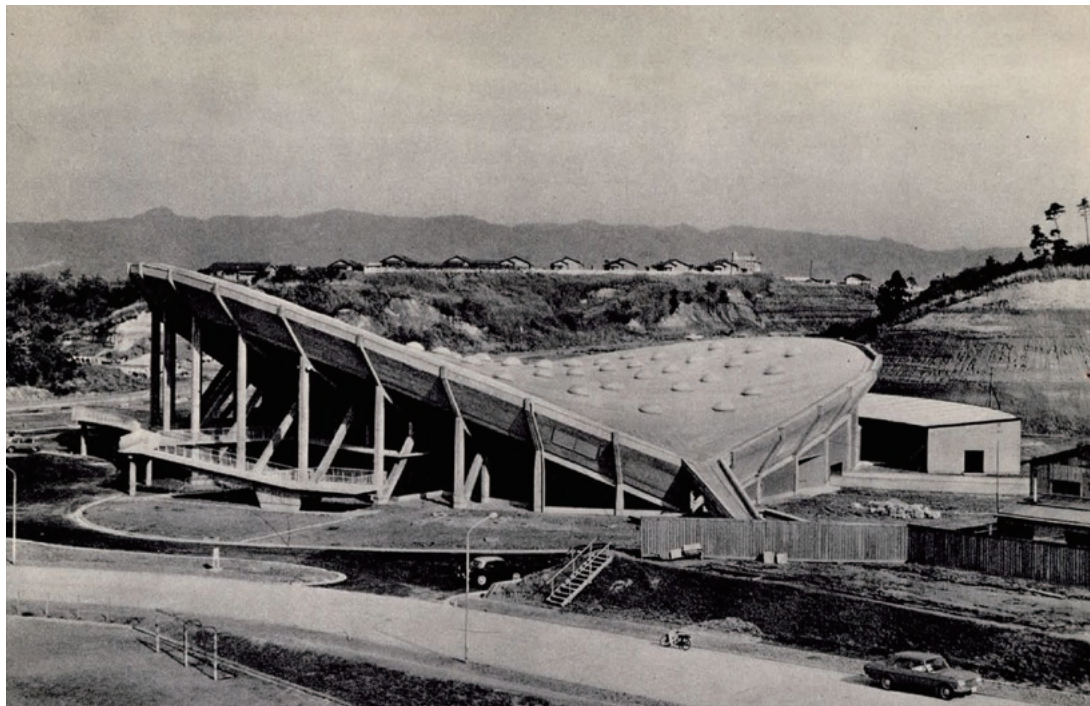
78 松下電器体育館 (現・パナソニックアリーナ)

設計施工：鹿島建設株式会社

(1965年7月号)

福原和則

大阪工業大学教授



外観写真(左) および内観写真(右上) 『建築と社会』1965年7月号

パナソニックアリーナ(筆者)

■はじめに

日本建築協会の事務所が2025年3月に改装され、オフィスレイアウトが刷新された。それに伴って、長年蓄積されていた保管物が整理され、大切に保管されていた貴重な資料が再認識された。新しいオフィスにそのような資料が一部展示されている。そのなかでちょっと気になる写真が目についた。松下電器体育館である。バタフライ型の懸垂曲線を含んだ屋根を持つスタジアムのような建築で、屋根を支える躯体は、素地の荒々しさを押し出した印象を含んでいる。設計施工は鹿島建設株式会社である。事務局によると現存している建築であるとのこと。再読を試みることにした。

■パナソニックアリーナ

鹿島建設株式会社関西支店営業部の仲介を得て、パナソニックスポーツ株式会社のご協力により現地を訪れた。緩やかに上昇するアプローチの先に堂々とした姿でそびえるアリーナが現れる。現在は、パナソニックアリーナに改称され、パナソニックグループで使用されると同時に、パナソニック関連のバレーボールの名門チームである大阪ブルテオンの拠点としてホームゲームが開催されている。正面には、スタンドを支える柱が円弧状に配置されていて、その柱間にOSAKA BLUTEONの文字とマークが、ブルーのシートに鮮やかに浮かび上がり、見る人のスポーツマインドを掻き立てる。内部に入ると中央のアリーナの片側に階段状に弧を描いてせり上がる客席があり、反対側に

舞台を備えている。

これまで、パナソニックグループ(旧松下グループ)入社式、イベントや運動など多目的に使用されてきたが、近年は特にバレーボールSVリーグの人气が盛り上がっていて、多くの女性ファンが来場されるとのことであった。

■時代を先駆けた厚生施設

記録によると松下電器体育館は、1965年に開設された。当時の松下幸之助社長が週休二日制を導入した年である。

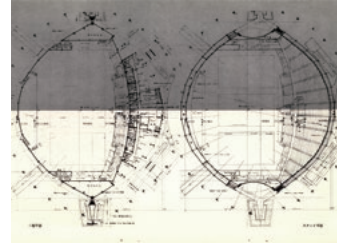
松下は「今後、世界のメーカーと互角に競争していくには、能率を飛躍的に向上させなければならない。そこには休日を週二日にし、十分な休養を取る一方で、文化生活を楽しむことが必要になる」と方針を発表した。

1960年代、松下電器は、従業員の福利厚生の充実に他社に先駆けて積極的に取り組んだ。まず1960年に保養・スポーツ・娯楽施設、結婚式場、宿泊施設などを完備した「千里丘保養センター」を開設し、保養所も北海道、神奈川県などに新たに4か所を増設した。また、従業員の研修、スポーツ施設の充実を図り、1964年に枚方の地に「社員研修所」を、そして、翌年にこの「松下電器体育館」を開設した。^(註1)

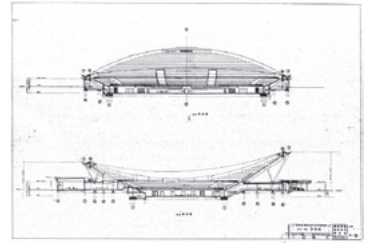
同時期に同じく鹿島建設の設計施工で、東京体育館並びに和歌山体育館が竣工しているが、屋根は吊り構造ではない直線的な傾斜屋根であった。^(註2)



松下電器東京体育館竣工写真（鹿島建設株式会社所蔵）



平面図（『建築と社会』1965年7月号）



断面図（鹿島建設株式会社所蔵）

■ 体育館と集会ホールの機能を合わせて

『建築と社会』1965年7月号に掲載された記事を参照してその概要を紹介する。設計については、京谷健（後の設計本部大阪設計部長）が、施工については、小島雄（後の関西支店長、副社長）が当時の担当者として執筆している。「この建物は、枚方市にある松下電器産業株式会社教育センターの敷地内に設けられ、企業体の厚生・教育の一施設として、屋内体育館・集会ホールに使用する目的で企画されたものである。」「内部にあっては、観客用スタンドを片側に集めてカーブさせ、地盤面から約2米掘り下げたアリーナを挟んで、ステージと向かい合わせて、競技時観客の死角をなくすように留意した。」

平土間のアリーナに対して片側に舞台、片側に観客席が集められ、傾斜に沿ってせり上がる形状である。建物平面の外形は、左右対称であるが、バタフライ形状の屋根は、観客席側が舞台側より高くなっている。室内から見ると、天井は中央で垂れ下がり、舞台側と観客席側が高く上がっている。体育館としての機能を考慮すると、中央の高さが重要である。一方で集会ホールとしての機能を考慮すると、天井の高さは、舞台への視線と音響効果をもとに検討される。二つの機能の相反する条件が調整されて平面と断面が検討された様子が想起される。天井形状について、以下のように記述されている。「サスペンション構造とした結果、室内空間は最小の容積となり、冬季の暖房負荷を有利に解決できる筈である。空気はスタンド最上部を取り巻くコンクリートダクトから吹出し、ステージ上部から排出される。」空調の吹き出し口は、三角形の断面を持つRC造のもので、アーチに沿って最上部でリング状につながっている。最上部から天井勾配に沿って吹出して循環させる仕組みである。暖房負荷の抑制は、ランニングコストの抑制につながることも環境配慮に直結する。長年使い続けられる状況を支える一つの要因になっていると考えられる。

■ サスペンション構造

当時のサスペンションルーフの例として、丹下健三が設計した東京オリンピックの国立屋内総合競技場が挙げられよう。2本の巨大な柱（メインポール）の間に渡したワイヤーロープ（メインケーブル）の

左右に基盤の目状にワイヤーロープを張り、その上に厚鉄板で葺いた屋根を架けるワイヤーロープによる吊り屋根構造であった。それに対して、松下電器体育館は、鉄筋コンクリート造の2つのアーチに挟まれた内側に、ワイヤーロープを張る形式である。同じ吊り構造であっても、似て非なるものである。当時の『建築と社会』では構造について以下のように記している。「RCラーメン構造半地下及び、地上2階建 最高部G.L.+18,000。屋根RCアーチ梁により、サスペンション構造部を支持し、合力は2本の柱脚に集り、地中タイビームとアーチ中間のPC鋼棒群タイビームにより変形を補正してある。」二つのアーチ及びその下部構造は、スタンド、その下部、アーチを支える柱を含んで、すべてRCラーメン構造である。その基壇の最上部であるアーチにサスペンション鉄骨をアンカーボルトで留め付けた。鉄骨の上部は富士波ラスシート・ガンナイトモルタルの仕上として、屋根面に防水を行った。工事は、昭和39年6月～昭和40年5月にかけて11か月で行われた。サスペンションルーフを形成する鉄骨のアンカーボルトの角度はすべて異なる上、段階的的施工荷重をかけるにあたり、測点における変位量を測定しつつ、大ビームPC鋼棒群の加力を段階的に行ったことが記されている。

■ さいごに

鹿島建設はその後、秋田ドームや出雲もくもくドーム、長野オリンピックのエムウェーブを設計施工で生み出した。優れた構造技術や構造デザインのみならず、空気調和のシミュレーションをはじめとする環境調整を含むエンジニアリングの基盤の上に実現した作品群である。松下電器体育館は、その後の展開を予見させる視点と創造性を含み、時代を先駆けた意欲作であった。施主の高い志に支えられて、設計者と施工者が奮闘した幸せな建築が60年を経た今も大切に継承されていることに注目したい。

註1 パナソニックグループのホームページからの引用

註2 鹿島建設関西支店、竹島剛（建築設計部担当部長）佐藤和人（設計設計部専任部長）からのヒアリングによる



U-35委員会企画 AAJ U35 EXHIBITION 2026.03.18 - 2026.03.22

■AAJ U35 EXHIBITION

3/18 (水)~3/22 (日) 11:00~18:00

FabCafe Kyoto

来場者 222名

■トークイベント: 3/21 (土) 17:00~19:00

ゲスト 阿部俊彦氏、山口敬太氏、的場理氏、
西口健太郎氏

モデレーター 木下浩佑氏

U-35委員会 大屋泰輝 (リーダー)、
市川雅也 (サブリーダー)、
倉知寛之 (サブリーダー)

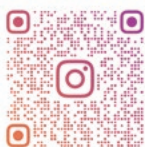
参加者 47名 (U35メンバー含む)

協賛企業

アイカ工業(株)/イトーキ/因幡電機産業(株)/
(株)エスウッド/(株)遠藤照明/(株)ABC商会/(株)オカムラ/
元旦ビューティ工業(株)/(株)国代耐火工業所/
ケイミュー(株)/コイズミ照明(株)/コクヨ(株)/コ
マニー(株)/(株)サンゲツ/(株)スミノエインテリア
プロダクツ/太陽工業(株)/立川ブラインド工業(株)/
田島ルーフィング(株)/東芝エレベータ(株)/東リ
(株)/日本興業(株)/(株)ニュースト/(株)平田タイル/
不二サッシ(株)/フジテック(株)/文化シャッター
(株)/(株)ユニオン/(株)LIXIL/ルノン(株)/YKK AP(株)

U-35委員会Instagram開設しています。
活動内容やメンバーの雑感などざっくりばら
んに情報をアップしています。

<https://www.instagram.com/u35.aaj/>



●展覧会の概要

これまでU-35委員会(以下U35)が企画・運営してきた、社会に向けたアウトプットとしての「action」は、今回で記念すべき11回目を迎えました。2013年にU35が設立されてから12年が経過し、メンバーは新陳代謝を繰り返しながら、年代としてもひと回りする節目を迎えています。これを契機に、これまでの活動を紹介する展覧会を開催することとしました。

本展覧会のねらいは、日本建築協会およびU35の活動を広く発信し、今後の新たな関係性を広げることにつなげることです。展覧会は、Loftworkが運営するFabCafe Kyotoにて、3月18日から3月22日までの5日間開催しました。開催にあたり、30社の協力会社さんからの協賛をいただいております。

展覧会は、以下の3つのテーマで構成されています。

- ①日本建築協会 U35 exhibition
- ②nomadogiとパブリック
- ③35歳、!!

「日本建築協会 U35 exhibition」では、「建築と〇〇」をテーマにディスカッションを重ねてきた「talk baton」28回分の記録や、街に対するアクションとして実施してきた「action」10回分の記録に加え、これまでの出版物を展示しました。

「nomadogiとパブリック」では、8th action、9th actionにおいて茨木市と協働し、茨木市役所前線の廃道計画地で2回にわたって実施した社会実験の過程で誕生

した、2×4材で組み立てる家具ユニット「nomadogi」を紹介しています。社会実験で使用したnomadogiは、昨年度の10th actionにおいて、日本建築協会の事務所改修時の家具としても活用されました。このように、近年のactionはnomadogiを用いた活動が中心となっており、今後nomadogiを活用していくパートナーを探すことも目的として展示を行っています。また、「nomadogiとパブリック」をテーマに議論するトークイベントも開催しました。

「35歳、!!」は、U35という当委員会の名前にある、35歳という年齢について考える企画展示です。35歳は人生におけるさまざまな転換点となる年齢ではないか、という問いを出発点に、「自分は35歳でどうありたいのか」「振り返ってみて35歳はどのような時期だったのか」「同年代の人々は何を考えているのか」といった視点から参加型の展示で構成しています。

5日間の展示期間を通して、建築関係者のみならず、学生や一般の方含めのべ222人、トークイベントは47人の方々に参加いただきました。



展覧会の会場: nomadogiを利用した展示計画



●nomadogiの自走

nomadogiという名称は、遊牧を意味する「ノマド」と「木」を組み合わせた造語です。誰もが手に入れやすい材料を用い、誰でも簡単に組み立てることができ、かつコンパクトに収納・運搬できることから、都市のさまざまな場所を遊牧するように使われていくことを目指してきました。

これまでnomadogiを活用した活動は、U35が主体となり、イベントの企画・運営を含めて実施してきました。しかし、U35は社外委員会としての活動であるため、nomadogiを継続的に運用するハブ的な役割を担うには限界があると感じるようになりました。そこで、nomadogiがU35の手を離れ、自律的に運用されていく「自走」を目標に、2025年度は活動を進めてきました。

その結果、Loftworkが運営するFabCafe Kyotoが新たなハブとなり、nomadogiを自走的に運用していただける体制が整いました。本展覧会も、FabCafe Kyotoで自走しているnomadogiを借用する、という位置づけで展示を構成しています。

2025年10月にはFabCafe Kyotoへnomadogiを搬入し、FabCafe KyotoのスタッフとU35メンバーで組み立てを行い、自走がスタートしました。その後、FabCafe Kyotoをハブとして、nomadogiはさまざまな場所へと展開されています。2025年11月には、京都府立植物園で開催された「ふしぎラボ in どんぐりの森」において、屋台ブースやベンチといった家具として利用されました。この

際、U35は組み立ての立ち合いという立場にとどまり、搬入・設営・撤収はLoftworkが主体となって行っています。さらに、2025年12月から2026年2月にかけては、テントサウナを主催する松山氏にベンチユニットとして貸し出されました。本展覧会後の2026年4月には、西宮市役所職員有志による活動「hitotoki」に貸し出され、夙川での花見を行うための川床や、ジャズライブの観覧席として使用されました。このようにFabCafe Kyotoを中心とし、nomadogiは都市の中を循環しながら、新たな貸し借りの関係性を広げています。

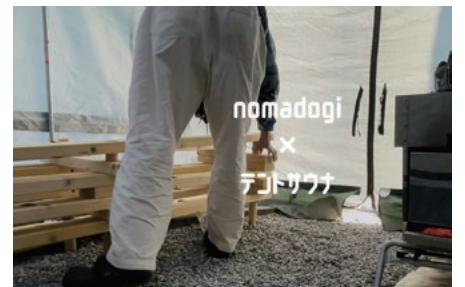
また、FabCafe Kyotoでは日常的に多様な展示が行われており、その中でもnomadogiを用いた展示が実施されています。FabCafe Kyotoと出展者が協働し、nomadogiの新たな使い方を開発するなど、U35の手を離れたからこそ得られた発見も多くありました。nomadogiを床に敷き詰める、最小限の材料で立体的に組む、丸棒に展示作品を吊り下げるなど、出展者の自由なアイデアが展示に反映されています。

このように、nomadogiがU35の手を離れて自走することで、これまで以上に都市の中を循環させることが可能となり、その循環の一連の流れの中に本展覧会を組み込むことができました。本展覧会が、nomadogiを起点とした活動のさらなる展開と、新たなつながりの創出につながる契機となることを期待しています。

(文責：大屋)



ふしぎラボ in どんぐりの森：イベント風景



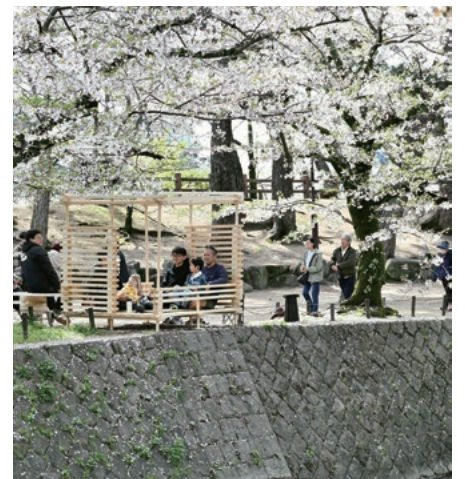
テントサウナ：ベンチとして利用



FabCafe展示：nomadogiを床に敷き詰めた展示台



FabCafe展示：展示をnomadogiで立体的に構成



hitotokiに貸し出し：花見をする川床

Member's Forum

活動報告の頁

■AAJ U35 Exhibition詳細

日本建築協会U35 exhibition

-新陳代謝する組織の12年-

日本建築協会U-35委員会（以下U35）は設立してから継続して2つの活動を行ってきました。1つは建築を取り巻く他分野のゲストがトークのバトンを繋げるコミュニケーションイベント「talk baton」。若手プラットフォーム作りの一環として、建築をフィールドとするU35メンバーと毎回のゲストとの対話を通じて、建築が本来持っている多様性やバイタリティを見つめ直し、これからの建築に求められる領域を探っていくin-putの活動です。もう一つは、年に1回のペースで社会に対してアクションを起こす「action」。U35メンバー間で共有している「建築と社会」にまつわる問題意識やtalk batonでの気づきに基づき、皆で設定したテーマについて深く掘り下げ、多くの方々と共有し、その価値を広く発信するために開催しているout-putの活動です。

また、近年ではUnder 35 Architects exhibitionとの共同イベントや、U35メンバーと様々な建材メーカーの若手が集い、会社の枠を超えて知見を共有し合う「建築と集合知」の開催、組織で働く若手設計者の実情を描いた『組織設計・ゼネコンで設計者になる』を出版するなど、活動の幅を広げています。

U-35委員会は12年間で『talk baton』を計28回、『action』を計10回行いました。それらは毎回日本建築協会の会誌『建築と社会』に掲載し記録を積み重ねています。今回の展示ではそれらの記事をハンガーに吊るして一

覧に並べ、これまでの活動量を可視化できる展示としました。nomadogiで組み立てた展示ブースは会場の机と一体化することで、Cafe利用者の空間と展示空間が共存し、来場者が自然と展示に触れられることを意図しています。

また、入口のサインについては、寸法の調整を行いやすく、nomadogiとも相性のよい布サインでデザインし、こちらも既存の家具と組み合わせることで、Cafe空間に溶け込んだデザインとしました。

(文責：中野)

nomadogiとパブリック

-ノマディックプレイスメイキング-

nomadogiのスタートは、前項で紹介のあった「action」のうち、2023年実施の「8th action 建築とみち」まで遡ります。「8th action」では茨木市の社会実験を舞台とし、ゾーンを仕切りながら人の居場所とみち空間をつなぐ「ライン」と、フレーム上に組むことで市民活動の小さな拠点となる「ブース」の2パターンを展開することで、パブリック空間における実証実験を行いました。それ以降nomadogiは様々な空間・もの・こと・ひとを介して展開し、より洗練され使い込まれ、U35を代表する簡易型木ユニット家具として親しまれていると思います。

nomadogiはホームセンターでも購入可能な2×4材と40Φの丸棒で構成されています。最小限の金物と組み合わせることで、少ない部材で多様な形を創ることが可能です。組み立ては簡単で穴の開いた2×4材を丸

棒に差し込み、積み木のように積み重ね釘を使わず固定が出来る為、誰でも手軽に組み立てをすることができます。

今回のnomadogi展示は、これまでの利用方法や地域への展開・活動の継承をnomadogiを通じて体感できる様なデザインとしました。80案を超えるnomadogiの利用方法を集約した「nomadogiカタログ」はU35メンバーが実際につくった事例や「こんなnomadogiの使い方もあるだろう」といったあっと驚く使い方も含めて取りまとめたものになります。カタログを1枚1枚円環状に天井から吊るし、自然と視線に入る様な展示計画を検討しました。今回取りまとめた80案はnomadogiをこれから利用したい方々や社会へのアピールにもなると考えています。

テーブルの座組はnomadogiによる製作で行い、畳を組み合わせることで、会場になじむデザインとし、イベント時には展示スペースを舞台や客席に容易に転換可能な計画としました。テーブルの上には「mini nomadogi」を設置し、実物の1/12スケールモデルにより、訪れる方々が、各々に発想が生まれる様な空間を目指しました。材料はアクリル板によるものです。FabCafe Kyotoのレーザーカッターを利用し、地産地消的な場の利活用にこだわりました。

nomadogiの語源はノマド=遊牧民を指し、木材が都市を軽快に移動し、その土地になじむことを目標としたものです。nomadogiの展示空間は、来訪者の心に残りnomadogiの次の舞台へのきっかけとなれば幸いです。

(文責：安達)



U35 布サイン展示 (概要紹介)



U35 これまでの活動アーカイブ展示



35歳、!!

-35歳ってなんだ? 人生を考える展-

U35は、35歳以下の若手設計者により構成されています。35歳について考えてみると、キャリアの円熟期に入り、結婚や出産、住宅購入といったライフイベントが集中する「人生の様々な転換点となる歳」と言えるのではないのでしょうか。今回のAAJ U35 Exhibitionにおいては、社会に揉まれながら成長を実感し、次なる展望を模索する「35歳」を切り口に、人生について考えてみる企画展を実施しました。

展示は、「35歳データベース」「35歳価値観タイプ診断」「私とあの人の35歳アーカイブ」「異業種コラボ掲示板」の4つからなる構成としました。

「35歳データベース」は、仕事においてもプライベートにおいても様々な変化がある35歳について、統計データをもとに分析した展示です。世間一般における35歳と来場者自身の35歳を比較・イメージしながら、自身の人生を振り返り、これから進んでいく道を見出す・再認識するきっかけとなるような展示としています。

「35歳価値観タイプ診断」は35歳における価値観を8つのタイプに分類した、チャート形式の展示です。35歳になっていない人も、35歳を超えている人も、35歳の自分になったつもりで各問いに答えていくと、1つの価値観タイプに分類されます。同じタイプの偉人や友人と比較しながら、来場者自身を知る一つの指標となるような展示としています。

「私とあの人の35歳アーカイブ」は、35歳価値観タイプ診断の結果に応じた色のカー

ドに「35歳とはどんな歳なのか」を来場者自身が考え、記入する参加型の展示です。偉人や友人、先輩、後輩たちは、35歳の時に何を考え、何を成そうとしているのか。8つそれぞれの価値観タイプに分類された様々な人の「35歳とは」を集め、「35歳」について深掘りする展示としました。

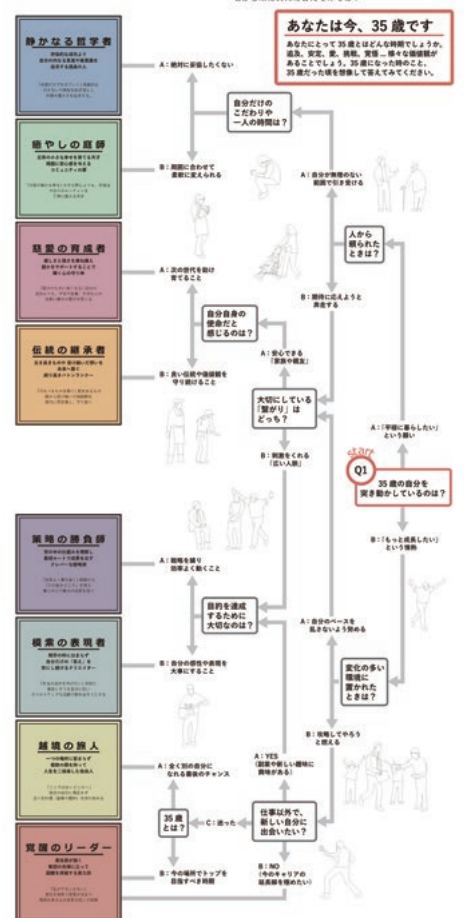
35歳以下の設計者で構成された日本建築協会U-35委員会は、talk batonという活動において「建築×〇〇」をテーマにトークセッションを行い、actionにて様々な社会実験などを行っています。そんな私たちと「何か一緒にやってみたいコト」や、建築×〇〇の「〇〇」にあてはめたら面白そうなコト・ヒトを自由に書ける掲示板を設けることで、新しい発見や繋がりをつくるきっかけになればと思い、「35歳、!!」の最後に「異業種コラボ掲示板」を設けています。

今回の企画展示の中で、多くの方に「私とあの人の35歳アーカイブ」に参加いただきました。「35歳とは」という問いに対して、千差万別な回答をいただき、改めて35歳が転換点たる所以を実感するとともに、このアーカイブをきっかけに話がはずみ、友人や先輩後輩の想いに触れることもできました。

設計者としても、35歳は一つの転換点となります。入社して10年程の経験を活かし、建築主の想いと自身の想いを設計に反映させ、これからどのように建築を設計していきたいのかを、どう示すことができるか。35歳は設計人生においても、多様な分岐点になり得る貴重な時期であると感じています。

(文責：三井)

35歳価値観タイプ診断



nomadogi



35歳について考える企画展示「35歳、!!」



35歳の自分を見つめ直す「価値観タイプ診断」

Member's Forum

活動報告の頁

■TALK SESSION 3/21実施

本イベント「nomadogiとパブリック-ノマディックプレイスメイキングという考え方-」では、日本建築協会U-35委員会（以下U35）が開発した可変可能なユニット家具「nomadogi」を通して、今後のパブリックスペースの可能性について探るトークイベントを行いました。

前半は、U35およびnomadogiのこれまでの歩みや現在の活動について紹介。また、ゲストスピーカーの皆様からも、それぞれの取り組みや活動についてご紹介いただきました。後半のトークセッションでは、モデレーターとして、木下浩佑氏（FabCafe Kyoto）を交え、建築・都市・場づくりを横断する多様な視点から議論を深めました。

【前半：活動紹介】

1. 大屋泰輝（日本建築協会U-35委員会リーダー）

「nomadogi」は、名前の通りノマドという言葉と木という言葉を掛け合わせたものです。ある日はベンチとして使われていたものが、またある日はイベントブースになるなど、形を変えて循環していく。これまでの活動で生み出してきたものを含め、現在は81パターンの形が出来ています。

面白いのは組み立てる過程でも周囲の人を巻き込むことができることです。京都府立植物園でイベントブースを制作しましたが、私たちが見本を作る横で、園の方々がそれを見ながら自主的にブースを組み立てていただきました。身近な材料で、シンプルなルールで出来ていることで、初めて見た方でも理解しやすく、参画しやすいシステムだと思います。

現在はFabCafe Kyotoを中心にnomadogiの貸し借りの関係ができて始めており、先日はサウナイスとして利用するなど、様々な場所で形を変えて都市を循環しています。

2. 山口敬太（京都大学大学院 地球環境学 堂 准教授）

私は道路や歩行者空間の設計やマネージメントにも関わっていますが、最近のニーズとして、利用する団体さんが自分たちの手で使いやすくてできる「関わりしろ」が求められています。道路にベンチを置いてしまうと風景



が固定化しちゃうのですが、固定化した風景よりも、いろいろ変わりうる風景の方がワクワクしますよね。

御堂筋歩行道ユニットのプロジェクトでは、一つのベンチでも道路管理者が受け持ってくれない「木の部分」を民間事業者が管理・占有する、という役割分担を考えました。パブリック側も、こうしたアダプティブに使えるファニチャーを求めています。例えば民間企業がやる気になれば、行政が置くだけではない、もっと自由な活用の可能性が広がっていくと考えています。

3. 阿部俊彦（立命館大学 理工学部 准教授）

気仙沼の復興に関わっていた頃、地元民が反対した防潮堤を海と街を繋ぐ場として提案しました。公共事業なので、行政からは「安全のための避難施設として作ってください」と言われます。だから、避難施設ですよと説明しつつ、普段は子供が遊ぶ、ピクニックやイベントができるよう、デザインしました。公共空間を、目的に対して素直に作りすぎても面白くありません。私は「嘘も方便」を随所に埋め込んでいくことも、物事を円滑に進めるためには許されるんじゃないかと。

nomadogiが素晴らしいのは、「変えられる」ことです。路上で使っていて注意されても、30分後には自転車置き場に変えて「これならいいよね」と。利用者が思い描いたユートピアを、場所をシェアしながら実現していくためのツールになるのではないかと考えています。

4. 的場 理（茨木市市民文化部 共創推進課）

茨木市の新施設「おにクル」の前事業のイパラボ広場での取り組みでは、市民の方に参加いただけるハードルの低い空間や、緩やかな運用のあり方を大切にしてきました。スケボー少年たちと一緒にマナー啓発のアイテムを作ったり、市民の遊びに僕ら職員も混ぜてもらったり。毎年「実験」という言葉で逃げながら（笑）、とりあえずやってみて、共感を広げて次の展開につなげていく、ということをやっています。

最近おにクルの管理が行き届きすぎてしまっていると感じており、来年度はおにクルの中で軽やかな屋台を走らせたい。人と繋がる距離感をもう一度作ってきたいんです。nomadogiのような可変性や、やってみないとわからない「実験」の精神は、非常に参考になるなど感じています。

5. 西口健太郎（西宮市役所職員/hitotoki）

普段西宮市役所で働いていますが、今日はhitotokiというサークル活動の話をしします。モットーは、「やりたかったからやった」。市役所の仕事はガチガチに真面目なものが多いので、ちょっとでも楽しくできたらと思って始めました。

最初は自作の椅子や卓球台を作って街に出したのですが、失敗も多く、「外で卓球はできない」と作ってから気づいたり（笑）。でも、民間の中に公共の機能が入っていくような、逆転の発想にワクワクしています。再来週は、nomadogiをお借りして夙川で「勝手に」川床をやります。まずは自分たちが楽しむことで、街との新しい関わりを作っていきたいです。

【後半：トークセッション】

木下 先生方のお話を伺っていて、やはり「可変性」というところが、単に「仮設物を作る」ということではなく、「固定化させない」と山口先生がおっしゃっていたり。また阿部先生がおっしゃっていた「目的外の使用」や「嘘も方便」という言葉をなるほどなと思って聞いておりました。公共の目的に管理されたものにするのではなく、「関わりしろ」にするということをおっしゃっていたかと思えます。

あとは、西口さんのお話を伺いながら今の話と繋がって、「勝手に」という言葉がメインのキーワードかなと思っております。勝手にその活動をできるようにしているという点と、的場さんが「おにクル」の話でされていた「自由に使えるようにするためのルールメイキング」といったお話。それもある種の「勝手に」ではあるのですが、体制が整ってくると、勝手にする余地が少なくなっていくのがむしろ今の課題かもしれませんとおっしゃっていました。この「勝手に」という話や、可変性と呼んでいるものの捉え方を、今日のメインテーマにできたらと考えています。

私たちが運営しているこの場所でも、どんな目的の方が何をしても良いのがカフェという場所の考え方だと思い、お店をオープンにしています。カフェ営業中にコーヒーを飲んでいらっしゃる方がいる時も、nomadogiのような展示が急に現れては、次に来たらなくなっている。そうすると座席が減ったり増えたりするのですが、来られた方に「そこ座れますか？」と聞かれながら展示物の置かれたお座敷をご案内したり、後ろでは誰かがレーザーカッターを使ってものを作っていたりします。結構その「勝手に」ということと、他の人が何をやっているか分からないけれど場所を共有している、といった



木下浩佑／FabCafe Kyotoブランドマネージャー

ことがよく起こっています。

そういう場所でのnomadogiを置いていると、最初は作っていただいたものをそのまま使っていましたが、我々スタッフが勝手に切り替えたり、展示しに来た人が勝手に板を敷くだけで使うといった新しい使われ方が生まれていたりもします。そのあたりの実践している内容も含めて、少しお伝えしながら進められればと思います。

大屋 「勝手に」というキーワードがすごく面白いなと思いました。U35でこのnomadogiの形を作って、イベント等に合わせて事前に計画を進めていくものの、大体は現場レベルで形を大きく変えたりしてその場で最適な形を考え直して誰かが勝手に調整しています。nomadogiはそういった「勝手に」を実現できる、即座に組み方を変えられる柔らかさのようなものがあると感じています。そういった柔軟なシステムや体制が他のみなさんのお話を聞いていても共通して重要なのかなと思います。



大屋泰輝／日本建築協会U-35委員会

倉知 皆さんの活動紹介を聞いて、パブリックスペースを運用するときや、何か物事を起こすときには、やはりリスクやハードルがネックとなり一歩踏み出しにくい、という点が共通の課題なのだなと思いました。皆さんそれぞれの立場でハードルを超える方法を考えられてきた実践に興味深くお聞きしましたが、共通して、あるハードルを乗り越えるときの後押しとなる存在が求められているなと感じました。皆さん最後にnomadogiの良さについてコメントして頂きましたが、nomadogiはそれ自身が素晴らしいものだというよりも、パブリックスペースを運用する際のハードルを越えるための後押しとなる要素を兼ね備えているのだなど、自分の中で整理ができました。僕たちは建築設計の仕事をしています、建築というフィールドでは扱

う金額も大きかったり、使い方の設定があったりなど、空間の運用という点では融通を利かせづらい状況が多くあります。その分強さがあることが魅力ではあるものの、ストック型社会でこれからのパブリックスペースを作る上で求められているのは「少しこんなことを試してみたい」と思ったときに後押ししてくれるような存在なのかなと思いました。



倉知寛之／日本建築協会U-35委員会

市川 今日お話いただいた茨木市さんや西宮市さんは普通の行政マンではなかなか出会えないというのが直感です。制度上判断が難しいグレーなところ、そういったところにとことん付き合ってやってみようという方がいること自体が、すごい価値なのだと思います。

私は竹中工務店設計部に所属しています。「おにクル」で的場さんと一緒にプロジェクトを担当させていただきました。事業者の目線で言うと、おにクルを設計する時に「イバラボ広場」という実験広場が目の前にある状態で設計がスタートしました。そうすると設計者は、イバラボ広場でルールを柔軟に変えながら使っている様子を見せてもらいながら設計ができる。これは非常に恵まれたことだと思いました。設計者も手が止まらなくなるんです。「こんな自由な行政だったら、これも許してくれるんじゃないか」とどんどん積極的に提案したくなる。それはまさに、設計者や事業者が、行政の方に後押しされて設計する環境があるということです。

普段は「設計をしてから運用する」という一つの流れがあるのですが、そうではなく、手前に柔軟な試みがあることで事業者が入りやすくなる。そういう時系列でプロジェクトを進めていくのも非常に良いのではないかと感じております。

山口 お話を伺いながら、やはり「関わりしろ」があるというのが、すごく大きな可能性があるなということでした。自分たちの手で

Member's Forum

活動報告の頁

作れる、あるいは組み立てられるとなった瞬間に、自分たちの関わり方が全く変わってくる。今まで誰かに「発注」してほしいせざるを得なかったところから、「自分たちで考えてもいいんだ」「やってみてもいいんだ」と思えるようになると、社会実験の在り方そのものが変わり、主体性を引き出すことができるのではないかと。そうした「関わり方」と「しっかり感」のバランスをどう取られたのかをお聞きしたいです。もう一つが交換できるのがメリットだと思ひ、部材が規格化されていることで、部分的更新や追加ができる。保管場所も分散できると思うので、どれだからどれという使い方がない、インフラみたいなかんじも素晴らしいと思いました。



山口敬太／京都大学大学院 地球環境学 准教授

倉知 そもそも建築設計の仕事はしっかり側に寄っています。作ることと考えることが分業化・専門化されていて、専門外の関わりしろが少ないと思うところがあります。nomadogiの組み方は「校倉造り」や「屏風」などの伝統的な組む技術を参照していますが、そうした「組む」という専門技術を穴に棒を通して積むだけのディテールに簡素化しています。ものづくりは一人ではできないものですが、ものづくりに内在する協力関係を、nomadogiでは「組む」技術を簡素なあり方に変えることで、専門外に関わりしろを開く試みをしているのかなと考えています。そうして関わりしろとしっかり感のバランスが自ずと取れたのかもしれません。

市川 冷静になってみると、そういう思想で作ったという面もありますが、最初は茨木の道路の社会実験ですぐに片付けなければならなかったり、平日は駐輪場として、休日は別の用途としてニーズがあったり。短時間で切り替えるにはどうすればいいかとなった時に、2×4材に丸穴を開けておき、そこに丸棒を差せば、みんなで一気に移動できる。そ

うした社会実験ならではのリアルな課題を解決していった結果でもあります。

木下 「しっかりした部分」が、実は我々の場所で使う時に効いていたと思います。この部材だけを渡されて「ご自由にどうぞ」と言われると、不安で使えないのですが、建築をされているU35のみなさんが実際に作ってくださって、それを見たり触れたりする経験があると、その後に関わりしろが増えたと感じていました。大屋さんが最初にお話しされた植物園の例もそうで、最初ただ積んである状態だと少し手が出にくい。ですので、物だけでなく「誰が最初に何を作るか」も重要だと思いました。

阿部 さきほどの「勝手に使う」という話ですが、ただ勝手に使っているだけでは不十分で、nomadogiはまずデザインが格好いい。共感を得られるというか、誰かがこれを使って置いているのを、格好悪くて邪魔だったらどかしたいわけです。ですが、デザインがしっかりしていて格好いいというのは、共感を生むのだと思います。

伝統技術を踏まえた上でモダンなデザインにしていく。使い方も、カタログやブックもおしゃれですよ。この「こういう使い方をする」と格好よく使える」ということを示しているのは重要で、そこがポイントなのかなと思っています。



阿部俊彦／立命館大学 理工学部 准教授

西口 大学のアトリウムなどにこれが並んでいたら、すごく楽しいと思うんですよ。

阿部 設計に組み込むのは、図面に書いてしまえばいいなど、テクニックは色々ありそうですが、カスタマイズできる余地を作っていく方向へ向かうことが、一つの設計のあり方だと言えるのではないかと思います。

木下 これについて、答えにくいこともあるかもしれませんが、公務員のお二人は「動かせない」「やってはいけない」という制約の

中で、現場だけじゃなくて仕組みに対してどう働きかけるか、ということをやっているかと思っています。予算の問題や位置づけの難しさなど。また、U35メンバーの方は設計者の立場で、本業の中ですぐ実践するのが難しい理由など、仕事抜きでお話しできればと思います。



西口健太郎／西宮市役所職員・hitotoki

大屋 建物が基本動かないものを設計するっていうのもありますが、安全性を優先する面がありますよね。例えば棚一つ作るにしても、見たことのない材料を使おうとすると「本当に大丈夫なのか」と一つずつ紐解く必要があります。イケフェスを契機として、大林組では会社にnomadogiを置くことになりましたが、カウンターやベンチなど実物を通して実際に運用していくことで、こういった安全面に対する理解が少しずつ生まれてきていると感じます。現在は活動の蓄積ができてきて、カタログやブックなどの発信ツールも整ってきたので、そういった実績ベースで発信していくことが使う人の理解につながると考えています。

的場 茨木市で行ったストリートアクションの社会実験の際は、道路の許認可などを取りに行く担当は別について、自分は横で聞いていたので、道路での活動は「難しそうだな」となんとなく思っていました。おにクルは、館内の共用部分を小規模からでもイベントや活動に使える全国的にも珍しい施設になっています。かなり幅広い使い方を既に行っているので、nomadogiなどを置いてみることにしても、むしろ外より柔軟に試すことができます。「実験」という言葉を多用してはいますが、とりあえずやってみることで景色づくりや共感につながり、何かが起きるんじゃないかと考えています。

3年後どうなっているかは分かりませんが、来年度は館内に屋台を置いてみて、人の

流れや滞留、繋がりやの生まれ方を見てみたい。「共感」「これいいね」というポジティブな声が増えていけば、予算の話も含めて進めやすくなると思います。また、今日この場にあるnomadogiのカatalogや模型などイメージしやすいモノがあれば、ワークショップに活用できたり一般の方にも伝わりやすいと思います。



会場 理 / 茨木市市民文化部 共創推進課

西口 建築や設計の方が思っているよりも、一般の人はそこまで気にしていないのではないかと、というのが役所側の人間としての感覚です。私のような建築職の人間だと「大丈夫なのか」といった硬い話になりがちですが、現場の人たちは「建築協会が作ったの?」「どこでもやっているから大丈夫」といった感じではないでしょうか。そこに広い可能性があると感じました。

さきほど先生がおっしゃった「変えられる」という点も、形だけでなく、傷んだ時に部材を新しくできる、色々な人が持ち寄れるというのがnomadogiの良いところです。それを建築のプロセスに組み込もうとすると途端に難しくなるので、何か別の形で進める方が良いのではないかと思います。

木下 例えば「共創空間」という名前の多目的な場所を作っておいて、そこをきっちり作り込まずに余白の多い場所にする。そこで必要なものを、運営計画の予算の中で提案していくといった形がよいのではないかと思います。そうすれば発注も一括で予算化できて合理的ですね。現場運用の方も、最初に形がFIXされるとこの家具は邪魔だなと思うこともあるので、可動性やメンテナンス性の面でも非常に良いということを売りにしていける気がします。

市川 日本建築協会も一般社団法人のため、委員会活動も、利益を目的とした団体ではありません。現状ではU35メンバーの交通費

程度を賄いながら動けるようにしています。それ以外は原価と加工費で、2×4材1本が700~800円、丸棒が3000円程度。加工も単純な工程なので、この仕様ですぐに加工に入れるようなパートナーをその都度探している状況です。このようにコストを最小限に抑えながら活動してきた一方で、我々の思想としては海外産の2×4材ではなく、国産材で行いたいという思いもあります。木の循環と地域の循環を結びつけることは、次の狙いどころだと考えています。

木下 コストを抑えつつも、「誰かの完全所有ではなく共有できる」というルールに乗る必要がある」といったお話もありましたよね。

市川 おっしゃる通りです。最初に200本まとめて予算をつけるのは難しいですが、30本だけ用意し、足りない分は他から借りる、といった使い方ができます。この貸し借りの関係が大事だと思っています。材料が都市の中に滞留し、多くの場所を回っていて、使いたい人がその時々を集めて活用する。「共同所有」という考え方が大事なのだと思います。



市川雅也 / 日本建築協会U-35委員会

木下 会場のみなさんも、何か質問や感想はありますか。

参加者（大東市テントサウナで利用いただいた松山さん） 昨年12月のイベントでnomadogiを使わせていただきました。どうしても化石燃料由来のプラスチックの椅子を使いたくなくて、でも自分では作る技術がなかったのですが、これを見た瞬間に「これなら作れる」と思いました。板だけでは想像できませんでしたが、FabCafe Kyoto内の展示があったからこそ使い方がよく分かりました。木の温もりと香りが非常に良く、座り心地も良かったです。今後は椅子だけでなく、屋台の風景がこのnomadogiで埋め尽くされるようなイベントができればいいなと思っています。

木下 では、最後にこれからnomadogiで今後こんなことできたらいいなと思うことをお聞きしたいです。

阿部 nomadogiを普及させることは、それ以上に「哲学的なことを考えさせられる」という点に大きな可能性があると思います。身近な家具や什器への気付きを与えることもあるでしょう。建築家がかつて考えていたシステムを、社会に対して働きかけるための「ツール」として、私は使っていきたいなと思っています。

山口 プロダクティブなシステムとしてだけでなく、例えば子供たちや市民の「都市空間を使いこなすリテラシー」を高めるインフラとしての可能性があると感じています。社会運動的な側面こそが、建築と社会を繋げる方向になるのではないかと思います。

大屋 茨木の社会実験に対応できる什器を考えることからスタートしましたが、そこで利用した木材は様々な場所に循環させて利用することで、ここまで活動の幅を広げることができました。今年度はU35の手から離れて自走することを目指し、FabCafe Kyotoさんをハブにnomadogiを運用していただきましたが、今後も様々な場所を起点に活動の幅が広がればと思います。

指田（協会会長） 今日は「nomadogi」がパブリックスペースのアクティビティを向上させる装置としての可能性を強く感じました。デジタル世界のオープンソースのように、一定のルールを作って活用できる仕組みができれば、私たち日本建築協会の理念である「建築を通じて社会に貢献する」ことの、新しい形になるはずですが、日本建築協会は建築に関わる領域を超えた様々な方々が集まった団体ですが、この領域を超えたつながりから今後も様々な活動を展開できればと思います。本日はありがとうございました。



(文責：平田)

※記載の所属や肩書等は開催時点のもので

活動報告の頁

■展覧会・トークイベントを振り返って

●nomadogiがつくる建築と社会の新しい循環

U35でのここ数年の活動は、ノマドギを介して建築と社会の関係を少しずつ編み直していくプロセスだったように思う。実践を重ねるたびに、活動の意味が上書きされていく。そうしたU35でのスパイラルアップの活動過程において、今回の展覧会・トークイベントでは「パブリック」という切り口から改めてnomadogiやU35の活動の可能性を捉え直すことができた。

nomadogiは、社会実験やイベントで見慣れた「単管+テント」などの仮設風景のオルタナティブとして考えたものである。都市の中に、ものづくりを介した楽しい風景や協力関係が循環していくことを目指してきた。ディテールは、丸穴に棒を通し材を積み重ねるだけで機能や意匠を多様に変化させることができるようになってきている。「組む」技術を最大限に単純化したオープンな工法とすることで、スペースづくりにおいて多くの人が関わられる余白をつくる。考えることとつくることが分業化・専門化しているものづくりに内在于する協力関係を社会へ開く試みだ。

現在ではFabCafe Kyotoでの常設運用を皮切りに、希望者への貸出しや外部イベントでの活用など、社会実装を進めつつある。今回の展覧会・トークイベントは、nomadogiを中心としたこれまでの活動が「パブリック」や「社会」へと接続していることを実感する機会となった。

●「融通性」がひらく公共空間の可能性

トークイベントでは、パブリックスペースをつくる上でのポイントについて多くの示唆を得た。ここでは、議論に挙げたいくつかのキーワードを手がかりにしながら、これからの公共空間の可能性を切り開くものは何か、について考えてみたい。

・「関わりしろ」が主体性を喚起する

公共空間は、行政が一方向的に整備するだけでは十分に機能しない。むしろ、民間や地域の人々が気軽に関わられる余白が、場づくりの主体性を喚起し、都市空間を活性化させる。完全自由の余白ではなく、少し手の入った部分や規格化されている部分がガイドとなることで、関わりやすさがドライブする。

・「目的外使用」が都市を豊かにする

本来の用途に限定されない、多機能で多義的なものが自由な使い方を促す。制度や計画の中に、「嘘も方便」を許容する余白があると見立て、プレイヤー側から設定に縛られない使い方を見せることで、都市空間の自由度を高めることができる。

・「実験精神」、「勝手に」が都市へ切り込む

「まずは小さく試してみる」ための環境も必要だ。公共空間には予算やルールなど多くの制約が存在する一方で、行政側もより柔軟に街と関わる方法を模索している。低コストで手軽に扱え、「実験精神」を支える存在、「勝手に」を後押しする存在があれば、人と街との関係を探るスタディはもっと豊かになる。公共空間に必要なのは、人の主体性を喚起し、多義的に振舞い、一步踏み出すハードルを下げる「融通性」のある存在なのだと感じた。

ここでの「融通性」とは、状況に応じて姿を変える適応可能性 (Adaptability)、多様な主体を受け入れる柔軟性 (Flexibility)、そして複数の役割を横断できる多才性 (Versatility) を含んだ言葉として捉えている。nomadogiは手軽で、安価で、多機能で、協力し合えば一つの大きな空間もつくれるなど、ファニチャーに留まらず建築や広場にまで応えるスケールの振れ幅もある。まさに議論に挙げたポイントを網羅する「融通性」を表象する存在として、公共空間に求められる条件にフィットする。

一方でシステムとしての完成度だけでなく、共感を生むデザインになっていることが前提として重要となる。循環型社会の文脈で見れば、nomadogiは資源の再利用やシェアの観点から、“正しい”システムと言える。しかしそれ以上に着目すべきは、融通を利かせ、あらゆる状況で手軽に場づくりを進めながら、その姿が共感を広げることで、人と人、都市と人との関係が醸成される点にあるのだと思う。

どのような場所にするか一緒に考えながら対話ができること。材料を貸し借りすれば様々なスケールの場づくりに適応できること。協働した結果が形に現れること。それらが手軽に・勝手にサイクルし、人や都市の間に関係が立ち上がっていくのである。

現代都市では、お金やサービスによって関係が代替される場面が多い。しかし本来、都市の豊かさは、人間が小さな協力を重ねながら関係を築いていくことの中にあっただ。「融通性」のある存在が、共感を広げ協力関係が循環することで、社会は少しずつ切り開かれていくのではないかと思う。

●設計職能の広がり

以上のように振り返る中で、設計者が社会にできることの広がりについても考えさせられた。建築物をつくることを通してだけでなく、「プロジェクト未満」の段階でも設計の職能が人や都市の間の関係にアプローチできる余地がある。実際にU35各メンバーの業務におけるクライアントからの要望がきっかけとなり、nomadogiによる場づくりが行われたケースも生まれている。まだ建築の与件化がされていない小さな要望や都市への関心に対して、可変的なプロダクトや小さな場づくりを行いながら、クライアントや社会との対話を始めることができる。nomadogiのような存在を介することで、設計者は建築をつくるだけでなく、もっと軽やかに人や都市、社会の要望に寄り添うことができる。建築を通じて社会に貢献する設計者の新しい役割が見えてくる。

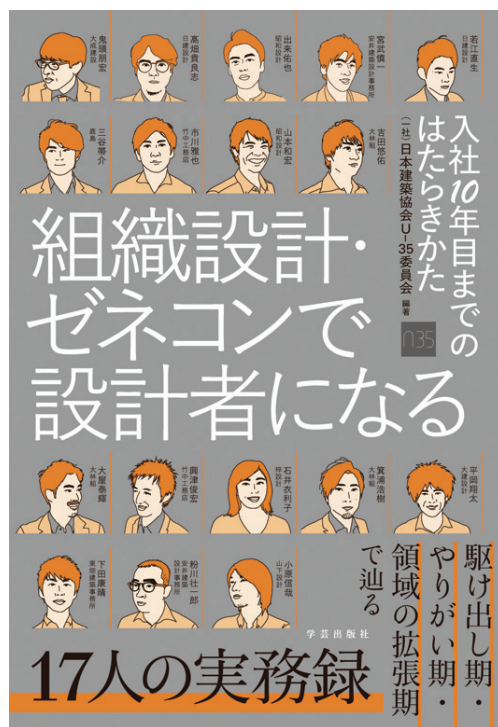
●協力が循環する社会へ

今後は、nomadogiの考えを守りつつ、より共感性を高めるためにnomadogiの意匠登録や商標登録、より大きなエコロジーとの接続を目指しての木の国産材化、アクセシビリティをより高いものとするための発注・制作プロセスのデジタル化などを検討している。nomadogi自体やnomadogiを介しての設計者の役割を、さらに社会へ拓いていきたいと考えている。

最近では、FabCafe Kyotoをハブにしながら、nomadogiの貸し借りや空間づくりの協働の関係も生まれ始めている。場づくりを考える者同士がつながり、都市の中に小さな“nomadogi commons”ができてつつある。目指しているのは、単なる製品の普及やサービスの提供ではなく、「協力して関係をつくる文化」の形成だ。これからの人間と都市、社会のために設計者ができることを考え続けていきたい。(文責：倉知)

『組織設計・ゼネコンで設計者になる』

販売中



組織設計事務所やゼネコン設計部で働く社会人1～10年目の若手設計者たちは、日々の仕事にどんなやりがいを感じ、どんな壁にぶつかって成長していくのか。建築・都市プロジェクトの最前線で働いてきた経験や学びを共有し、所属組織を超えて互いに切磋琢磨する日本建築協会 U-35 委員会のメンバーが、リアルな実体験を持ち寄る。

組織設計・ゼネコンで設計者になる
入社10年目までのはたらきかた

(一社)日本建築協会 U-35 委員会 編著
四六判・224頁・2200円+税・学芸出版社

会員特別割引販売

購入ご希望の方は hensyu@aj.or.jp へご連絡ください

1章 無我夢中の駆け出し期 (1～3年目)

- ・ 建築は無数の対話でできている
- ・ だれよりも早く手を動かす
- ・ 「20年先」を提案する設計者になる
- ・ 施主のイメージから可能性を広げる力
- ・ コンセプトを見える化してコラボレーションする

座談会① 自分の無知を思い知らされる駆け出し期
社会を見つめ、「建築」の領域を拡張する
社外活動コラムⅠ 学生と一緒に次世代の空間を構想する

2章 難局こそやりがい期 (4～7年目)

- ・ 先入観を乗り越える楽しさ
- ・ ベテランに支えられつつプロジェクトの舵を取る
- ・ ミリ単位の調整でアイデアを実現する
- ・ 一歩踏み込んだデザインをチームで実現する
- ・ 工業デザインの精度でゼロから寸法を問い直す
- ・ ニーズをシーンに変換するユーザーヒアリング


座談会② 自信を掴みつつ、葛藤も生まれるやりがい期
社外活動コラムⅡ まちに飛び出てフィールドワークを行う

3章 デザイン領域の拡張期 (8～10年目)

- ・ 前例のないディテールを編み出す
- ・ 計画に潜在する公共性をデザインコードにする
- ・ 積層型大規模木造のロールモデルをつくる
- ・ 組織のチームプレーを見つめ直す
- ・ チームを導くトータルディレクション
- ・ 事業性を満たしつつ一歩先の価値を提案する


座談会③ 自らの責任のもと、多角的な視野で動ける拡張期
社外活動コラムⅢ 時代のニーズを探り、自らまちを楽しむ
社外活動コラムⅣ 建築の外側で、業種を超えて社会を考える
時代の変化と建築、設計者

(一社)日本建築協会 U-35 委員会



日本建築協会内の若手設計者を
中心に、主に組織に属する概ね
35歳以下の設計者で構成され
る。関西を拠点に、建築におけ
る多様な価値の発信を目的とし
て組織を超えたプラットフォーム
づくりや都市のフィールド
ワークなどを行う。

U-35 委員会 HP
(書籍詳細はこちら)



〈第9回建築セミナー〉

イラストと計算例でわかる 外装材の耐風設計・施工

講師 西 博康 西建築エンジニアリング相談室 代表

司会進行・記録 中尾勝悦

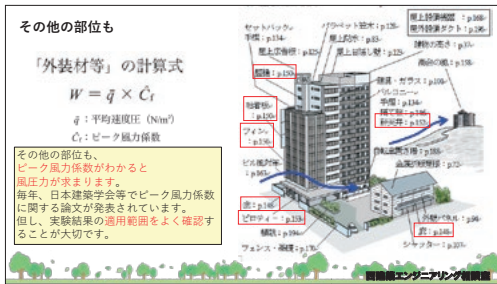
日本建築協会出版委員会委員長

2026年4月15日（木）にTOTOテクニカルセンター大阪にて、〈第9回建築セミナー〉を開催しました。講師は、出版委員会前委員長の西博康氏。受講者は40名を超え、好評を得ました。

セミナーのテキスト『イラストと計算例でわかる 外装材の耐風設計・施工』は、外装材の耐風設計・施工の要点を建物の部位別にイラストや計算例を交えて分かり易く記された実務的な参考書です。

セミナーの冒頭、2018年に関西を襲った台風21号の凄まじい動画が紹介され、参加者は当時の現場に引き込まれました。西氏は、その時の被害の大きさ、被害を受けた建築主が次の瞬間、加害者側となる現実、そして設計者や建築技術者が外装材の耐風設計・施工についてあまり理解されていない実態を把握し、我々建築に携わる者は、お客様を被害者にも加害者にもさせてはいけないと本書の作成を決意したとのことでした。

外装材の耐風検討が難しいと思われる理由として、次の点を掲げました。①告示という行政用語が分かり難かつ参考書が無いこと ②告示と日本建築学会の荷重指針とは考え方が異なること ③構造骨組みと外装材は考え方が異なること ④意味が全く異なる類似の記号が多いこと。しかしながら、法令で定められた検討行為を行わないことや予見可能な危険を回避しないことは不法行為責任を負うこととなり、外装材の飛散防止は重要な課題とされます。



分かり難いとされる外装材の耐風設計について西氏はイラストを交えて分かり易く説明されました。外装材の風圧力は「 $W = \bar{q} \times C_i$ 」(W: 風圧力、 \bar{q} : 平均速度圧、 C_i : ピーク風力係数)。これさえ分かれば風圧力の計算はもう簡単!と普段聞き馴染みのない専門用語も、その現象についてイラストを交えて説明頂き、参加者の皆さんは腑に落ちた

様子で聞き入っていました。計算の基本の説明の後、具体的な部位ごとの説明がありました。シャッターは、実は曲げ材ではなく、張力材として検討されている。その反面、反力となるシャッター両端の鉄骨には大きな力が発生し、そのことに気付いていない構造設計者も多いとのこと。またシャッターが損傷すると、建物自体が閉鎖型から開放型へとモデルが変わり、風圧力が大きくなり屋根が損傷することがあること。手摺の風圧力は、コーナー部やセットバックバルコニーでとても大きくなることや、手摺を設置する躯体側の検討があまり行われていないとのことでした。バルコニーPC板を製作した後に、躯体側の強度が不足していることに気付くと大きな手戻りや損失を生じること、外構のフェンスでメッシュフェンスを竣工後に目隠しタイプに変えると風圧力がとても大きくなり基礎が根本的に持たないことなど多岐に渡り設計時の配慮が必要な部位の説明がありました。

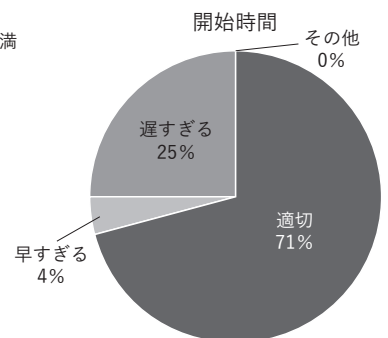
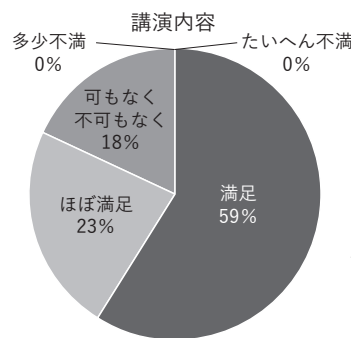
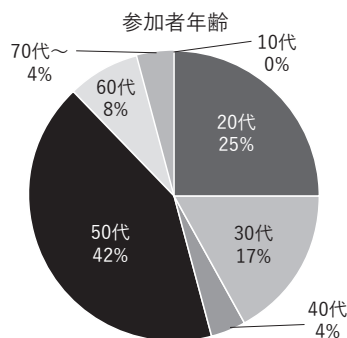
本書に記載がない事象の紹介も多々ありました。地表面相度区分Ⅲと思われる海岸から離れた地域でも、河川が直線で1.5km以上続いた場所の突き当りでは被害が発生していること、屋上にソーラーパネルを設置する際に留意すべきこと、更には超高層建物の周辺で車が何台も転がって激突した事象の解説や留意すべきことなど…。参加者の皆さんは最初から最後まで食い入るように聞かれていたことが印象的でした。



セミナー終了後、参加者からは、「難しいテーマですが分かり易かった!」「漸く、 E と E_r (ともに風速の高さ方向の違いを表す係数)の違いが分かった!」「内容が充実しているので帰ったら仲間に伝える!」などのコメントを頂きました。ご参加頂いた皆様、ありがとうございました。

アンケート集計結果

参加者は、設計事務所・ゼネコン・外装材メーカー・大学教授・弁護士など幅広く参加頂きました。アンケートの回答率は57%。参加者は50代を中心に20代から70代以上まで幅広く、満足・ほぼ満足の回答が合わせて82%でした。開始時間は18時でしたが、適切との回答が71%、午後の勤務時間帯での開催要望が25%ありました。



協会誌『建築と社会』掲載文における 「著作権」についてのお知らせとお願い

一般社団法人日本建築協会（以下「本会」という）では、「著作権」に関して、協会誌「建築と社会」2018年6月号において『掲載された論文・記事の著作権を著者から本会に譲渡願うこと』とお願いをさせて頂きましたが、時代背景も変わってきたことから、著作権について、新たに以下の様に規定いたします。

1. 著作権について

- ・本誌に掲載された個々の論文・記事・図面・写真等の著作物の著作権は、各執筆者、制作者である著作者に帰属するものとします。
- ・協会誌「建築と社会」、協会WEBサイトにおける編集著作権は、発行者、制作者である本会に帰属するものとします。

2. 著作者人格権について

- ・著作物について、円滑な編集・公開のために、誤字脱字の修正や見出しの変更など、本会が必要と認める範囲で手直しをさせて頂き、可能性のあるため、本誌にご投稿いただくことで、同一性保持権を行使されないことにご同意いただいたものとします。なお本会は、著作者の名誉を損なうことのないよう十分に留意いたします。

3. 著作者の責任

- ・著作者は、著作物が第三者の著作権・肖像権・その他の権利を侵害しないことを保証するものとします。
- ・著作物に関して第三者から権利侵害等の申し立てがあった場合は、著作者ご自身の責任において解決いただくものとします。

4. 本会への利用許諾

著作者は、本誌にご投稿いただくことで、ご自身の著作物について、本会が以下の目的で利用することを非独占的に許諾していただくものとします。

- ・協会誌「建築と社会」での掲載（複製）、及び頒布
- ・本会ウェブサイト等での公衆送信（会員限定公開を含む）
- ・本会が協会誌「建築と社会」掲載記事を記念誌等で転載再利用すること（データを再編集し転載することを含む）
- ・第三者から本誌掲載著作物について利用申請があった場合、本会がその利用を許諾すること

5. 著作者ご自身の利用について

本会に利用を許諾いただいた後も、著作者ご本人の権利として、ご自身の著作物を、ご自身の論文集への再録・ウェブサイトでの公開・研究・教育活動などで自由に利用することを、何ら妨げるものではありません。

6. 過去にご寄稿いただいた著作物について

過去に本誌にご寄稿いただいた著作物についても、上記趣旨をご理解いただき、ご同意頂いたものとして、取り扱わせていただきます。

【問い合わせ先】

一般社団法人 日本建築協会
担当：柏原
TEL：06-6946-6981
E-mail：kyoku-tyo@aaj.or.jp

個人会員の皆さまへ

ご応募お待ちしております。招待券プレゼント！

応募フォームは協会ホームページの会員専用ページ内にあります。

応募期限は毎月20日、厳正に抽選して当選者を決定します。(初回申込者を優先いたします。)

① 江戸東京博物館リニューアル記念特別展 5組 「洋館 明治の夢と挑戦」

文明開化の息吹を体験する、55日間



左／「武蔵百景之内 江戸橋より日本橋の景」小林清親／画 1882年（明治15）【前期】 右／「江戸築地保互留之図」1868年（明治元）【後期】
左右とも東京都江戸東京博物館蔵

江戸から明治への転換は、長きにわたり閉ざされていた西洋文化の入口が開き、洋風建築の流入が一時にはじまることを意味した。本展では、人びとが建築に夢を抱いた「明治の洋館」の世界を、多種多様な資料と立体的な展示手法で描く。

大工棟梁による擬洋風建築、外国人技術者・建築家による非本格的洋館や本格的西洋建築、工部大学校卒業生等の挑戦、そして皇族や上流階級のための大邸宅に至るまで、日本の建築史上稀にみる大変革の時代の多彩な成果を活写する。



江戸東京博物館は、江戸東京の歴史と文化を振り返り、未来の都市と生活を考える場として1993年3月に開館。

約4年間の大規模改修工事を経て、本年3月31日にリニューアルオープンした。

期 間 6月23日(火)～8月23日(日) ※展示替あり

【前期】6/23(火)～7/26(日)

【後期】7/28(火)～8/23(日)

9:30～17:30 ※土曜日は19:30まで

※入館は閉館の30分前まで

休 館 日 月曜日(7/20、8/10除く)、7/21(火)

観 覧 料 一般1,600円、大学生・専門学校生1,280円、

65歳以上800円、高校生以下無料

会 場 東京都江戸東京博物館
1階特別展示室

東京都墨田区横綱1-4-1

TEL.03-3626-9974



② トニー・アウスラー：技術と霊知のはざま 5組 ～魔術、メディア、アート～

マルチメディアアートの先駆者 日本初の大規模個展



《スペキュラー》2021年 本展のための展示スケッチ

トニー・アウスラー(1957年-)は、映像、彫刻、音、光、言葉を組み合わせた不可思議な没入型インスタレーションで知られるアーティストである。今では広く見ることのできるプロジェクトマッピングといった、立体物に映像を投影する表現スタイルを切り開いたパイオニアとして高い評価を得ている。

本展では、現代美術家のジム・ショーも参加した初期作品《プライベート》(1994-1997年)や《スペキュラー》(2021年)などの主要作を通覧するとともに、制作開始から四半世紀を超えて作品化される未発表作、そして本展のためのサイトスペシフィックな最新作を発表する。

期 間 7月3日(金)～9月27日(日)

10:00～19:00 ※金・土曜日 20:00まで

※入場は閉館の30分前まで

休 館 日 不定休

観 覧 料 一般2,400円、大学生・専門学校生1,400円、

中学生・高校生800円

*小学生以下無料(18歳以上の保護者同伴が必要)

*身体障害者手帳・愛の手帳・療育手帳・精神障害者

保健手帳・被爆者手帳を所持する方もチケットの

購入が必要。ただし、介助者(18歳以上)は1名

まで無料で同伴可能。

会 場 TOKYO NODE GALLERY A/B/C

東京都港区虎ノ門2-6-2

虎ノ門ヒルズ ステーションタワー45F

TEL.03-6433-8200 (10:00～18:00)



#えどはく#リニューアルオープン#洋風建築#都市風景#文明開化

#マルチメディアアート#デヴィッド・ポウイ#カメラ

会員IDやパスワードがご不明な場合は、日本建築協会総務課
 (soumu@aaj.or.jp) までお問合せください。
 招待券は当協会より郵送でお届けいたします。
 当選発表は招待券の発送をもってかえさせていただきます。

information

③ | マリメッコ展 模様のちから 5組 | Marimekko: Art of Printmaking —Beauty, Dream, Love



左/図案：マイヤ・イソラ
 《ウニッコ》1964年/
 クリスティーナ・イソラ 2003年

© Marimekko Oyj Suomi-Finland Maija Isola/Kristina Isola 1964/2003
 右/《ウニッコ》マイヤ・イソラ 1964年
 © Marimekko Oyj Suomi-Finland Maija Isola 1964

フィンランド生まれのマリメッコは、ファッションやインテリアの枠を超え、新しいライフスタイルやコンセプトを提案するデザインハウスである。

本展は、マリメッコの創業者であるアルミ・ラティアの言葉が手ごかりに、様々な年代のドレスやアートワーク、ファブリックを通じて、マリメッコの創造の美学、また継承されるプリントメイキングの技に多角的な視点から光を当てることで、マリメッコの世界へ来場者を誘い、「模様のちから」を伝える。

期 間 7月4日(土)～9月6日(日)
 10:00～18:00 ※毎週金曜日 19:30まで
 ※入場は閉室の30分前まで
 休 館 日 月曜日(7/20のぞく)、7/21(火)
 観 覧 料 一般1,900円、大高生1,300円、中小生700円
 *未就学児は無料(ただし、要保護者同伴)。
 *学生料金で入場の際には学生証提示が必要。

巡回情報・東京都庭園美術館10/3～12/20
 ひろしま美術館2027/1/3～3/28
 ※北九州、富山、名古屋、長崎ほかへ巡回予定

会 場 京都文化博物館 4・3F展示室
 京都市中京区三条高倉

TEL. 075-222-0888



#アルミ・ラティア#アイコニック#プリントファクトリー

④ | 奈良監獄ミュージアム 3組 | by 星野リゾート

美しき監獄からの問いかけ



C棟 声を縫う/西尾美也

重要文化財「旧奈良監獄」の保存活用事業として、2026年4月27日に奈良県・奈良市で「奈良監獄ミュージアム by 星野リゾート」が開館した。

日本の近代化の象徴として、奈良・長崎・金沢・千葉・鹿児島に築かれた「明治五大監獄」。その中で唯一、全貌が遺る貴重な文化財が、新たなミュージアムへと生まれ変わった。

展示は「歴史と建築」(A棟)、「規律と暮らし」(B棟)、「監獄とアート」(C棟)をテーマに構成されている。

旧奈良監獄は、国家プロジェクトとして、1908年に誕生した。1946年には奈良少年刑務所と改名、その後、2017年に国の重要文化財に指定された。
 (設計/山下啓次郎)



期 間 4月27日(月) オープン
 9:00～17:00
 ※入館は閉館の60分前まで
 休 館 日 なし
 観 覧 料 大人2,500円、大学生・高校生1,500円
 小学生・中学生700円、未就学児無料
 *奈良県在住の大人2,000円
 *身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・被爆者健康手帳などを有する方と介助者1名まで各700円

会 場 奈良監獄ミュージアム
 奈良市般若寺町18

TEL.0742-94-8512



#奈良監獄ミュージアム#重要文化財#星野リゾート#旧奈良監獄

常任理事会

第1回常任理事会

4月22日(水) 17:30~19:50

協会会議室&WEB

出席者 指田会長ほか11名

- 議事 (1) 役員候補者について
 (2) 「建築と社会」への別紙同封について
 (3) 「建築と社会」配本の再検討について
 (4) 「建築と社会」寄贈先の見直しについて
 (5) 理事の役割について
 (6) U35ノマドギの取り組みについて
 (7) 理事会後の懇親会について
 (8) OMM賃料の値上げについて
 (9) 常翔学園主催「記念シンポジウム」への後援

編集企画委員会

第1回編集企画委員会

4月9日(木) 18:00~18:40

協会会議室&WEB

出席者 三宗委員長ほか11名

- 議事 (1) 5月号 環境分科会・状況報告
 (2) 6月号 片岡安賞・状況報告
 (3) 7月号 青年技術者・状況報告
 (4) 8月号 建築デザイン分科会・状況報告
 (5) その他 新入会員ガイダンスについて

第1回建築デザイン分科会

4月24日(金) 19:00~19:30

協会会議室&WEB

出席者 杉江幹事ほか6名

- 議事 (1) 委員交代について
 (2) 8月号特集企画について
 (3) その他

第1回構造分科会

4月15日(水) 18:00~19:00

協会会議室&WEB

出席者 吉村幹事ほか6名

- 議事 (1) 新幹事あいさつ
 (2) 構造の頁について
 (3) 11月号特集について

第1回環境分科会

4月8日(水) 18:00~19:00

WEB

出席者 橋本幹事ほか10名

- 議事 (1) 「設備の頁」の企画
 (2) 5月号特集について
 (3) その他

第1回施工材料分科会

4月16日(木) 16:00~17:00

協会会議室&WEB

出席者 藤丸幹事ほか5名

- 議事 (1) 編集企画委員会の報告
 (2) 4月号振り返り
 (3) 10月号特集について
 (4) 編集企画委員会出席について

第1回法令分科会

4月21日(火) 16:00~16:50

協会会議室&WEB

出席者 時見幹事ほか7名

- 議事 (1) 4月号レビュー
 (2) 9月号について
 (3) 新入会員ガイダンス資料
 (4) 法令コーナー

第1回ひと・まち・建築小委員会

4月23日(木) 19:00~20:00

協会会議室&WEB

出席者 澤田小委員長ほか4名

- 議事 (1) 作品の選定
 (2) 作品の掲載状況、予定
 (3) gallery掲載報告、予定
 (4) その他

事業委員会

第1回情報見学小委員会

4月9日(木) 18:00~19:00

OMMミーティングルーム【4階W1室】&WEB

出席者 本田事業委員長、奥村小委員長ほか17名

- 議事 (1) 本年度の事業について
 (2) その他

第1回CCCフォーラム

4月20日(月) 19:00~20:00

WEB

出席者 本田事業委員長、本田小委員長ほか7名

- 議事 (1) 2026年度~2027年度体制
 (2) 第12回青年技術者交流会(2026年5月)に向けた準備
 (3) CCCフォーラム ロゴデザインの決定
 (4) その他

出版委員会

第1回出版委員会

4月28日(火) 17:00~18:20

協会会議室&WEB

出席者 中尾委員長ほか6名

- 議事 (1) 今期のメンバー報告
 (2) 既刊書籍経過報告
 (3) 制作進行中の書籍
 (4) セミナー等について
 (5) 出版に関する座談会について
 (6) 新規出版企画について
 (7) 総会用資料案について

教育委員会

工高生教育小委員会

4月は休会

第1回史料研究会

4月20日(月) 18:00~19:00

協会会議室&WEB

出席者 橋寺委員長ほか5名

- 議事 (1) 「再読」の担当について
 (2) 「先達に聞く」について
 (3) イケフェス大阪のイベントについて

未来創生プロジェクト

第1回建築次世代委員会

4月23日(木) 18:30~19:30

協会会議室&WEB

出席者 中村未来創生委員長、菅原小委員長ほか2名

- 議事 (1) リアル見学会
 (2) 学生交流・広報企画
 (3) その他

第1回2040分科会

4月15日(水) 19:30~21:00

協会会議室&WEB

出席者 吉田リーダーほか7名

- 議事 (1) 活動報告の掲載について
 (2) 今後の活動について
 (3) その他

第1回U-35委員会

4月9日(木) 19:30~22:00

協会会議室&WEB

出席者 三井リーダーほか13名

- 議事 (1) 新メンバー紹介
 (2) 今後の活動について
 (3) その他

講演会

第9回建築セミナー

4月15日(水) 18:00~20:00

TOTOテクニカルセンター大阪2F

講師 西博康

進行 中尾出版委員長

挨拶 指田会長

受講者 42名

編集企画委員会(2026年4月30日現在)

副会長(編集担当)

川合 智明 △橋本 直樹

理事(編集担当)

木場 将雄 大橋 巧

佐藤 榮一 北野 勝也

中尾 勝悦 寺井 千佳

中原 岳夫 仲村 憲一

西 博康 浜本 誠治

橋寺 知子 榊井 貴廣

松島 茂樹 齋藤 悠輔

◎三宗 知之 持留 崇志

吉村 英祐 松本 健

副委員長

△藤丸 啓一

岡村 吉展 今井 信之

桑原 悠樹 上原 秀介

古谷 隆祥 門野 陽

編集委員 河合 智寛

■特集小委員会 能瀬 直樹

〈計画分科会〉 南野 貴洋

△飯田 匡 森田 健

田中 直人 吉田 正友

松田奈緒子 〇〇〇〇

山崎 晋一 〇〇〇〇

吉村 英祐 〇〇〇〇

浦山 豊隆 〇〇〇〇

〈建築デザイン分科会〉 吉田 悠起

△杉江 順哉 渡邊 優人

小林 敬政 〇〇〇〇

小林 啓明 〇〇〇〇

篠木 大輔 〇〇〇〇

田中 和八 〇〇〇〇

田中 裕大 〇〇〇〇

中村 匠吾 〇〇〇〇

平岡 翔太 〇〇〇〇

松本 和也 〇〇〇〇

米山 剛史 〇〇〇〇

〈空間デザイン分科会〉 〇〇〇〇

△黒柳 亮 〇〇〇〇

東 実千代 〇〇〇〇

西濱 由美 〇〇〇〇

藤枝 大樹 〇〇〇〇

古賀 涼花 〇〇〇〇

佐々木琉偉 〇〇〇〇

清水 香澄 〇〇〇〇

宗田 菜々 〇〇〇〇

△黒柳 亮 〇〇〇〇

東 実千代 〇〇〇〇

西濱 由美 〇〇〇〇

藤枝 大樹 〇〇〇〇

古賀 涼花 〇〇〇〇

佐々木琉偉 〇〇〇〇

清水 香澄 〇〇〇〇

宗田 菜々 〇〇〇〇

△吉村 純哉 〇〇〇〇

古島 正博 〇〇〇〇

榊原 啓太 〇〇〇〇

正野 和司 〇〇〇〇

瀧野 敦夫 〇〇〇〇

多田 全希 〇〇〇〇

萩原 学 〇〇〇〇

水島 靖典 〇〇〇〇

藪田 智裕 〇〇〇〇

山下 真輝 〇〇〇〇

山本 佳明 〇〇〇〇

(順不同)

◎委員長

▲小委員会委員長

△幹事・小委員会

副委員長

印刷 2026年5月25日

発行 2026年6月1日

発行人 一般社団法人日本建築協会

大阪市中央区大手前1-7-31

電話 06-6946-6981

印刷所 榊中島弘文堂印刷所

定価 1390円(税込)

©「建築と社会」誌の記事の無断転載を禁じます

お客様の抱える問題やニーズに
より速やかに、より丁寧に対応できるように

企画・デザイン、制作、製版、印刷

株式会社 中島弘文堂印刷所

本 社 〒537-0002 大阪市東成区深江南2丁目6番8号
TEL.06-6976-8761 / FAX.06-6976-8765

東京支社 〒101-0052 東京都千代田区神田小川町1丁目4-2 風雲堂別館ビル2階
TEL.03-3526-5580 / FAX.03-3526-5582

<http://www.n-kobundo.co.jp/>

地球環境を守り、100年建築に貢献する

NACL のアルミ表面処理

株式会社 日本電気化学工業所

<http://nacl.jp> E-mail: sc@nacl.co.jp

本部営業部 〒560-0036 大阪府豊中市蛍池西町2丁目7番26号 NACLビル2階

TEL (06)6843-1235(代) FAX (06)6853-1632

東京事務所 〒111-0051 東京都台東区蔵前2丁目6-7

TEL (03)3862-0978(代) FAX (03)3862-7098

年間広告のご案内

協会誌「建築と社会」では、後付部分に
広告スペースを設けております。
1年を通じて、社名広告を掲載されませんか？

掲載期間：4月号～翌年3月号までの1年間

掲載料：48,000円（消費税込み）

サイズ：1/12頁（タテ40mm×ヨコ90mm）

※毎月掲載誌をご送付します。

※原稿は1年間同じ原稿を使用します。

お問い合わせ先

一般社団法人 日本建築協会 中内・井筒

TEL : 06-6946-6981 FAX : 06-6946-6984 E-mail : koukoku@aj.or.jp

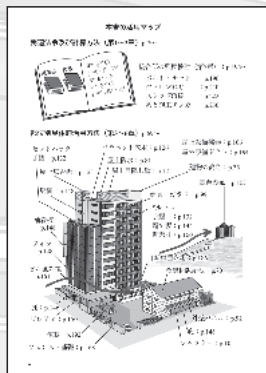
イラストと計算例でわかる 外装材の耐風設計・施工



日本建築協会 企画
西博康 著

A5判・256頁・本体 2700円+税

あなたは何もチェックせずに
「OK」の2文字だけを探していませんか？



屋根・外壁・笠木・手摺・
屋上目隠し壁・外構設置物…など、
多発する台風による飛散被害。
風圧力の設定からビスの使い方まで、
お客様を被害者・加害者にしないための
知識を実務者視点でやさしく解説。

設計者
施工者
外装業者
必携

学芸出版社

〒600-8216
京都市下京区木津屋橋通西洞院東入

Tel 075-343-0811
Fax 075-343-0810

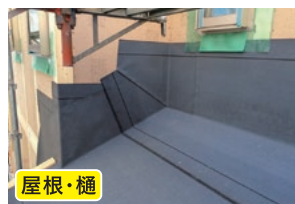
http://www.gakugei-pub.jp/
E-mail info@gakugei-pub.jp

現場写真 でわかる

木造住宅工事 の納まり



基礎



屋根・樋



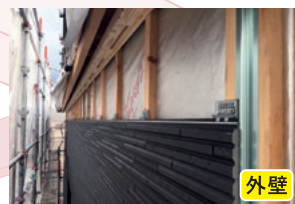
FRP防水



電気設備



木工



外壁



内装・左官仕上



給排水設備

春山浩司 著 / 玉水新吾 監修 / 日本建築協会 企画
A5判・256頁・本体 2800円+税

職人の技量が
バラバラで、
チェックの仕方が
わからない…

設計と施工の
連絡不足で
無理な現場納めが
横行している…

顧客満足につながるノウハウを
現場写真 + 図面 + ポイント整理 で
ギュッと1冊にまとめました。



そんな
施工管理者必携!

学芸出版社

〒600-8216
京都市下京区木津屋橋通西洞院東入

Tel 075-343-0811
Fax 075-343-0810

http://www.gakugei-pub.jp/
E-mail info@gakugei-pub.jp